
魔法少女リリカルなのはA's Z

超魔導士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA・S Z

【Nコード】

N2846K

【作者名】

超魔導士

【あらすじ】

魔人ブウとの戦いに決着を着けた孫悟空は突如、光に包まれてしまった。

気が付くと、そこは海鳴市だった。

そこで、悟空は一人の少女と出会った。

時期は、A・Sです。

* 作者はド素人で、描写が下手で、文才が低いです*

プロローグ（前書き）

初投稿で駄作かもしれませんが、よろしくお願ひします。

プロローグ

界王神界で魔神ブウと孫悟空との戦いに決着がつこうとしていた。

「おめえはすげえよ、よく頑張ったたった1人で、今度はいい奴に生まれ変われよ、一対一で勝負して待つてかな。」

そう言つて悟空は超元気玉にさらに力を入れた。

「はあああああ！！！！！！！」

そして、魔神ブウを完全に消滅させた。

「ふう、終わった〜」

そして、悟空は地球に帰ろうとしていた。その時、

突如、光が悟空を包み込んだ。

「うわ、な、なんだなんだ!?!」

そして、光が収まった時、悟空の姿はなかった。

プロローグ（後書き）

オッス、オラ悟空

オラ突然光に包まれてみたこともねえ場所についちまった。
どうすつか困ってた時、車椅子に乗った一人の女の子と会ったんだ。

次回・魔法少女リリカルなのはA・S・Z

ここはどこだ？見知らぬ場所に降りた悟空

「あの人、あんなとこで何しとるんやろ？」

第一話ここはどこだ？見知らぬ場所に降りた悟空（前書き）

関西弁難しい

第一話「ここはどこだ？見知らぬ場所に降りた悟空」

「ん……あれ？ここは」

悟空は暗い森の中で目を覚ました。

「オラたしか変な光に包まれて気失って、それから……」
悟空が必死に思い出そうとしていたその時、

ぐううううううう！

悟空の腹の虫が鳴った。

「お？……はは、そうだオラ魔神ブウと戦った後だから腹減っちゃった。でもここはどこだ？……ま、いつか。とりあえず街とかなんかねえんかな？」

悟空は街を探すため歩き出した。

数時間後、

悟空は誰もいない公園に辿り着いた。
悟空はベンチに座っていた。

「はあゝ、それにしてもここは行ってえ何処なんだあ。それに、腹減ったあゝ。」

さすがの悟空も、困り果てた。

その時、

「あゝ、こんな所で何してはるんですか？」
と、誰かが声を掛けてきた。

「ん？」

視線を上げると、車椅子に乗った少女が心配そうな顔で悟空の前に居た。

そこで、悟空は聞いてみた。

「そつだ、おめえここが何処か知らねえか？」

「え？ここは海鳴市ですけど。」

(ウミナリ？聞いた事ねえな。)
悟空が考えていると、

「あの、家に帰らないですか？」
少女が聞いてきた。

「そつだ、オラ今家がねえんだ。」
悟空は今思った、自分には家が無いことを。

「え！？住む場所がないんですか！？」
少女はそう言うとか何かを考え出した。

そして、少ししてこう言った。

「だったら、うちの家に住みます？」

「?」

第一話「ここはどこだ？見知らぬ場所に降りた悟空（後書き）」

オッス、オラ悟空

オラ八神はやてちゃんっちゆう少女の家に住む事になったんだ。

そして、ある日はやてちゃんの部屋から妙な気配がしたんだ。

そこには、ヴォルケンリッターと名乗る謎の四人組が現れたんだ。

次回・魔法少女リリカルなのは S Z

悟空危うし ヴォルケンリッターの実力

「おめえら一体何もんだ。」

第二話悟空危うしヴォルケンリッターの実力（前書き）

初の戦闘描写ががんばってみました。

第二話悟空危うしヴォルケンリッターの実力

悟空は今、さつき出会った少女の家にいる。
そして、悟空と少女は自己紹介をしていた。

「いや、わりいな。オラをこの家に住まわせてもらって。」

「いえ、困った時はお互い様って言うやないですか。それに、うち一人暮らしで家族が増えたみたいで、嬉しいんです。」

「へえ、おめえすげえんだな。オラだったら一人じゃ生きていけねえぞ。」

「まあ、そこは慣れですね。それと、うちは八神はやてって言います。だから、うちの事は【はやて】って言うってください。」

「わかった、はやてだな。オラは孫悟空って言うんだ。オラの事は好きに呼んでくれていいぞお。」

「じゃあ、【悟空】さんですね。」

と、悟空とはやてはしばらく話をしていた。

数分ほど、会話をしていたら……

ぐづううううう！

悟空の腹の虫が鳴った。それも、かなり大きな音で。

「あ……」

「もしかして、お腹空いてはるんですか？」

「はは、そうだったオラすげえ腹減っちゃまってたんだ。」

「じゃあ、今から夕飯作るんで待っててください。」

そして、はやては夕飯を作り始めた。

夕飯が出来て、悟空とはやては少し遅い食事をしていた。

しかし、はやては目を丸くして目の前の光景を見ていた。

その光景と言つのは、

バリバリッ、ムシヤムシヤッ、・・・・・・・・・・ゴクンッ

「ああ、食った食った。」

そう、悟空がとんでもない量の料理をはやての目の前で食べたからだ。

「よ、よくそんなに食べられますね・・・・・・・・。」

「ん？・・・まあ、オラはサイヤ人だかな。」

「サイヤ人？」

「まあ、簡単に言えばオラ宇宙人だな。」

と、はやてに衝撃的な事を言った悟空。

「い、悟空さんって宇宙人なんですか!？」

「ああ。」

その後、悟空ははやてに自分の事をいろいろ話した。

しばらくして・・・

「あ!?!もうこないな時間になってもうた。」

今の時刻は、すでに十一時を過ぎていた。

「じゃあ、うちはもう寝ますんで、悟空さんはお父さんの部屋を使ってください。寝間着もお父さんのを使ってください。」

「わりいな〜服まで貸してもらっちゃまって〜。」

「いえ、じゃあ悟空さん。おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ〜。」

そう言いつつ、はやては自分の部屋に向かった。

「さてと、オラもそろそろ寝るかあ〜。」

そして、悟空も自分が寝る部屋に向かった。

その時、

「ぐうおおお〜、がああああ〜。」

悟空は大きないびきを掻きながら寝ていた。

「がああああ〜……ん？」

悟空は何か妙な気配を察知した。

「なんだ？この妙な気配は、それに気もあまり多くねえな。だが、
気じゃねえ別のエネルギーを感じる。」

気はあまり感じないが、気とは別の【何か】を感じるのだ。
とりあえず、悟空は少ない気を探ってみた。

「……………はっ！はやての部屋か！！」

そう、気の近くには、はやての気も感じたのだ。

「くっ！はやて無事で居てくれ！！」

悟空は、はやての元に瞬間移動した。

「無礼って言うかさこいつ気失ってねえ？」

「何！？何ですって！？」

悟空が気を探っていた頃、はやての部屋には謎の四人組がいた。

「と、とりあえず病院に電話しましょう！」

金髪の女性が電話しようとする部屋を出ようとした。
その時、

シュンッ

一人の男が突然現れた、

そう悟空だ。

「コッコッ!!??」「」「」

四人組は突然現れた悟空に驚いた。

「!!?・・・おめえら、一体何もんだ。」

悟空も四人組に驚いたが、すぐに状況を理解し、四人組に威圧を込めて語りかけた。

「デメエこそ、何もんだ!!」

赤髪の女の子が悟空に向かって怒鳴りながら突っ込んで行った。

「待て、ヴィータ!!」

ピンク色の髪をポニーテールにした女性がヴィータと言う女の子を止めようとしたが、ヴィータは悟空を手に持ったハンマーで攻撃しようとしていた。

「くらええー!!!!!!!!」

ハンマーが悟空に当たろうとした時、悟空はハンマーを受け止め、

掴んだ。

「なっ!!!???」

そして、

「はああああ!!!!」

ヴィータごとハンマーを壁に叩きつけた。

「かはっ」

ヴィータは壁に叩きつけられた衝撃で気絶した。

「ヴィ、ヴィータちゃん」

金髪の女性がヴィータの元に駆け寄る。

「もう一度聞く、おめえらは一体何もんだ!!!」

そして、悟空は怒りを露にして四人組に向かって怒鳴った。

「我らは、闇の書の守護騎士【ヴォルケンリッター】。」

「ヴォルケンリッター?」

「今度は、我らの質問に答えてもらうぞ。貴様は何者だ。何故、主の元に居る。」

「オラは孫悟空だ。住む場所がねえオラに、はやてと一緒に住むかって提案したんでなあ、その提案に賛成して今一緒に住んでんだ。」

「そうか、だが我らはまだ貴様を信用できん。」

「じゃあ、どうすりゃ信用してくれんだあ？」

悟空は聞いてみた、

「我らに勝ってみせろ。」

「!?!?・・・ああ、いいぜ。受けてやるさ。」

悟空は返答に答えた。

ここは、海鳴公園上空

流石に部屋の中では狭いので屋外で戦う事になった。

「始めるぞ。」

「ああ。」

悟空はポニーテールの女性の問いに答えた。

悟空の前には、先程の四人組が居る。

四人組の服装は肌寒そうな薄着である。

対して、悟空の服装はいつも着ている胴着を着ている。

「始める前に、おめえらの名前教えてくれ。」
悟空は四人組に名前を尋ねた

「いいだろう。」

ポニーテールの女性は承諾した。

「私は、剣の騎士【シグナム】。」

「鉄槌の騎士【ヴィータ】。」

「湖の騎士【シャマル】。」

「盾の守護獣【ザファイラ】。」

「分かった。始める前にもう一つ言っておく。オラはぜってえ負けるわけいかねえからな、全力でいかしてもらっぞ。」

「我らも、そのつもりだ。」

互いに意気込みをぶつけ合った後、両者共構えを取った。

さっきまで吹いていた風が少しずつ弱まってきた。

そして、

風が止んだのと同時に、

両者共動いた。

「はああああああ!!」

シグナムはレヴァンティンを悟空目掛けて振り降ろした。

それを、悟空は体を捻り避け、そのまま勢いをつけシグナムの胴に回し蹴りを放った。

「うおりやああ!!」

「させん!!」

だが、その蹴りをザフィーラがシールドを張り、シグナムを守りシグナムが悟空の動きが止まった隙を突きレヴァンティンを横薙ぎに振る。

「くっ!!」

悟空はそれを後ろへ高速移動で避けた。だが、

「カートリッジロード!!」突如、上から声が聞こえ、悟空が上を向くと、

ヴィータが巨大なハンマーを持っていた。そして、

悟空に振り降ろした。悟空は避けようとしたが、突然現れた鎖が悟空を捕らえた。

「何!?!」 「ナイス、ザフィーラ。」

直撃した。

「くああああー!!」

悟空は吹っ飛び近くの山に激突した。

「……………やったか？」

ヴィータはそう呟いた。

山に激突した悟空は、

「いててえ、こりやちよつとヤベエな。」
所々、服が破けているが、悟空の身体は無傷だった。そして、悟空は思った。

（つええな、あいつら……………でもオラ、何だかワクワクしてきたぞ。）

そして、悟空は気を最大にまで高めた。

「なあ、シグナムこれってさ、あたしらの勝ちなんじゃないの？」

「ヴィータがシグナムに勝ったかどうか訊いている。」

「ああ、だが油断はするな。」

シグナムは悟空が山に激突してできたクレーターを見下ろしながらそう言った。

「ちえっ、分かったよ。」

ヴィータがそう答えた瞬間、

クレーターから金色の光の柱が天に向かってのびた。

「コッ!?!??」

シヤマルとザフィーラは目を見開き驚愕した。

「な、なんだよ!!あれ!!」

ヴィータは声を上げて驚いた。

しかし、シグナムだけは違った。

(そつだ、貴様はその程度じゃないだろう。)

そして、悟空がゆっくりと姿を現した。

四人は驚愕した。

外見が明らかに変化しているのだ、黒髪は逆立ち金髪になって、黒色の瞳が碧色に変わっていた。
そう、悟空は超サイヤ人になったのだ。

悟空はゆっくりと上昇しながらヴォルケンリッターの前に移動した。

「おい！！お前、一体何しやがった。何なんだよ、その姿！！」
「ウーイタは怒鳴りながら質問した。」

「超サイヤ人に変身したんだ。」

「……スーパーサイヤ人？」「……」

「そうだ。さてと、……よし！！始めようぜ、第二ラウンドだ。」
「
そう言うと、高速移動でシャマルの背後に移動し、首に手刀を入れた。
そして、

「うっ」

シャマルは気絶した。

「シャマル!!」

ザフィーラがシャマルの名を呼びながら、突っ込んで来た。

悟空は、高速移動でザフィーラの前に移動して、回転蹴りを放った。

ザフィーラはシールドを張ったが、悟空の蹴りにより、粉々に砕け散った。

「なっ!!??」

そして、悟空の蹴りはザフィーラの顔面を捉え、直撃した。

「グハアッ!!」

そのまま、ザフィーラは地面に激突して気絶した。

「クソッ!!ザフィーラまでやられちゃった。」

ヴェータは仲間が2人もやられ、悪態をついていた。

「アタシがぶっ潰してやる!!」

と言いながら、1人で突っ込んで行った。

「あと2人か」

悟空はそう呟いた。その時、

背後から気配がした、振り返るとヴィータが回転しながらハンマーを振ってきた。

「ラケーテン・ハンマー」

だが、悟空はその勢いのついたハンマーを蹴りで弾き飛ばした。

「何！？あたしのラケーテン・ハンマーを！？」

悟空はヴィータが動揺している隙を突き、高速移動で前に移動して、腹を殴った、

「ぐふっ」

さらに、回し蹴りでヴィータを蹴り飛ばした。

「うわあああー！！！」

ヴィータはそのままの勢いで建物に突っ込み気絶した。

「あとは、おめえだけだ。」

「ああ、そうだな。」

シグナムはそう返事をした。

「流石にオラも、もう気があまりねえからな。この一撃で終わらせるぞ!!！」

「分かった、ならば私もこの一撃で終わらせよう。私の全魔力を注ぎ込んで!!！」
だが、ある言葉に疑問を感じた。

(魔力?)

悟空は、その疑問を振り払って 気を限界まで溜め、かめはめ波の構えを取る。

シグナムもカートリッジをロードして剣に炎纏わせる。

「かああああ!!めええええ!!はああああ!!めええええ!!」

「はああああああ！カートリッジロード……！」

「波ああああああ……！」

「紫電一閃……！」

そして、悟空とシグナムの大技同士がぶつかり合った。

しかし、徐々に悟空が押され始めた。

（ま、まずいこのままじゃ負けちまう。）

（ふっ、この勝負私の勝ちだ……！）

シグナムが勝利を確信したその時、

悟空は最後の力を振り絞った。

「フルパワーだああああ！！！！」
と叫び、かめはめ波を最大限の威力にさせた。

そして、シグナムの紫電一閃を呑み込みそのまま、

どかああああん！！！！

シグナムに直撃した。

「くっ、無念。」

シグナムはそう言いつと落ちて行き、地面に落下して気絶した。

「はあ、はあ、・・・オラ、勝ったんだ。はあ、はあ、・・・
・は、はは、オラの勝ちだああ！！！！」
そう叫ぶと気を失い悟空も落下して行った。

余談だが、悟空は目を覚ましたヴォルケンリッター達に家に運ばれ、三日間眠ってしまったらしい。
そして、はやては心配でずっと悟空のそばを離れなかったそうなの。

第二話悟空危うしヴォルケンリッターの実力（後書き）

オッス、オラ悟空

オラあの後、ヴォルケンリッターの皆に認められて平和に生活してたんだ。

でも、ある日守護騎士達が夜中にどっかに出掛けちゃった。ついてってみると、誰かと戦ってたんだ。そこで、オラ2人の女の子出会ったんだ。

次回・魔法少女リリカルなのはA S Z

戦闘介入！！悟空魔法少女に遭遇する

「おめえ、魔法が使えるんか？」

第三話 戦闘介入！！悟空魔法少女に遭遇する（前書き）

感想、アドバイスがあったら教えてください。

第三話戦闘介入！！悟空魔法少女に遭遇する

ヴォルケンリッターとの決闘から早くも一週間が経ち、守護騎士達は悟空と話をして和解し、

シグナムとは、

「孫、今日も私と模擬戦してもらうぞ。」

「ああ、いいぞお。」

「ふっ、では始めるぞ。」

よく模擬戦をする仲になったり、

ヴィータとは、

「いっく〜」

「ん？どうしたヴィータ。」

「アイス買いに行こうぜ。」

「はは、ヴィータはアイス大好きだなあ。」

「べ、別にいいだろ。／＼／＼」
一緒に買い物に行く仲になったり、

ザフィーラとは、

「悟空。」

「なんだあ？ザフィーラ。」

「今度、お前の修行に付き合って良いか？」

「ああ、別に構わねえぞあ。」
共に、修行をする仲になったり、

シヤマルとは、

「悟空ちゃん。」

「どづした？シャマル。」

「これ食べてみてください。私が作ったんです。」

「おお！ーうまそおだなあ〜。」

ヒョイっ パクっ

「ムグムグ・・・ゴクン。」

「どづですか？」

「うめえぞお〜！ー！」

「よかつた〜。」

シャマルの料理を食べられる仲になったりして、とても仲良くなっている。

そして、今は八神家全員で晩ご飯を食べていた。今日は、鍋のようだ。

しかし、鍋は数十分で空になってしまった。
その原因は、

「ああ、うまかったあ。」

悟空である。

悟空は一人で半分以上を食べてしまった。

「孫、食べ過ぎだ。」

シグナムは呆れながら、そう言った。

「そうだ！！悟空、お前食い過ぎだ！！」
ヴィータは怒っていた。どうやら悟空のせいで少ししか食べられなかったようだ。

「まあまあ、いいじゃないですか。それに、私の料理も食べてくれましたし」

シヤマルは自分の料理を食べてもらって、上機嫌だ。

「・・・」

ザフィーラは無言を突き通していた。

「ははは、・・・」
はやては苦笑していた。

賑やかな晩ご飯を終えて、皆が寝静まった頃、

「ぐぐうう？・・・ん？」

悟空はある異変に気付いた。

「なんだあ？守護騎士達の気がねえ。」
家の中から、守護騎士達の気がなくなっていた。
そこで悟空は、探る範囲を広げた。

「ん〜」。・・・お？あつた！随分遠くに居るなあ。ま、いつか
あゝ、行けば分かる！！」

悟空はヴィータの元へ、瞬間移動した。

「くっ」

ヴィータはバインドに捕まっていた。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらつよ。」
長い金髪をツインテールにした女の子が、金色の魔力刃を向けながらそう言った。

(くそっ!!ここまでかよ!!)
ヴィータが諦めかけた
その時、

シュンッ

悟空が瞬間移動で金髪の女の子の後ろに現れた。

「く、悟空!?!」

ヴィータは驚き声を上げた。

「えっ!?!」

金髪の子は振り返った。

(ま、まったく気配を感じなかった!!)

「あれえ?おめえ、誰だあ?」

悟空は金髪の子に気付いて、声を掛けた。

「わ、私は、時空管理局所属フェイト・テストロッサです。貴方は
?」

「オラか?オラ、孫悟空だあ。で、おめえはフェイトだな。」
悟空はのんきにフェイトの質問に答えた。
そこへ、

「悟空!?!」

「あ、ヴィータ。おめえ、何で捕まってるんだあ?」
声を掛けられ、悟空はヴィータの存在に気付いた。

「お前こそ、どうしてここに居るんだよ!！」

「どうしてって言われても、オラ「貴方はこの子の仲間ですか」ん
?」

不意にフェイトが、質問してきた。

「いや、仲間うちゅうよりも家族だな。」

「そうですか。なら、貴方も拘束させてもらいます!！」

「ええ!?!」

悟空は拘束されると言われ、驚きの声を上げた。

「ちよちよ、ちよっと待てって!！」

「行きます!！」

フェイトは悟空の静止の声も聞かず、突っ込んで来た。

「はああ!！」

フェイトは魔力刃を鎌に変え、横薙ぎに振り悟空に斬りかかった。

だが、悟空に刃が当たる寸前、悟空の姿が消えた。

(消えた！？ど、どこに？)

フェイトが悟空を探していると、

「おめえ、人の話をちゃんと聞かねえと駄目だぞお。」

突然後ろから、声を掛けられ振り返ると、悟空はヴィータの前に移動していた。

(は、速い！！)

そして、フェイトは悟空に向けて魔力刃を、

「アークセイバー！！」

射出した。

「いい！？今度は投げた！！」悟空は驚き、咄嗟にヴィータを抱きかかえ、高速移動でその場から逃げた。

「また消えた！？」

フェイトは再び、悟空を探した。

一方、悟空はヴィータを抱きかかえたまま、建物の陰に居た。

「ふう〜、危ねえ危ねえ。」

「悟空。」

悟空が安心していたら、ヴィータが悟空の名前を呼んだ。

「?どうしたヴィータ。」

「いい加減、降ろせ。」

「ああ、わりいわりい。」悟空はそう言われ、ヴィータを降ろした。

「ヴィータ、おめえ大丈夫だったか？」

「大丈夫に決まってるだろ。」

「そっかあ。」

ヴィータに大丈夫だと言われ、悟空は安心した。

「えっと、悟空。」

「ん？なんだあ〜。」

「えと、そのあ、ありがとよ。」

ヴィータは顔を赤くして、悟空に礼を言った。

「はは、気にすんなって。それよりここに居るのは、おめえだけかあ？」

悟空はヴィータに質問した。

「いや、みんなここに居るぜ。」

「そっかあ、じゃあオラも何か手伝うぞあ。」

「いいのか？」

「ああ、みんなには世話になってっかんな。」
こうして、悟空はみんなに協力することになった。だが、

「ところでえ〜。」

「何だ？」

「なにを、すりゃあいいんだあ？」

ズゴオーー

ヴィータはズツコケた。

そして、ヴィータは悟空に目的を説明した。

「なるほど、はやての病気を治すために闇の書に魔力を蓄えさせる

ためだったんかあ。」

悟空はヴィータの説明を聞いて魔法と闇の書の事を知った。

「それより、シグナムの所に急ごうぜー!」

「わかった。じゃあ、オラに掴まれ。早く!」

「うん。」

ヴィータは悟空の背中に飛び乗った。

(・・・シグナムは、フェイトと戦ってるみてえだな。)

悟空は瞬間移動した。

「やるな!! テスタロッサ。」

「シグナムこそ。」

シグナムはフェイトと怒涛の斬撃戦を繰り広げていた。

「だが、ベルカの騎士は一对一では、負けん。」
再び二人がぶつかろうとした時、

シュンッ

「よお、シグナム」

「悟空！？それに、ヴィーター！！」

「シグナム！！悟空が協力してくれるって。」

「そうなのか？」

シグナムは悟空に聞いてみた。

「ああ。でえ〜、オラなにすりゃあいいんだ？」

「ザフィーラの加勢に行ってくれ。」

シグナムはザフィーラの加勢に向かうように頼んだ。

「わかった。えっとお〜・・・あつちか、じゃ行ってくる！！」
悟空は気を開放させ、ザフィーラの元へ飛んでいった。

悟空はザフィーラ元へ向かっている途中で、白い服を着た女の子が何かをするのを見つけた。

「何やってんだろ？」

そう言っていると、悟空は女の子の所へ高速移動で向かった。

>マスター、スターライトブレイカーチャージ完了しました。 <

「うん、ありがとうレイジングハート。」

栗色の髪をツインテールにした女の子が、自分のデバイス『レイジングハート』に礼を言い、スターライトブレイカーを放とうとした瞬間、

シュタッ

目の前に突然、男が現れた。
そう、悟空が高速移動で現れたのだ。

「え!?!」

「おめえ、誰だ?」

「えつと、た、高町なのはです。」
なのはは悟空の質問に、戸惑いながらも答えた。

「なのはって言うんか。でえ、おめえ何やってんだ?」
なのはが答えようとした
その時、

なのはの胸を手が貫いていた。
その手には、リンカーコアが握られていた。

「えつ!?!」

「いい!？」

なのはと悟空は驚いた。
そして、

シュウウウウ

リンカーコアが小さくなっていった。

「うっ!！」

なのはが苦しみだし、

「で、大丈夫か!？」

悟空はなのはのそばに寄った。

それにより、スターライトブレイカーの直線上に悟空が居なくなっ
たのでなのはは、スターライトブレイカーを

「スターライト・・・ブレイカアア!！」
放ち、結界を破壊した。

スターライトブレイカーを見た悟空は、

「す、すげえ。（あんなちっせえ体のどこにこんな力があるんだ。）
」
驚きを隠せなかった。

そして、なのはが倒れるのを見て、

「あ！？危ねえ！！」

悟空は咄嗟になのはを、抱き止めた。

「・・・大丈夫みてえだな。」

なのはは気を失い、眠っていたため悟空は安心した。

悟空はみんなと合流しようと思いを探ったが、

「あれえ〜？みんなもう帰っちゃってるぞお。」
守護騎士達は、既に家に戻っていた。つまり、悟空は置いてきぼり
されたようだ。

とりあえず、悟空は瞬間移動で家に帰った。

シュンッ

「みんな、ひでえぞあ。オラを置いてくなんてえ〜。」

「うわあ!!--」

悟空は瞬間移動で、帰ってきた。どうやら、ここはリビングで、ヴィータの後ろに瞬間移動したようだ。

そして、ヴィータは驚いてソファァーから転げ落ちた。

「悟空さん、無事だったんですね。でも、ごめんなさい悟空さんを置いていってしまつて。」

シャマルがに近寄り、悟空の無事を確認した後、謝った。

「まあ、気にしてねえからよあ。」

悟空がシャマルを慰めていると、

「悟空!!--てめえ、ビックリしたじゃねえか。」
ヴィータがハンマーで、悟空の頭を叩いてきた。

ゴンッ

「いててえ、いや、わりい驚かすつもりはなかったんだけどよお。」
悟空はヴィータに謝った。

「それより孫、本当にこれからはお前も我らと協力するの？」

「ああ、オラが決めたことだからな。」

「そうか、ありがとう。」

「はは、気にすんなって。」

悟空は笑いながら、そう返した。

「ふああ〜。オラもう寝るからよお。おやすみ〜。」
そう言くと、悟空は寝室に戻り、寝た。

悟空が魔法少女に出会った日であった。

第三話戦闘介入！！悟空魔法少女に遭遇する（後書き）

オッス、オラ悟空

オラ守護騎士のみんなに協力することになったんだ。

今回は、ヴェータとザフィーラの二人と一緒に蒐集活動をやったから、なのはとフェイトに再び会ったんだ。

しかし、なんかパワーアップしてるみてえだ。

気い付ける、二人とも！！

次回・魔法少女リリカルなのは S

新兵器！？カートリッジシステム始動

「カートリッジシステム？オラよくわかんねえぞお。」

第四話新兵器！？カートリッジシステム始動（前書き）

感想・アドバイスがありましたら待っています。

第四話新兵器！？カートリッジシステム始動

あの日から、数日が過ぎ悟空を含めた守護騎士達は蒐集活動が続けていた。

「ふう〜、今日はこんぐれえでいっかぁ。お〜い、シャマル終わったぞぉー!!」

悟空の前には、恐竜のような生物が十匹ほど倒れていた。

「……………」
「悟空さん、凄すぎです。」

「そっかぁ?」

「それより、蒐集しますね。」

「おお、頼むぞぉ。」

そう言いつと、シャマルは魔導生物達の魔力を蒐集した。

「そんじゃあ、帰るか。」

「そうですね、そろそろ戻りましょうか。」

そして、二人は悟空の瞬間移動を使って家に帰った。

翌日

「ふあゝ。あゝよく寝たあ。」

悟空はいつものように起き、庭に出て修行をした。

「悟空。」

「ん？…ザフィーラじゃねえか。どうかしたんか？」

悟空が修行をしていると、ザフィーラが来ていた。

「少しな。………悟空、俺と手合わせしてくれないか？」

「別にいいぞあ。よし！…んじゃ始めつかあ。」

そう言いつつ、両者ともに構えを取った。

そして、

二人は同時に動いた。

「なんや庭が騒がしいな」

「ううう、うるさい。」

「あら、はやてちゃん。」

「主はやて、やはり起きておられましたか。」

「あれ、みんな起きとったんか？」

はやてはシグナム達と一緒に起きて来たのを、珍しいと思った。

「ええ、さつきから庭の方が騒がしいので。」

「ああ、確かにな。」

そう、先程から庭が騒がしくみんな起きてしまったようだ。

「ちょっと、見に行ってみよか。」

そう言うと、はやて達は庭に向かった。

「はあ！！」

「ふっ！！」

ドガアアン

悟空とザフィーラの拳がぶつかりあった。
そして、二人はまた攻防を始めた。

「うわ、こら凄いわ。」

「う、うん。」

「そうですね。」

「はい。」

庭に到着したはやて達は啞然していた。

なぜなら、悟空とザフィーラの二人が凄まじい格闘戦を繰り広げていたからである。

「って二人ともストップや〜!!」

とりあえず、はやては二人を止めた。

そこで二人は、ようやくはやて達の存在に気付いた。

「はやて、おめえいつからそこに居たんだあ？」

「主、おはようございます。」

悟空はいつから居たか質問して、ザフィーラははやてに挨拶した。

「うちは前から居ましたよ悟空さん。それとザフィーラ、おはようさん。」

はやては悟空の質問に答え、ザフィーラに挨拶を返した。

「それより二人とも、はよ朝ご飯にするよ。」

「はい、主」

「そうだなあ、オラ腹へっちまったぞお。」
そのあと、朝ご飯を食べて悟空はまた修行をした。

その日の夜、

悟空はヴィータ、ザフィーラと一緒に蒐集活動をしていた。

「ヴィータ、今日はこんぐれえでいいんか？」

「うん、悟空のおかげでかなり稼げたからな。」
ヴィータは嬉しそうに言った。
どうやら、ページがかなり稼げたようだ。

「よおし、んじや今日はもっ……ん!？」

「どっしたの?…悟空?」

「……なんか来るぞ!」

次の瞬間、結界が張られ悟空達を囲むように魔導士達が現れた。

「なっ!?!…困まれた!！」

「どっちら、そのようだ。」

「こりゃ、ちとやべえなあ。」

ヴィータとザフィーラは身構え、悟空は気を開放した。

「……………っ!?!…上だ!！」

「……………」

ザフィーラに言われ、上を見ると黒髪の少年が、ナイフ型の魔力刃

を放ってきた。

「はあああああ！！」

悟空は咄嗟に気弾を放ち、魔力刃をすべて撃ち落とした。さらに、悟空は少年の前に高速移動で近づき

「ふっ！！」

「ぐふっ！？」

腹に膝蹴りを入れ、そして両手を組み振り下ろし、下に叩き落とした。

「クロノ（君）」

声が聞こえ、そちらを見るとフェイトとなのはが居た。さっきの少年はクロノと言うようだ。

悟空は高速移動でヴィータの傍へ戻った。

「レイジングハート・エクセリオン」

「バルディッシュ・アサルト」

『ドライブ・イグニッション』
そう言うと、なのは達の服装が変わった。

「あれは!?!」

「どづしたあ?」

「あいつらカートリッジシステム搭載してる!?!気をつけて、悟空。」

「…よくわかんねえけど、分かった。」
悟空は構えを取りながら、そう言った。

「私達は戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて!?!」

「闇の書の完成を目指している理由を!?!」
なのは達は悟空達に闇の書の完成の理由を聞いてきた。

「どつする？ヴィータ。」

「とりあえずここは、あたしに任せて！！」
そう言うと、ヴィータは前に出た。

「あのさく、ベルカの諺にこうというのがあんだよ。「和平の使者なら槍を持たない」ってな。」
なのは達は分からないように首を傾げていた。
悟空はまったく意味が分からず、頭から煙を出していた。

「ようするに、話し合いをしようってのに武器を持ってくる奴が居るかバカって意味だよ、バーカ！！」
なのは達はズッコケた。

「いきなり有無を言わずに襲ってきた子がそれを言う！？」
なのはは起き上がりヴィータに突っ込んだ。

「なるほど、そう言う意味だったんか！！」

「違うぞ、悟空。」

「え！？違うんか？」

悟空が一人で納得していると、ザフィーラが指摘してきた。

「ああ、それは諺ではなく、小話のオチだ。」

「うつせえ。良いんだよ細かい事は！！」

ヴィータは顔を赤くしてそっぽを向いた。

その時、轟音と共に結界に穴が開きシグナムが降り立った。

「シグナム……。」

フェイトはシグナムを睨みながら呟いた。

「ユーノ君。手え出さないでね？私、あの子と一対一だから！！」

「分かった。頑張ってるのは！！」

なのはヴィータを睨みながら、喋るフェレットユーノにそう言った。

「>アルフ。ごめん、私も…彼女と…。」

「>ああ、アタシも野郎にちよいと話がある。」
「<フェイトは念話でそう言った。」

すると、アルフはザフィーラを睨みながら念話で答えた。

そして、

なのはヴィータに、フェイトはシグナムに、アルフはザフィーラに向かって行った。

「来たぞ。みんな氣い付けろよ!」

「悟空はどうすんだよ。」

「オラは残りのやつらをやる。」

悟空は上に居る魔導士達を見ながら言った。

「大丈夫かよ！？かなりの人数だよ！！」

「大丈夫だ、オラに任せろ。」

「……分かった！！」

そう言いつと、悟空達はそれぞれの方へ向かって行った。

「貴様が孫悟空だな。」

「ああ、そつだ。」

「貴様を拘束させてもらおう！！」

そう言いつと、魔導士達が一気に悟空に向かって来た。

「おめえらは、オラには勝てねえ！！」

悟空は体に気を溜め始めた。

そして、

「はあああああああ!!!」
溜めていた気を放出して超爆発波を放ち、魔導士達を全員吹き飛ばした。

ヴィータ達は突然聞こえた爆発音に驚き上を見ると、悟空が超爆発波で魔導士達を吹き飛ばすのが見えた。

「やっぱり悟空ってギガスゲー!!!」
ヴィータが悟空に感心していると

「>みんな、闇の書を使うわ!!!気をつけて!!!<」
シヤマルが念話でヴィータ達に闇の書を使うと言ってきた。

「>マジかよ!?!<じゃあな!!!高町なんか!!!」

「高町なのはだよ!?!」
なのははそう言ったが、ヴィータは無視して悟空の元に向かった。

「じくじく……！」

「ん？…どうしたあ、ヴィータ。」

「シャルが闇の書を使うって……！」

「なに！？？」

悟空は驚いた。

闇の書を使うということはページを消費する事である。

「ダメだ！！とりあえずシャルを止めてくれ！！オラが結界を破壊すつから。」

「分かった！！>シャル、闇の書使うの止める！！悟空が結界を破壊するって！！<」

「>悟空さんが！？……分かったわ！！<」
シャルはヴィータにそう知らされ、闇の書を使うのを止めた。

「いいよ、悟空。」

「オツケー。」

そして、悟空はかめはめ波の構えを取った。

「かああああ、めええええ、はああああ、めええええ」

両手のひらの光が増していく。

そして、

「波あああああ!!!」

悟空はかめはめ波を放った。

そして、結界を破壊して夜空へ消えて行った。

「よし、今だシャマル!!」
ヴィータがそう言うと、足元に魔方陣が展開され悟空達は家に転移した。

悟空達は家に戻り、シャマルに話があるとわれ、みんなリビングに集まっていた。

どうやら、シャマルは仮面の男に闇の書を使うよう促され使おうとしたらしい。それで、シャマルはみんなの意見を聞くために集まってもらったようだ。

シグナムの意見は

「用心に越したことはないからな、信用しない方がいいだろう。」

ヴィータの意見は

「あたしも信用出来ねえ!!」

ザフィーラの意見は

「警戒はしておいた方がいいだろう。」

悟空の意見は

「オラよくわかんねえぞお。」

結果、警戒はしておく事になった。

話し合いも一通り済んだ時、はやてがみんなの所へ来た。

「ヴェータ、お風呂入るでえ〜。」

「うん!〜!」

ここまでは、いつもの光景だったが、はやてが衝撃的な事を言った。

「悟空さんも一緒に入ります?」

「「「「!?!?!?」」」」

守護騎士達は驚き、はやてに詰め寄った。特に女性陣

「主はやて!?!何を言っているんですか!?!」

「そうですねよ!?!」

「それに、あたし悟空に裸見られるの恥ずかしいよ!?!」
それぞれはやてに抗議した。ちなみに小声で

「冗談やがな。それにちょっと、悟空さんを慌てさせたらうと思っただけや。」

はやては小声で答えた。

どうやら、はやては悟空を慌てさせるために冗談を言ったようだ。

しかし、悟空は

「別にいいぞあく、一緒に入るか。」

「????へっ!?!」「」「」

女性陣は固まった。

しかも、悟空はすでに服を脱いでいた。

そのため、悟空の鍛え上げられた肉体を見た女性陣は

「????//////」「」

顔を真っ赤にさせた。

ザフィーラは悟空の肉体を見て

「ふむ、戦士として素晴らしい体つきだな!!」
感想を言っていた。

「んじゃ、行くか!!」
そう言つと、はやてとヴィータを抱えた。

「ひゃわ!?!」

「ちよ!?!」
はやてとヴィータは奇声を上げた。

悟空はそのまま風呂場へ向かった。

こうして、はやてとヴィータは悟空と風呂に入り、顔を真っ赤にさせてあがってきた。

ちなみに、この時シャマルが、

「はやてちゃん、羨ましい。私もいつか悟空さんと……………つふふ
」
危ない発言をしていたそうなの。

第四話新兵器！？カートリッジシステム始動（後書き）

オッス、オラ悟空

今回は砂漠の世界でシグナムと一緒に蒐集活動していたんだ。すると、オラ達の前にフェイトとアルフが現れた。

勝負の最中に仮面の男がフェイトの胸を貫いた。

次回・魔法少女リリカルなのは S

邪魔すんな！！悟空怒りの超サイヤ人

「貴様は謝っても許さねえぞ！！このクズ野郎！！」

第五話邪魔すんな！！悟空怒りの超サイヤ人（前書き）

今回はかなりグダグダです。

第五話邪魔すんな！！悟空怒りの超サイヤ人

次の日、悟空はいつも通りに目を覚ました。

リビングに行くとき、

はやて達が先に起きていた、

「お？…みんな起きるのはええなあ。」

「やっと起きたか孫、遅いぞ。」

「おはようございます、悟空さん。」

「お、おはようさん、悟空さん／＼／＼」

「う、うん。おはよう、悟空／＼／」

シグナムとシャマルは普通に接してくれたが、はやてとヴェータは昨日の事を思い出したのか頬を赤くしながら、悟空にあいさつした。

その後、悟空達は朝ご飯を食べた。

悟空は食後の修行をしていた。

そこへ、ザフィーラが怪訝そうな表情で現れた。

「ザフィーラ、どうかしたんか？」

「いや最近、変わった夢を見るようになってな。」

「へえ、どんな夢なんだあ？」

「ふむ、実はな……………」

どうやら、ザフィーラは自分が暴走する夢を見たそうだ。そこで、悟空は念のため今回の蒐集活動はザフィーラを休ませ、代わりに悟空が行く事になった。

「うちゅうわけで、オラが変わりに来たんだ。」

「そうか、ザフィーラがそんなことを……………とりあえず、シヤマルに検査してもらった方がいいだろう。」
そして今、悟空はシグナムと共に蒐集活動に出ていた。

現在、シグナムと悟空は巨大な蛇のような生物と戦っていた。しかし、砂の中から攻撃してくるため苦戦していた。

「くっ…こじゃくな…！」

「これで…どうだあ…！」

悟空は気弾を放った。

だが、当たる寸前に砂の中に潜られ避けられた。

「くそお〜。」

「ならば…！」

シグナムがカートリッジをロードしようとした時、背後から蛇の触手が出てきて、シグナムを拘束した。

「しまった!？」

抜け出そうとしたが、触手はシグナムを締め上げた。

「ぐう!?!…あああ…！」

「シグナム…！」

悟空が助けようとした時、金色の魔力刃が触手に刺さり、爆発した。

「なんだあ!?!」

悟空が上を見ると、フェイトとアルフが居た。

「フェイトか。」

すると、フェイトはシグナムへ、アルフは悟空の方へ向かって来た。

「おめえがオラの相手かあ?」

「そうだよ!?!」

悟空は今、アルフと対峙している。

「はっ!?!...たあ!?!...この!?!」

「どうした、おめえの實力はこの程度なんかあ?」
しかし、悟空はアルフの攻撃を受け流している。

「こんの...バカにすんじゃないよ!?!」
そう言うと、アルフは大振りになり

「ふっ...でやあ!?!」

「あぐっ!?!」

悟空はその隙を突き、アルフに接近して腹に膝蹴りを入れた。
アルフはあまりの痛さに腹を抱え、膝をついた。

「ぐっ！…っ…の。」

(こいつ、なんてパワーだい!!！)

「おめえじゃ、オラには勝てねえ。」

悟空はアルフにそう言った

その時

「貴様!!！」

突然、シグナムの怒鳴り声が聞こえた。

悟空がその方を見ると、フェイトの胸を仮面の男の腕が貫いていた。

「フェイト!?!」

アルフは驚き、フェイトの元へ飛んでいき

「このやる!!！」

仮面の男に殴り掛かった。

「邪魔だ。」

ドガッ

「かはっ!?!」

だが、仮面の男はアルフを蹴り飛ばした。

「アルフ!!！」

悟空はアルフに近寄った。

「大丈夫か!？」

「大丈夫。でも、フェイトが!！」

アルフは自分よりもフェイトを心配した。

悟空が仮面の男を見ていたら、不意にアルフが悟空の服を掴んだ。

「頼む!! フェイトを助けておくれ!!」

アルフは涙を流しながら、フェイトを助けるように頼んだ。

そして悟空は

「……………わかった。オラに任せろ。」

そう言つと、悟空は仮面の男に向かって行った。

「奪え。」

「くっ!！」

(こんな形で奪いたくなかったが……………)

「蒐しゆ「はあ!!」「!?!」

「ぐあ!?!」

シグナムが蒐集しようとした時、悟空が仮面の男を殴り飛ばした。

「悟空!?!」

「シグナム、おめえこんな形で蒐集したくねえんだろ。」
悟空は静かにシグナムに語りかけた。

「おめえ、騎士の誇りを汚されて悔しいんだろ。」

「ああ。」

シグナムは悟空の問いに答えた。
声が少し震えていた。

「そうか。……シグナム、ここはオラに任せろ!!」

「分かった。…孫……ありがとう。」

そう言うと、シグナムは転移した。

「……!!」

悟空は気配を感じ、フェイトの方を見ると仮面の男がフェイトをまた貫こうとしていた。

「はぁ…はぁ…」

「フェイト、危ない!!」

「えっ」

フェイトはアルフに言われ、後ろに仮面の男が居る事に気付いた。

(間に合わない!!)

フェイトは目を瞑った。

しかし、いくら待っても痛みは来なかった。

フェイトが目を開けると、悟空が仮面の男の腕を掴んでいた。

「貴様!?!」

「いいかげんにしろ、このクズ野郎!!」

そう言いながら、悟空は超サイヤ人に変身した。

「アルフ、フェイトを連れて早く逃げろ。」

「わ、分かった!!」

そして、アルフはフェイトを抱いて、転移して行った。

「貴様、何故邪魔をする。せつかく蒐集を手伝ってやっているのに。」

「

「うるせえ!! おめえはシグナムの…騎士の誇りを汚した。だからオラ、おめえを許さねえ!!」

悟空は気を全開に放出した。

大気が震え、大地が揺れ、地割れが起きた。

「ひっ!?!」

仮面の男は悟空の怒りに恐怖した。

「オレは怒ったぞ!!」

悟空は仮面の男に向かって猛ダツシュした。

その頃、アルフとフェイトとはあるマンションに転移していた。

「はぁ…はぁ…」

「フェイトちゃん!!」

するとそこへ、親友のなのが駆け寄ってきた。

「大丈夫!？」

「うん、大丈夫。」

なのは心配したが、フェイトはなのはを安心させるため大丈夫と言った。

「それより、悟空は。……エイミー!！」

「それが、あの姿になった途端、すべてのパラメーターが『計測不能』になったんだよ!！」
エイミーこと、エイミー・リミエッタは悟空のパラメーターがすべて計測不能になった事に驚愕した。

「計測不能!？」

「ホントかい!？」

フェイトとアルフも驚いた。

そして、モニターを見ると悟空が仮面の男を圧倒していた。

「はあああああ!！」

悟空は仮面の男に連打を喰らわせていた。

「おりゃああ!！」

「あぐっ!?!」

そして、仮面の男を吹き飛ばし、ダッシュで先回りして

「でりゃああ!?!」

「がはっ!?!」

両足で上空に、蹴り上げ

さらに、高速移動で先回りし

「くたばれええ!?!」

「ぐああ!?!」

両手を組んで振り下ろし、下に叩き落とした。

「どうした!?!もうこれで終わりか!?!」

悟空は仮面の男を挑発した。

だが、仮面の男は姿を現さない。

「ちっ!?!」

悟空は舌打ちすると、かめはめ波の構えを取った。

「かああああ、めええええ、はああああ、めええええ。」

そして、悟空がかめはめ波を放とうとした時

「悟空!?!もうやめてよ!?!」

誰かに止められた。

悟空は声の方を見た

「……ヴィータか。」

声の主は、ヴィータだった。

「なんで、止めんだ!! あいつはシグナムの騎士の誇りを汚したんだぞ!!」

「分かってる。」

「だったら……」

「でも、殺しちゃダメだよ!!」
ヴィータは声を張り上げた。

「それに……」

ヴィータはそっと、悟空の腰に抱きついた。

「それにあたり、悟空に人を殺して欲しくない!!」

「!?!?」

ヴィータの言葉により、悟空は冷静になりヴィータを見ると肩が震

えていた。

「たのむよ、悟空殺さないで。」

悟空は超サイヤ人を解いた。

「わりい、ヴィータ。オラが悪かった、許してくれ。」
ヴィータの頭を撫でながら、悟空はそう言った。

「もう殺さない？」

ヴィータは顔を上げ、涙目で聞いてきた。

「ああ、もう殺さねえ。」

悟空は微笑みながら言った。

「良かった！！いつもの悟空に戻った。」
ヴィータも微笑みながら、そう言った。

「んじゃ、帰るか！！」

「うん」

そして、二人は家へ転移した。

その後、悟空は帰ってすぐ寝たそうなの。

第五話邪魔すんな！！悟空怒りの超サイヤ人（後書き）

オッス、オラ悟空

ある日、オラ達はまた仮面の男について会議をしてたんだ。
でもその時、急にはやてが倒れちゃった。
大変だ！！

次回・魔法少女リリカルなのは S

はやて入院！？悟空はやての世話をする

「みんな、はやての世話はオラに任せろ！！」

第六話はやて入院！？悟空はやての世話をする（前書き）

感想・アドバイス待ってます。

第六話はやて入院！？悟空はやての世話をする

悟空が仮面の男と対峙して翌日、悟空と守護騎士達がリビングで会議を開いていた。

「昨日、私と悟空は仮面の男に遭遇した。ヴィータお前の方はどうだった？」

「あたしの方にも現れたけど、逆に助けてもらったよ。」

「そうか。」

「けど、あいつら一体なにが目的なんだろうなあ？」悟空は首を傾げながらそう言った。

「完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれない…。」

「ありえねえ！！だって完成した闇の書を奪ったって、マスターであるはやて以外には使えないじゃん！！」

「確かに完成した時点で、主はやては絶対的な力を得る。脅迫や洗脳などの効果がある筈も無いしな。」

「家の周りには嚴重なセキュリティを張ってるし万が一にも、はやてちゃんに危害が及ぶ事はないと思うけど…。」

「それでも、念のためだ。シャマルと悟空はなるべく主はやての傍を離れん方がいいな。」

「そうね。」

「よし!!オラに任せろ!!」

シャマルは頷き、悟空は胸をドンツと叩いて応えた。

「……なあ、闇の書を完成させてさ、はやてが本当のマスターになったら、それではやては幸せになれるんだよな?」
ヴィータは不安そうな顔で訊いてきた。

「どうしたんだ、いきなり?」

「闇の書の主は大いなる力を得る。守護騎士である私達が誰より知ってる筈でしょ?」

「そうなんだよ。そうなんだけどさ、あたしなんか大事な事を忘れてる気がするんだよ……。」

ヴィータはそう言つと再び考え出した。

「オラよくわかんねえけど、闇の書が完成すればはやては助かるんだろ?」

「少なくとも闇の書の侵食を遅らせる事ができる。」

「だったら……」

その時

ゴトンッ

なにかが落ちる音がした。

悟空は何事かとすぐに気を探ってみた、

「(はやての気が弱くなってる……………まさか!?)」

悟空ははやての部屋へ急いだ。

シグナム達も悟空の後を追った。

悟空ははやての部屋のドアを開けた。

「はやて…！」

すぐに倒れているはやてを見つけた。

「はやて…！しっかりしろ…！」

悟空ははやてを仰向けに抱き起こした。

はやては体が熱く、息が荒くなっていた。

はやての気が弱くなっているため、悟空ははやてに気を少し分けた。

「主はやて…！」

「はやてちゃん…！」

「はやてえ…！」

「主…！」

守護騎士達もはやてに近寄ってきた。

「シヤマル…！とりあえず回復魔法をはやてに…！」

「はい…！」

シヤマルははやての近くに来て、回復魔法をかけた。

「シグナム、おめえは病院にはやてが倒れたって知らせんだ…！」

「分かった…！」

シグナムは病院に連絡をしに行った。
数分後、救急車が来てはやてを病院に連れて行った。

「うん、もう大丈夫ね。」

「ありがとうございます。」

その後、病院に着いたはやては医師達の治療によってなんとか落ち着いた。

そして今は、石田先生に診察してもらった所だった。

「せやからちょっと目眩がして、胸と手がつっただけやって。」

「でもはやて、おめえ倒れたんだから誰だって心配すつぞお。」

「そうですよ。悟空さんの言つとおりです。」

「主はやてに何かあっては大変ですからね。」

「はやてが無事でよかつた。」

ヴィータははやてに抱きつきながらそう言った。

「シグナムさん、シャマルさんちょっと話が……。」

「はい。」

すると、石田先生がシグナムとシャマルを呼んで、一緒に部屋から出ていった。

「入院？」

どうやら、シグナム達ははやての入院について話をしていたようだ。

「はい。」

「そうなんか……。」

「あ……でも念のためという事なんで心配いりませんよ。」

「それはええんやけど……。」

はやては何か言いたげそうな顔をしていた。

「ん？……どうしたあ、はやて？」

「いや、うちが入院してる間にご飯誰が作るんやろか、と思って……。」

「

はやてはそれを心配していたようだ。

「それもそうだなあ。」

「何言ってるんですか、はやてちゃん、悟空さん。そこは私が作るに決まってるじゃないですか。」

「「シャマルが作るのはやめてくれ!!」」

シグナムとヴィータが同時に突っ込んだ。

「二人ともひどい!!。」

二人にそう言われ、シャマルはショックを受けた。

「何言ってるんだおめえら? シャマルの料理すげえうめえじゃねえか?」

しかし、ここに一人シャマルの料理を食べられる人物が居た。

「「(どうしてアレを食べられるんだ!!???)」」
シグナムとヴィータは心の中で絶叫した。

「あ!!! すすかちゃんからのメールどないしょ。」

「それは私の方から連絡しておきます。」

「なあはやて、すずかつてえ誰だあ？」
聞き慣れない名前を聞いた悟空ははやてに聞いてみた。

「うちに新しく出来た友達なんです。」

「そつか!!…よかつたなあ、はやて。」

悟空はそう言つと、はやての頭を撫でた。

「あう……／＼／＼／」

頭を撫でられ、はやては顔を真っ赤にしていた。

少しして、悟空達は家に帰って行った。

それから数日が経った。

シグナム達は蒐集を行いながら、交代ではやての見舞いに行った。

「はやて、調子はどうたあ？」

「あ、悟空さん!!」

そして、この日は悟空が見舞いに来る日であった。

「はは、元気そうだなあ。あ、そうだとオラ果物持って来たんだつたあ。食つかあ？」

「じゃあ、もらっわ。」

「ほれ。」

悟空ははやてにリンゴを投げ渡した。

「はわ！？……もう悟空さん女の子に物を投げ渡したら失礼ですよ！！」
「なんとかリンゴをキャッチしたはやては、頬を膨らませながら悟空に注意した。

「そうなんかあ？わりいわりい、オラ気をつける。」
悟空は、頭を掻きながら謝った。

その後、はやてと悟空はしばらく会話をしていた。
すると、

コンッコンッ

誰かがドアをノックした。

「ん？……誰か来たんか？」

「ああ！そやった、今日はさすがちゃんが来てくれるんやった。
……そや、ついでにさすがちゃんに悟空さんの事、紹介しよか！
！さすがちゃん入っていいで。」

ガチャッ

「失礼します。」

紫色の髪の子が入って来た。

さらに、その後ろから三人の女の子も入って来た。

「いい!？」

悟空は驚いた、三人の女の子のうち二人は、なのはとフェイトであった。

なのはとフェイトも驚いていた。

「>ねえ、フェイトちゃんどうして悟空さんがいるのかな?<」

「>さあ、分からない。後で悟空に聞く?<」

「>うん!後で必ず』お話し』さしてもらおうの!~!<」
こうして、悟空はなのはのお話しフラグが立ったそうなの。

「はやてちゃん、その人誰？」

「この人がうちの家に住んでる孫悟空さんや。」

「ああ、この人が………どうも、はやてちゃんの友達の月村すずかです。」

すずかはお辞儀をしながら自己紹介した。

「それで、こっちが………」

「アリサ・バニングスよ。」

「すずかにアリサだな。オラ孫悟空だ、よろしくな!!」
悟空はすずかとアリサに握手した。

「そつだ!! はやてわりいけど、オラもう家に帰るぞお。」

「そうですね。」

はやては寂しそうな表情で呟いた。

「そんな顔すんなあ、また来てやつから。」

「はい」

悟空が頭を優しく撫でながら言つと、はやては嬉しそうに返事をした。

「じゃな!!--」

悟空はとりあえずシグナム達になのは達の事を報告しに帰って行った。

悟空が病室を出て、はやて達は話をしていた。
するところ、

「ねえ、はやてちゃん。」

「ん?なんや、すずかちゃん?」

すずかがはやてに話し掛けてきた。

「はやてちゃんってもしかして.....悟空さんの事好きなの?」

「!!--??//////////」

突然の質問に、はやては顔を真っ赤にさせた。

「えっ！？ そうなのはやてちゃん！！」

「はやてって、悟空の好きなの!？」

「ちょっとはやて!! それ本当なの!？」

それを聞いたなのは達も驚き、皆はやてに詰め寄って来た。

「うん……／＼／＼／＼」

はやては顔を真っ赤にしながら小さく頷いた。

「それで、はやてちゃんは悟空さんのどこを好きになったの？」

「そ、それはあ………悟空さんの優しい所や。」

「」「」「ほほお〜」「」「」

はやてが恥ずかしそうに答えると、皆感心の声を上げた。

この日、はやては一番恥ずかしいめにあった日である。

「はああくしゅん! ! ! ! ! …… オラ風邪ひいちゃったかなあ?」
その時、悟空が大きなくしゃみをしたそうなの。

第六話はやて入院！？悟空はやての世話をする（後書き）

オッス、オラ悟空。

あれから数日後、オラ達は久しぶりにみんなではやてのところに رفتんだ。

すると、またばったり病室でなのは達に遭遇しちゃった。

なのは達と話し合いをしようとした時、仮面の男がまた現れやがった。

そして、ヴィータ、シャマル、シグナムを闇の書に吸収した。

その時、ザフィーラの怒りが爆発して変化が、ザフィーラおめえまさか！？

次回・魔法少女リリカルなのは S

怒れる超サイヤ人！！名乗りをあげるザフィーラ

「盾の守護獣であり、そして超サイヤ人ザフィーラだ！！」

第七話怒れる超サイヤ人!!名乗りをあげるザフィーラ(前書き)

感想・質問待ってます。

第七話怒れる超サイヤ人！！名乗りをあげるザフィーラ

なのは達がはやての友達だということを知ったシグナム達は、現在リビングに集まり会議を開いていた。

「しかし……テストロッサ達が主はやてのご友人だったとは。」

「どうすんだあ？」

「とりあえず、テストロッサ達に会わないように、主はやての見舞いの時間を変えよう。」

「そうすつかあ。」

こうして、悟空達ははやてのお見舞いの時間を調整する事になったのだが、

「シャマル。」

「何ですか、悟空さん？」

「おめえ……なんちゆう格好してんだあ。」

「え！？…変ですか？」

シヤマルは自分の服装を見た。

厚手のロングコートにサングラスをかけていた。

シヤマルは念のためということに変装しているのだ。

「いや、おめえの格好はかっこいいんだけどよ、その格好でコソコソしてつと怪しい奴にみえっぞお。」

「えっ！？うそー!!」

シヤマルはショックを受け、翌日から普段通りの格好にする事にした。

ある日、悟空達は皆ではやてのお見舞いに行くことにした。

「そっぴゃあ、オラ達みんなではやての見舞いっちゅうんは久しぶりだなあ。」

「そっぴゃあ。」

「きつと、はやてちゃん喜んでくれますよー!!」

「それじゃあ早く行こうぜ!!ほら、悟空!!」
そう言うと、ヴィータは悟空の手を取り走り出した。

「おいおい待てよヴィータ、待てって!!」

「あらあら、ヴィータちゃんったら。」

「私達も行くぞ。シャマル、ザフィーラ。」
シグナム達もヴィータと悟空を走って追いかけた。

「はやて、また見舞いに来たぞお!!」

「あ!!悟空さん、シグナム達も来てくれたんか!!」
はやては体を起こし、笑顔で悟空達を迎え入れた。

「主はやて、体の具合はどうですか?」

「大丈夫やで。それに、最近はすごく調子がええんや。」

「そうなんか。じゃあ、もうすぐ退院できるんか？」

「もう少し様子見て、大丈夫そうだったら退院できるそうです。」

「そっかあ。よかったなあはやて!!」

悟空ははやての頭を撫でた。

「ありがとうございます!!」

はやてはとても嬉しそうに笑って答えた。

すると、

突然、誰かが悟空の胸着をクイクイと引っ張った。

悟空が視線を下に落とすと

じい~~~~

ヴィータが羨ましそうな目で悟空を見上げていた。

「どうしたあ〜??ヴィータ。」

「あたしも撫でて……。」

小さな声でヴィータが呟いた。

「ん?……別にいいぞあ、ほれ。」

ナデナデ

「えへへ / / / / /」

撫でるとヴィータは目を細め気持ち良さそうな顔になった。

コンッコンッ

悟空達が話をしていたら突然、ドアがノックされた。

「あれ?...誰やる?はい、どうぞ!」

「くんちは?。」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

悟空達は驚いた。

なぜなら、なのは達に遭遇してしまったのだ。

「すずかちゃん!いらっしやい!今日はどうしたん?」

「ふふ 今日だね.....はい!」

すずかはアリサと一緒ににはやてに箱を差し出した。

「「サプライズプレゼント!」」

「わあー！…ありがとなあ、すずかちゃん、アリサちゃん！…」
はやてはすずかとアリサにお礼を言いながらプレゼントを受け取った。

「あ、あの………そんなに睨まないで………」

「睨んでねえです、こつゆつ目付きなんです。」

「こら、だめやでヴィータ。悪い子はこつやで。」

そう言つと、はやてはヴィータの鼻を摘んだ。
皆その光景に苦笑いした。

そして、あの後すずかとアリサは帰り、悟空達はなのはとフェイトと決着をつけるため病院の屋上に来ていた。

「はやてちゃんが……闇の書の主………」

なのはは暗い顔をしながら呟いた。

「悲願はあと僅かで叶う。」

「邪魔するならばはやてちゃんのお友達でも……！」

シグナムとシャマルは覚悟を決めた表情でなのは達に言い放った。

「ちょっと、ちょっと待って！！話を聞いてください！！闇の書が完成したらはやてちゃんは「でやああ！！」……！！！！」

なのはが何かを伝えようとした時、ヴィータがなのはに奇襲をかけた。なのははシールドで防いだがそのまま弾き飛ばされ、フェンスに激突した。

「なのは……！！」

「はあっ……！！」

シグナムがフェイトに向けて横薙ぎに剣を振った。

フェイトは素早く後ろに跳んで避けたが、悟空は高速移動で近づき

「おりやああ……！！」

「ぎやああ……！？」

ドゴオオオン

フェイトを蹴り飛ばし、給水塔に激突させた。

「管理局に我らの主の事を伝えられては困るんだ。」

「私の通信防御範囲から出す訳には……いかない……！！」

「わりいが、おめえらはここで倒させてもらっぞ。」

そう言くと、悟空が気を開放させようとした、その時

ガチャンッ!!

「……………!!??」「……………」

突如、全員にバインドがかけられた。

特に、悟空は他の者より十倍近い量のバインドをかけられた。

「こ、これは……バインド!?!」

「くっ!!何て硬いバインドなんだ!!」

なのはとフェイトがバインドを破ろうとした時、

「貴様らはそこで見ている。」

「この人数だ、そう長くは持たんぞ!!」

仮面の男が二人現れた。

「分かった。……では……。」

仮面の男が手を掲げると、闇の書が収まっていた。

「蒐集。」

シグナム達に向け、蒐集を行った。

「ぐあああ!?!」

「ああああ!?!」
最初にシグナムのリンカーコアを、次にシャマルのリンカーコアを
蒐集した。

「シグナム!?!シャマル!?!…何なんだよ…何なんだよ!?!おま
えらは!?!」

「プログラム風情が、知る必要はない。」
そして、ヴィータを蒐集しようとした時

「うおおお!?!」

「!?!」
ザフィーラがバインドを破り、仮面の男に殴り掛かった。
だが、

「邪魔をするな。」

「ぐああ!?!」
もう一人の仮面の男に蹴られ、フェンスの所まで飛ばされた。

「ザフィーラ!?!…くっ、この!?!」
悟空も超サイヤ人になって、バインドを破壊しようとしたが

「貴様も、あいつらと共に見ている。」

ドガッ!?!

「うあああー!!」

仮面の男にザフィーラと同様に蹴られ、ザフィーラの近くまで飛ばされ、更に

「ふん…!!」

ドガツ ボキツボキツ

「があああー!!」

仮面の男が倒れている悟空を踏み蹴り、悟空の肋を数本折った。そして、ヴィータは張り付けにされ、拘束された。

「あの二人は……なのはとフェイトの二人は大丈夫か？」

「四重のバインドにクリスタルゲージだ、抜け出すのに数分掛かる……だが悟空は……？」

「大丈夫だ……あいつには念入りにバインドを掛けた。それに、肋も折った。満足に動けん筈だ。闇の書の主の目覚めの時だな。」
そう呟くと、二人の仮面の男はそれぞれ、なのはとフェイトの姿に化けた。

そして、その時魔方阵が出てそこからはやてが姿を現した。

「うつ……！くつ……！なのはちゃん……フェイトちゃん……何なん、何なんこ……悟空さん!？」

はやては突然、場所が変わり混乱していたが倒れている悟空に気付いた。

「君は病気何だよ。闇の書の呪いの病気。」

「もうね、治らないんだ。」

「闇の書が完成しても、助からない。」

「君が救われる事はないんだ……。」

はやては偽なのはと偽フェイトの言葉にうちひしがれた。

「……そんなん……そんなん……ええねん……ヴィータを離して……」

……悟空さんとザフィーラに何したん……。」

「この子達ね、もう壊れちゃってるの。私達がこつする前から……。」

「

」とつくの昔に壊された闇の書の機能も、まだ使えると思ひ込んで

「運命って……残酷……なんだよ。」
そして、刃をヴィータに

ザシユッ

突き刺した。

「!?!?!?!?! いやあああああああ!?!?!?!?!」

はやての絶叫が響いた。

次の瞬間

ドツクン!

はやてが座り込んでいる所から魔方阵が展開され、闇の書が現れる。
そして、その魔方阵は徐々に真っ黒に……いや、闇に染まっ
った。

その時、

「うあああああああ!?!?!?!?!」

ザフィーラの怒りの雄叫びも同時に響いた。

仮面の男達が驚き、その方を見ると、ザフィーラの魔力が急激には
ね上がっていた。

「ああああああ……!!」

さらに、ザフィーラの体に劇的な変化が起きた。

ザフィーラの狼の耳と尻尾がなくなり、銀色の髪は逆立ち金髪になり、瞳の色が碧色に変わり金色のオーラを放出させた。

「な!?!…なんだあの姿は!?!」

「わ、分からん!! 一体どうなってるんだ!!…何故こいつも悟空と同じ姿に………貴様、一体何者なんだ!!」
仮面の男達はうろたえながら、訊いて来た。

そして、ザフィーラは答えた。

「俺は盾の守護獣でありそして、超サイヤ人ザフィーラだあ!!」
金色のオーラを全開放出させ、ザフィーラは名乗りを上げた。

今ここに、超サイヤ人ザフィーラが姿を現した。

そして、闘いは新たな局面に突入する。

第七話怒れる超サイヤ人！！名乗りをあげるザフィーラ（後書き）

オッス、オラ悟空。

なんとザフィーラが超サイヤ人になっちまった。

しかし、ザフィーラのヤツ怒りのあまり理性を失っちまった。

オラがとめるしかねえ！！落ち着け、ザフィーラ！！

次回・魔法少女リリカルなのは S

もうやめろ！！悟空ザフィーラとマジ勝負

「邪魔をするな悟空！！……邪魔をするなら、殺してやる！！」

第八話もうやめろ！！悟空ザフィーラとマジ勝負（前書き）

誰か戦闘長引かせるコツを教えてください！！！！

第八話もうやめろ！！悟空ザフィーラとマジ勝負

超サイヤ人になったザフィーラは偽なのは達を睨み付けていた。

「ザフィーラ……。」

「……………」

悟空は呼びかけたがザフィーラは何も答えず、偽なのは達を睨み続けていた。

その時

シュツ

ザフィーラは高速移動で近づいて両手を前につきだし

ドオオン！！

「うわぁっ!?!」

「なにいつ!?!」

気合砲で吹っ飛ばした。

二人はフェンスを突き破り吹っ飛んでいった。

そして、ザフィーラはさらに追撃をかけるため二人が吹っ飛んでいった方へ飛んでいった。

「!?!ま、待て!!ザフィーラ!!」

悟空はザフィーラの後を追いかけた。
だが

「ぐっ!?か、体に力が入んねえ。」
悟空は肋が折れていて思うように体に力が入らなかったため、近くのビルの上へ降りた。

「ザフィーラ……。」

一方その頃

「何なんだあいつの変化は……。」

「盾の守護獣は狼にしか変われん筈………どういう事だ!!」
偽なのはと偽フェイトはザフィーラの変化に驚いていた。

「貴様らは……貴様らだけは……。」

ザフィーラは拳を強く握りしめながらそう言つと

「貴様らだけは絶対に許さんぞ!!……!!」

金色のオーラを纏い、高速ダッシュで偽なのは達に突っ込んで行き
ズゴオオオンツ

「がはっ!?!」

「あぐっ!?!」

二人の胸に拳を叩き込んだ。

「このっ!!」

偽なのは達は反撃に蹴りを放った。

そして、ザフィーラの顔面に直撃した。
だが

ガシッ

「!!?」

「この程度か……。」

ザフィーラにダメージは無く、更に二人の足首の部分を掴んで

メリッメリッ

「うああああ!!?」

「ああ!?!は、離せ!!」

握り潰し始めた。

「痛いかな?だが……シグナム達の痛みはこんなものではない!!」

そう言うと、ザフィーラは二人を下へ投げ飛ばした。

ドオオオオン

「シャマルの痛み!!」

ザフィーラも下へ急降下していき

ズドオオオン

「があああ!?!」

「あぐああ!?!」

落下して地面に横たわっていた二人の腹を踏みつけた。

「ヴィータの痛み!!」

更に、倒れている二人に両手をかざし、

「そしてこれが、シグナムの痛みだああ!!」

なのはのデイベインバスター並か又はそれ以上の砲撃を至近距離から撃った。

その衝撃で辺りは、土煙があがった。

「……………」

ザフィーラはじつと土煙を見ていた。

そして、少しずつ土煙が晴れてきた。

すると、そこには人影があった。

「……………何故だ……」

ザフィーラはその人影に語り始めた。

その人影とは

「何故邪魔をするんだ!!……………悟空!!」

なんと、その人影は悟空であった。
上の胴着は完全に破けて上半身は何も着ていない状態で、ガードの態勢をしていた。

「（すげえな、まさかザフィーラのパワーがこれ程までアップしてるとはな。）」
悟空はとても驚いていた。
超サイヤ人になったザフィーラのパワーが想像以上にはね上がったのだ。

「何故…邪魔をするんだ悟空。」

「もうやめろ!!ザフィーラ、おめえやり過ぎだぞ!!」

「うるさい!!そいつらはシグナム達を殺した、だから今度は俺がそいつらを……殺す!!!!」
そう言って、ザフィーラはまた巨大な砲撃を撃った。

「!?!?!くっ!?!」

悟空はその砲撃を両手で受け止めた。

だが、徐々に悟空の方が押され始めた。

「ぐっ!?!?…やべえ、このままじゃ…。」
悟空の後ろには、偽なのは達が気絶して倒れていた。
このままでは二人を巻き込んでしまう。

「こっとなつたら…はああああ!!」

悟空は一気に身体中から気を放出させ超サイヤ人になった。

そして、腕に力を込め

「おりゃああああ!!!!」

持ち上げる形で上に弾き飛ばした。

そのまま空へと飛んでいき

ドカアアアアン

上空で大爆発を起こした。

「……………」

「……………」

悟空とザフィーラは無言で睨みあっていた。

「やはり、俺の邪魔をするのか?…悟空。」

「ああ。」

「そうか……なら。」

ザフィーラは腰をおとして構えを取り、悟空も構えを取った。

「貴様から……殺してやる!!……うおおおお!!……!!」

「はああああ!!……!!」

二人は同時に踏み込んだ。

腕を振りかぶり

「はああ!!……!!」

「でりゃあ!!……!!」

ドゴオオオン

拳同士をぶつけた。

「ふんっ!!……!!」

ザフィーラはもう片方の拳でパンチを繰り出した。

それを、悟空は体を横に傾けて避け、片手を地面に付けて体を支えながら蹴りを放ち

バキィンッ

ザフィーラの頭に直撃した。

しかし、ザフィーラはその足を掴み、

「うおおー!!」

ドガンッ

「ぐはあっ!?!」

悟空を地面に叩き付けた。

ザフィーラは止めに悟空を踏み潰そうとしたが

シュッ ドスンッ

悟空は寸前に高速移動で避け、ザフィーラの足は地面に深く突き刺さった。

高速移動で避けた悟空は上空に逃げていた。

「はあ…はあ…うぐう!?!」

不意に悟空は脇腹の部分を押さえた。

「(やっぱ、肋が折れてっから全力で戦けえねえな。こいつは、めえったぞお。)」

どつやら、悟空は怪我のせいでフルパワーで戦えないようだ。

悟空がまいていたその時

シュッ

「何処を見ている!!」

「!?!?…しまっ!!」

ザフィーラは高速移動で悟空の背後に現れ、気合砲を放ってきた。

悟空は反応が遅れてしまい、

ドオウンッ

「うわあああ!?!」

吹っ飛ばされた。

「くっ!?!?…はああ!!!!」

すぐに、悟空は気を放出させ止まり態勢を立て直し、ザフィーラの方を向いた。

「はあ…はあ…はあ…」。

「この程度か?…ならば、これで………終わりだ!!」

そう言うと、ザフィーラは両手を前につきだし、手首同士を合わせ腰の近くへ持っていていき構えた。

「???…なんだ…なにをするつもりだ?」

悟空が不思議に思ったその時

「かあああああ!!!」

突然、ザフィーラの手の内に魔力が集まり始めた。

「めえええええ!!!」

「!?!?!まさか!!!」

そして、悟空は直感した。

「はあああああ!!!……めええええ!!!」

「や、やめるザフィーラ!!!そんなにパワーを上げた状態でかめはめ波を撃つな!!!!!!」

悟空は叫んだが間に合わず

「波あああああ!!!」

かめはめ波が放たれた。

しかも、かなりの威力をもっていた。

「くっ!!!」

悟空は咄嗟に両手でかめはめ波を受け止めた。

だが、悟空はかめはめ波に押され一緒に地上へ落ちていった。

「ぐぐっ!?!?!このままじゃ地球が!!!」

このままでは悟空ごと地球が吹っ飛んでしまう。
そう思った悟空はある手段に出た。

「はあああああああ！！！！！！！」
悟空は気を放出させて高め始めた。

かめはめ波が地上に当たる寸前にかめはめ波が

ドカアアアアン

爆発した。

ザフィーラは爆発して土煙が上がっている所を見ていた。

少しして土煙が晴れて、そこには巨大なクレーターが出来ていた。

しかし、クレーターの中央に誰かが立っているのにザフィーラは気が付いた。

「さすがだな……………悟空。」

クレーターの中央に立っていたのは悟空であった。

そして、悟空の姿が消え、高速移動でザフィーラの前に現れた。

「!?!」

ザフィーラはある事に気付いた。

悟空の雰囲気が変わっていたのだ。

悟空の逆立っていた金色の髪はさらに逆立っており、全身から稲妻のようなオーラを発していた。

悟空は超サイヤ人2になっていた。

「ザフィーラ、わりいが最高の力で早く終わらせてもらっぞ!?!」

「ああ、来い!?!…殺してやる!?!」

そして、二人は高速移動で同時に動いた。

ドガアンッ　ドゴオンッ

悟空とザフィーラは高速移動しながらぶつかり合った。

「はああ!?!…」

「うおお!?!…」

ドゴオン

悟空とザフィーラは同時に蹴りを放ちぶつかり合った。

そして、二人はラツシュでさらに激しい戦闘を繰り広げた。

ドガガンツ ガツ バガアンツ バアアンツ

時に、悟空がザフィーラの顔面を殴り、ザフィーラが悟空の腹に鋭い蹴りを喰らわせたりと、激突していた。

バキイイイインツ

そして、二人は同時に顔を殴り距離を取った。

「へへっ！ーやるなザフィーラ！ーじゃあ、オラそろそろ本気出そうかな！ー！」

そう言っていると、悟空はさらに気を放出させた。

「な、何だと！？」

「行くぞ！ー！」

悟空は高速移動で突っ込み、ザフィーラの顔を殴った。

バキインツ

「ぐあぁっ！ー？」

「はぁぁ！ー！」

さらに、腹に膝蹴りを入れ

「がはぁっ！ー？」

「うおりゃぁぁ！ー！」

身体を一回転させ、ザフィーラの脳天に踵落としを叩き込んだ。

バキィィンッ

「あぐああ!?!」

ヒュウウウウッ

ドガアアアンッ

そのまま、下へ落下して地上に激突した。

悟空はゆっくりとザフィーラの元へ降りていった。

そこには、超サイヤ人が解け、気絶しているザフィーラが倒れていた。

「すまねえ、ザフィーラ。こうするしかなかったんだ。許してくれ。」

悟空は謝りながら、超サイヤ人2から、超サイヤ人に戻った。

「ふう〜……………!!?!? な、なんだこの気は!?!」

ひと安心していたその時、悟空は巨大な気を感じた。

悟空は額に人差し指と中指を当て、気を探った。

「……………!!これは、はやての気……………に別の気が混じってる?とにかく行ってみつか!?!」

そう言って、悟空ははやての所へ瞬間移動した。

果たして、はやての身に何が起こったのか!!
そして、はやての気に混じっている別の気の正体とは!!

第八話もうやめろ！！悟空ザフィーラとマジ勝負（後書き）

オッス、オラ悟空

ザフィーラをなんとか止めれたオラは突然感じた巨大な気の所へ瞬間移動して向かった、そこには闇の書と一体化してしまったはやての姿があった。

次回・魔法少女リリカルなのは

S

超苦戦！？闇の書の真のパワー

「負けるわけにやいけねえ、オラがやるしかねえんだ！！」

第九話超苦戦！？闇の書の真のパワー（前書き）

今回は少し長めです。

第九話超苦戦！？闇の書の真のパワー

シュンツ

悟空は瞬間移動ではやての元へ来た。

「!？」

だが、悟空の目の前には、はやてではなく頭に一對、背中に二対の黒い羽根を生やし手足に真紅のベルトを巻いていて長い銀髪の髪をなびかせている女性の後ろ姿であった。

「また…全てが終わってしまった。……一体幾度、どれだけ同じ悲しみを繰り返せばいい……。」

銀髪の女性は悲しそうな声で呟いていた。

「……おめえ誰だ?…いや、はやて気に入っていているおめえは…誰だ?」

悟空はその女性に誰かと聞いてみた。

女性は悟空に気付いていなかったのか少し驚いた様子で振り返った。

「!?!?…超…サイヤ人…。」

そして、悟空の姿を見て驚いた表情でぽつりと言った。

「へっ!?!?…おめえ超サイヤ人知ってるんか?」

「ああ、知っている……。」

女性は懐かしむように、空を見上げた。

「ふ〜ん……って、そんな事より、オラが聞きてえのはおめえが誰かって事だ!!」

「…私は闇の書……。」

「えっ!?(や、闇の書!?!…でも、闇の書って本じゃなかったか?!)」

悟空は目の前の女性が自らの事を闇の書と言った事に驚いた。

「私の力の全ては…主の願い…そのままに…。」
そう言つて、闇の書の女性は攻撃の準備に入った。

「待て!!はやての願いつてのは一体なんなんだ!!」
しかし、悟空の言葉には耳を貸さずに闇の書の女性はさらに力を込めていき

「ディアボリック…エミッション…。」
漆黒の球体のようなものを放ってきた。

「くっ!!!(どうする、反撃すつか…いや、ダメだヤツからはやての気も感じる。」

下手に攻撃して、はやてがどうなるかわかんねえかな……。」「
悟空はどうすればいいかわからないので、とりあえずその場から高速移動で離れた。

シュッ

「さくて、これからどうすっかな……ん？」

高速移動で離れた悟空は、はやてをどうやって助けようか考えようとした時、遠くに人影があるのに気付いた。

「誰だ、ありゃ？」

悟空は人影がある方へ飛んでいった。

そして、少しずつその人影の姿が見えてきた。

「……ああ！あいつら！！」

その人影は、本物のなのはとフェイトであった。

悟空は突然、気弾をなのは達に放った。

なのは達はそれに気付いて慌ててシールドを張ってなんとか防いだ。

「にゃあ！？…な、なんなの今の一！！」

「わ、分かんない。」

なのは達は突然の攻撃に驚いていた。

そこへ、悟空が四人の前に現れた。

「「悟空さん！！」」

なのはとフェイトは悟空の名前を同時に呼んだ。

「おめえら、ザフィーラにあんだけやられたのに、まだ懲りてねえんか。」

しかし、悟空は様子がおかしかった。

明らかに怒っていた。

「ど、どうしたんですか？悟空さん……。」「
なのはは怯えながら、悟空に聞いてみた。

「どうしたもこうしたもねえ！！おめえら、はやての友達なのに…
…なんではやてを悲しませんだ！！」
気を開放させて、悟空は叫んだ。

どうやら、悟空はなのは達を偽なのは達だと勘違いしているようだ。

「はああ！！」

「あつ！？」

「くう！？」

悟空は二人に突っ込み蹴りを放ったが、なのはとフェイトはシールドで防御して耐えた。

悟空は二人のシールドに手を置き

「はあああ！……！」

パライイインッ

「きゃあああああ！？」

気合砲でシールドを破壊して、そのまま二人も吹っ飛ばした。

しかし、なのは達は、すぐに体勢を立て直し悟空の方を向いた。

「悟空さん！！聞いてください！！あれは、私達じゃ……」「だりやあ！！」「うひゃあ！？」

なのはが悟空に自分達がやってないと言おうとしたが、悟空がその途中で殴り掛かり、なのはの鼻先を拳が掠めた。

「なのは！！……はあああ！！……！」

フェイトはなのはを助けようとして、悟空に魔力刃で斬り掛かった。

ガキンッ

「なあ！？？」

だが、悟空はその魔力刃をわしづかみして

グゲグッ

バライイインッ

握り碎いた。

「そ、そんな！？？」

「うおりゃああ！……！！……！」

「がはっ!?!」

フェイトが動揺している隙に、悟空はフェイトの横腹に拳を入れた。

「ふ、フェイトちゃん!?!」

なのはがフェイトの元へ向かおうとするが

「どりゃあああ!?!?!?!」

「ぐふっ!?!」

悟空に腹を蹴られ、ぶっ飛ばされてしまった。

さらに悟空が二人に攻撃を加えようとしたその時

「チエーンバインド!?!?!」

「ストラグルバインド!?!?!」

ガチイイイインッ

「!?!」

オレンジ色のバインドと、緑色のバインドが悟空の動きを封じた。

悟空は声がした方へゆっくりと視線を向けた。

「ま、間に合った。」

「大丈夫だったかい!?!フェイト!?!なのは!?!」

アルフとユーノが居た。

そして、ユーノはなのはの元へ、アルフはフェイトの元へ飛んでいった。

「なのは!!! 大丈夫?」

「うん!!! 大丈夫、ありがとうユーノ君!!!」

「ごめんフェイト。ちょっと遅れちゃったよ。」

「ううん。そんなことないよ、ありがとうアルフ。」

四人はそれぞれ話を終わると悟空の方を向いた。

「悟空さん!!!」

すると、なのはが突然悟空の名前を呼んだ。

「あの……、はやてちゃんを悲しませたのは私達じゃないんです!
!はやてちゃんを悲しませたのは私達に変装した、仮面の人達なんです!!!」

「えっ!?!」

悟空はなのはの言葉に驚いて、思った。

「(ちゆうことは、オラなのは達と勘違いえたまま戦ってたんかあ?)」

そして、悟空は冷や汗をたらたらと流した。

「は、ははは…その……わりい!!!」

「わりいで……済むかあああ!!!」

「ぶへええ!?!」

悟空は四人に謝ったが、アルフの鉄拳をもろに喰らった。

「あ、アルフ!?!落ち着いて!?!?!」

「わわ!?!アルフさん、抑えて!?!抑えて!?!」

「ストップ!?!ストップ!?!」

フェイト、なのは、ユーノはアルフにしがみついて取り押さえ、数分かけて宥めた。

その後、悟空達は近くのビルの屋上に降りてこれからどうするか話し合っていた。

「それでえ、どうやったらはやては元に戻れんだ?」

頭におつきなたんこぶを作った悟空がなのは達にはやてを元に戻す方法を聞いた。

「えっと、それは分からないんですけど、とりあえず闇の書さんに呼びかけをしてってクロノ君が言っていました。」

悟空のたんこぶを心配そうに見ながら、なのはは答えた。

「そっか、んじゃさっそく行くっかなあ……あぐあ！？いてえー！」
悟空が立ち上がるうとしたら、急に脇腹の部分を押さえて蹲った。

「ど、どうしたんですか悟空さん!？」

「そっぴゃあ、オラ肋が折れてんだった。」

「ええ!?大丈夫ですか!？」

なのはは悟空の容態を心配して聞いた。

「はは、ちと無理しちまったかな。……めえったなあ、こりゃ。」
確かに、悟空は肋が折れた状態で超サイヤ人になったザフィーラと
戦闘をしたため、無理が祟ったようだ。

「えっと、どうしよう!?!……あ、そっだ!!ユーノ君ちよつと
こっち来て!!」

オロオロしていたなのは何か思い付いたのか突然ユーノを呼んだ。
そして、ユーノがこちらへ近付いて来た。

「なんだい、なのは?」

「悟空さん肋が折れているみたいだから、なんとか治してあげて。」

「ま、まあ応急処置程度ならなんとか。」

そう言つと、ユーノは悟空の脇腹に手を置いて治癒魔法をかけた。

数分後

ユーノは応急処置を終えた。

「ふう〜、これで少しは痛みが和らいだ筈です。」
ユーノがそう言うと、悟空はいろいろと体を動かしてみた。

「おお！！ほんとだ、もうそんなに痛くねえぞお！！サンキュー、ユーノ！！！」

悟空がユーノに礼を言った時

「んっ！！??？」

悟空は何かを感じた。

「どうやら、ヤツはオラ達の居場所が分かったみてえだな！！！」

「ええ!?!？」

「嘘!?!？」

どうやら、闇の書がこっちに来るのを感じたようだ。

悟空達がこちらにも闇の書に向かおうとした
その時

『サー！！この結界内に民間人約二名を確認いたしました！！！！』

フェイトのバルディッシュが点滅して民間人がいるのを知らせた。

「民間人が!?!」

「結界内に!?!」

なのはとフェイトは驚いた。

まさか、民間人が結界内に取り残されているとは思ってなかったよ
うだ。

「よし!!じゃあ、オラがヤツの相手をすつから、その間におめえ
らはそいつらを助けんだ!!分かったか?」

「はい!?!」

そう言つて、悟空は闇の書、なのは達は民間人が居る所へ飛んでい
った。

悟空はしばらく飛んでいると、闇の書の女性を見つけ女性の前で止
まった。

「あなたが、私の相手ですか?」

「ああ、そうだ!?!」

そして、悟空は構えを取った。

「孫悟空…出来れば、あなたとは…戦いたくありません。」

「なんで、オラと戦えたくねえんだ？それに、オラの事も知ってるんか？」

不思議そうに悟空は女性に聞いてみた。

「私は守護騎士達の心とリンクしていて、あなたの事を知りました。守護騎士達はあなたの事を好いていました。特に、湖の騎士と鉄槌の騎士はあなたに好意を抱いていました。」

「へえ、そうなんか。」

「ですが…主はやての願いを邪魔するのであれば、排除させていただきます。」

「…はやての…願え？………」
悟空は首を傾げた。

「はい、愛する守護騎士達を奪った者達と、この世界を破壊し、主に穏やかな永遠の眠りを………」
目を閉じ、胸に手を当てながら闇の書は答えた。

「なに！？…はやてがそんな願え望む訳ねえだろ！！」

「主はやての願いは絶対です。そして、私は主の願いを…叶えるだけ……。」

「おめえはやてと一緒に生活してたんならわかんだろ!! はやては誰か傷つけたり苦しめたりすることを望むような子じゃねえぞ!!」

「……………」

「それに、今おめえが流している涙はなんだ!? おめえもこんなこと望んでねえんだろ!？」

何故か女性は行き成り涙を流し始めた。
もしかしたら、無意識のうちに流していたのかもしれない。

「この涙は主の涙です。私は所詮、ただの道具です。悲しみなど…感情などありません。」
女性は涙を拭いながらきつぱりと言った。

「なら今、おめえのやってる事はなんだ!？」

「何?」

「おめえははやてのためと言ったよな!! それははやてを想ってやってることじゃねえんか!? そんなこと感情のない道具にできることじゃねえぞ!! おめえにも心があんだよ!! オラ達と同じように……………」

悟空が必死に説得していたその時

ゴゴゴゴゴゴゴッ

ドカアアアンツ ドオオオオンツ

突如、大気が揺れ、火柱が上がった。

「なんだ!？」

「早いですね、……もう崩壊が始まりましたか……………」。
女性は悲しそうな顔でそう告げた。

「なんだと!？」

「私はじきに意識を無くします。そうなればすぐに暴走が始まります。そうなる前に……私の意識がある内に……主の望みを叶えてさしあげたい。」

「んな事はさせねえ!！」

悟空は女性殴り掛かった。
だが

「盾。」

女性がそう言うと、女性の前にシールドが張られ、悟空の拳を簡単に防いだ。

「オラが、おめえを止めてやる！！！！！！！！」
その言葉と同時に、悟空は再び超サイヤ人2に変身した。

ついに、悟空対闇の書の戦いが始まった。

「はああああ！！！！！！！！！！」

悟空と闇の書の女性は拳、脚、腕などを何度もぶつけ合った。
二人の攻撃がぶつかり合う度に、凄まじい衝撃波がしていた。

「はああ！！！！」

「でりゃあ！！！！」

二人は同時に拳で攻撃して

ドガアアンツ バキイインツ

悟空の拳は女性の腹に、女性の拳は悟空の頬に入った。

そして、二人はぶつ飛んだが女性の方が先に自力でブレーキをかけて止まり、悟空に向けて片腕をつきだした。

「刃似て、血に染まれ！！！！」

すると、女性の周りや悟空の周りに血のように真っ赤なナイフが現れ

「ブラッディダガー！！！！！！！！！！」

すべてのナイフが悟空に向かって放たれた。

「くっ！？…はああ！！！！」

悟空は全身から気合砲を放出してナイフを全部破壊した。
その後、悟空は闇の書の方を向いた。

「（闇の書…よくわかんねえヤツだが、パワーもスピードもすげえ…
…とんでもなく強ええぜ！！…。。。）」

悟空は闇の書の実力に驚いていた。

「悟空さ〜ん！！！！」

突然、聞こえた声に悟空は振り返った。

なのは達がこちらへ飛んで来ているのが見えた。

「なのは、フェイト。民間人の二人は助けられたんか？」

「えっと…それが…。」

「ん？…どしたあ？」

言いつらそうにするなのはに悟空が聞いてみた。

「その…民間人二人はアリサちゃんとすずかちゃんだったんです。」

「いい！？民間人って、アリサとすずかだったんか！！」

悟空は驚いた。

民間人二人がアリサとすずかだったとは。

「それで二人に、魔法の事ばれちゃって…嫌われちゃったかな…」

「…。」

「なのはそう言うと、落ち込んだ。
フェイトも同じく、落ち込んでいた。」

「なあ、その二人っておめえらの友達なんだろう？」
悟空は落ち込んでいる二人に聞いてみた。

「はい、そうですけど……。」

「だったら友達のことぐれえ信じてやったらどうだ？」

「「え？」」

「おめえ達二人の友達はこんなことぐれえでおめえ達のこと嫌いになるんか？」

「「あ!?!……。」」

「本当の友達や仲間うちゆうんはこんなことぐれえじゃ嫌いになつたりしねえはずだ。そうだろう？」

悟空は二人にそうアドバイスしてあげた。

「そう…だよな。」

「きつと…ううん、絶対そうだよ。」
そして、二人の顔に笑顔が戻った。

「そうだ！…友達の事ぐれえ信じる！！……………それより、おめえら下がってる。」
そう言つと、悟空は闇の書に向き直った。

「そろそろオラも本気出すからな。どうもこつからは半端な戦けえで終わりそうもねえかな。巻き込みまつかもしんねえからおめえらはどっか遠くに居てくれ。」

「で、でも…」頼む！！……………分かりました。」
なのは何か言いたそうだったが悟空の頼みを聞く事にした。

「じゃあ、悟空さん頑張ってください！！」

「ああ！！」
なのは悟空に応援の言葉を言つと、悟空は親指を立てながら応えた。

「行こう、フェイトちゃん。」

「うん！！」

そして、なのはとフェイトは遠くに飛んでいった。

「もう、いいのですか？」

「ああ、こつからはオラ本気でいくかな。覚悟しろよ!!」
悟空は気を放出させ、構えを取った。

「そうですか……なら、私も本気を出させていただきましょう!!」
闇の書も魔力を放出させて、構えを取った。
そして

二人は高速移動で消え、

ドガアアンツ

同時にぶつかりあった。

二人は常人ならば目に見えぬ程の速度で移動しながらラッシュで拳
や脚をぶつけあっていた。

バキイイイインツ

「かはっ!?!」

だが、それは長く続かず悟空の拳が闇の書の腹に入り、

「でりゃあ!!」

ドゴオンツ

さらに脚で顎を蹴り上げ、

ガシッ

「どりゃあー!!」

ドガアアンッ

「ぐああ!?!」

そして彼女の長い銀髪を掴み引き寄せ顔を殴り、もう一度蹴りを入れようとした。
しかし

シユッ

ガアアアンッ

「ぐああ!?!」

高速移動で回避されて後ろに回り込まれ、悟空は横顔に肘打ちを叩き込まれた。

「くっ!?!……この!!」

悟空はすぐに反撃に入り闇の書に蹴りを放ち当たった。

そして、もう片方の脚でもう一発蹴りを放ったが、

スカッ

ドゴオンッ

闇の書はそれを身を屈めて避け、悟空の腹に蹴りを入れた。
悟空も闇の書の顔に拳を入れた。

「おりゃあ！……！」

「はあああ！……！」

ドゴオオオオンッ！

悟空と闇の書は蹴りを放ち、脚同士がぶつかり合い大きな衝撃波が発生した。

そして、二人はその反動で互いに距離を取った。

「はあ……はあ……はあ……（やべえ、そろそろオラきつくなってきたぞお……。）」
悟空は連戦によって、かなりのエネルギーを消費してしまったようだ。

「……………」
対して、闇の書は息一つ乱しておらず完全に有利になっていた。
そして

シュッ

ドガアアンッ

「がはあっ！……？」

闇の書は一瞬で悟空との距離を詰めて腹に膝蹴りを入れ、

バアアアッ

「くあああ!?!」

両手を組んで振り降ろし地面へ叩き落とした。

ドオオオオオッ!?!?!!

「ぐぐう!?!」

悟空は地面に思いきり叩きつけられた。

「くっ!?!…こんぐねえ!?!」

悟空は痛みに耐え起き上がるうとしたが

ガチイイイッ!!

四肢にバンドが掛けられた。

「しまった!?!」

「これで終わりです。どうか、永遠なる安らかな眠りを……………。」
そう言つと闇の書の足元と前方にベルカ式の魔方陣が展開され、

「咎人達に…滅びの光を」
大量の魔力が収束し始めた。

「星よ集え…全てを撃ち抜く光となれ」
そして、巨大な魔力の球体が形成され、

「貫け……閃光!!!」
魔力の球体はどんどん大きくなっていき、

「スターライト………ブレイカー!!!!!!」
桜色の巨大な砲撃が放たれた。
さらに、その威力はなのはのスターライトブレイカーの五倍近くあった。

そして、桜色の閃光は悟空に向かって行った。

「くっ!? (もうダメだ!!!)」
悟空は咄嗟に目を閉じた。

だが、スターライトブレイカーが悟空に直撃する寸前

シュッ

何者かが悟空の前に高速移動で現れ、

「はあああ!!!!!!」
スターライトブレイカーに蹴りを入れ、無理矢理軌道を変えて空へ
弾き飛ばした。

「…………あれ？」
いつまで待っても痛みが来ないので、悟空はおそろおそろ目を開け
た。

すると、そこには見知った人物が居た。

「!?!?!?!ざ、ザファイラ!!!!!!」

「大丈夫か、悟空。」

闇の書の脅威的なパワーに敗れかけた悟空を救ったのは、なんとザ
ファイラであった。

果たして、闇の書に勝つ事は出来るのか!!!

そして、闇の書の中に居るはやての運命は……！

第九話超苦戦！？闇の書の真のパワー（後書き）

オッス、オラ悟空

オラが負けそうになった時、ザフィーラが現れて助けてくれた。

そして、ザフィーラはオラの代わりに闇の書と戦う事になった。

油断すんなよ、ザフィーラ！！

次回・魔法少女リリカルなのは S

形勢逆転！！ザフィーラの超絶パワー炸裂

「ザフィーラのヤツ……あんなに、強かったんだなあ。」

第十話形勢逆転!!ザフィーラの超絶パワー炸裂(前書き)

今回はザフィーラが大活躍します。

第十話形勢逆転！ザフィーラの超絶パワー炸裂

「ザフィーラ！おめえいつ起きたんだ？」

突然現れたザフィーラに悟空は驚きながら聞いた。

「さっきな。……それより悟空。」

「ん？」

「俺が暴走した時、止めてくれた事感謝する。…恩にきつたぞ。」

「ああ、気にすんな。」

ザフィーラは悟空の方に顔を向け、薄く笑いながら礼を言った。

それに、悟空も笑いながら言った。

だが、ザフィーラはすぐに視線を前に戻し闇の書の女性を睨んだ。

「それよりも……交代だ、悟空。お前は少し休んでいる！！」

「！？…ザフィーラ、ヤツはとんでもなく強ええぞ。………油断すんなよ。」

ザフィーラの言葉に、悟空も真剣な表情になり忠告した。

「ああー！！」

シュッ

そして、ザフィーラは高速移動でその場から消えた。

シュツ

ザフィーラは高速移動で闇の書の女性の前に移動して彼女に話し掛けた。

「久しぶりだな。」

「盾の守護獣か。……………ああ、本当に久しいな。」
そういう会話をした後、ザフィーラは構えを取った。

「今度は、俺が相手だ。」

「そうか…私も主の願いを叶えるため手加減はしないぞ。」
闇の書も構えを取った。

「俺も初めからそのつもりだ。」

そして、二人は同時に踏み込み、

「うおおお!!!!!!」

「はあああ……!!」

ドゴオオオオンッ

拳と拳をぶつけ合わせた。

「始まったな。」

悟空は地面に横たわりながら、ザフィーラと闇の書の戦闘を見ていた。

「オラちよつと眠くなってきちゃった。……寝よっかな。」

連戦での過度の疲労により悟空は睡魔に襲われ、そのまま眠ってしまった。

と、そこへ

「悟空さん!!」

「悟空!!」

なのはとフェイトがやって来た。

どうやら、悟空がピンチである事に気付いて飛んできたようだ。

そして、二人は悟空のそばに駆け寄った。

「悟空さん！！大丈夫ですか！？」

「がああああ……ぐおおおお……。」

「……………寝てる？……良かった。」
なのはは悟空の容態を心配したが、寝てる事に呆気にとられ、少ししてから安堵した。

その時

ドオオオオンッ

「っっ！？」

轟音が聞こえ、咄嗟になのはとフェイトは空を見上げた。

すると、ザフィーラと闇の書が高速移動をしながら、ぶつかりあっているのが目に入った。

「！？なのは、ここは危ないから少し離れよう！！」

フェイトはここでは戦闘の余波が来るのではと思い、ここから離れる事を提案した。

「うん、そうだね。……ととつ、悟空さんも連れて行かなきゃ、フェイトちゃん手伝って。」

「わかった。」

二人は悟空の体をなんとか持ち上げ、そのままその場から離れた。
った。

「はああああ!!!」

闇の書は、魔力を纏った拳でザフィーラにラッシュを放つが

「……………」

ザフィーラは、それを首を傾けたり、体をずらすなど小さな動きですべて避けていた。

そして、闇の書はザフィーラの頭目掛けて蹴りを放った。

ドガンッ

「くっ!?!」

「……………」

だが、ザフィーラはそれを片腕で受け止めた。

そして、脚を払いのけ、

「はあっ!?!」

「!?!」

拳で反撃をした。

闇の書は身を屈めて避けた。

だが、

ザフィーラの反撃はそれだけでは終わらず、拳や脚のラッシュで闇の書を追い詰め始めた。

「ぐっ!?!」

闇の書はザフィーラの猛攻をなんとか避け続けていた。

「でやああ!?!」

ガアアアンツ

「…うぐっ!?!」

ザフィーラは闇の書に正拳を放ったが、闇の書は腕をクロスさせ防いだ。

「はあっ!?!」

ズガアアアン

「ぐはあ!?!」

そして、ザフィーラはもう片方の拳で闇の書の顔を殴り

ドガガガガガッ

さらに、立て続けに闇の書の顔を何度も殴り続けた。

「ふんっ!?!」

スカッ

「はああ！……！！」

ドガアアンッ

「ぐおっ！？」

とどめに、蹴りを放ったが闇の書はそれを咄嗟にしゃがんで避け、そのままザフィーラを上へ蹴り上げた。

闇の書はさらに、高速移動で先回りして

「たあああ！！」

両手を組んで振りおろし下へ叩き落とそうとした。

だが

シュッ

ザフィーラは高速移動で回避して、姿を消した。

「なっ！？……どこだ！！」

「こっちだ……。」

闇の書がキョロキョロと辺りを探していると、背後から声を掛けられた。

闇の書は驚き振り返るとそこには、ザフィーラが腕を組んで浮いていた。

「なっ！？……（は、速い！？完璧に私の全力の速度を越えている！

！）」

闇の書はザフィーラの実力が、自分よりも上だと言うことに凄く動揺していた。
そこへ

「ザフィーラさあん!!!」
なのはとフェイトが向こうから飛んできて、ザフィーラの横に並んだ。

「大丈夫ですか？ザフィーラさん。」

「ああ、問題ない。」
なのははザフィーラに心配そうに大丈夫か訊いたが、ザフィーラはそれを冷たく返した。
その時

「はああああ!!!」

「!!!??」
闇の書がザフィーラに拳で渾身の一撃を放ってきた、なのはとフェイトは突然の事に驚いた。

ガシッ

「!?!」
しかし、ザフィーラを気にも止めず、渾身の一撃を片手で受け止めて掴んだ。

そして、ザフィーラは闇の書の拳を掴んだまま自分の方へ引き寄せ
「でいやああ！……！」

「がはっ!？」

腹に膝蹴りを叩き込み、

「はああ!……!……！」

「うああああ!？」

さらに、両手を頭の上で組みそのまま振りおろして下へ叩き落と
した。

「あ、あのザフィーラさん……いくらなんでもやり過ぎなんじゃ……
……」

「うんうん。」

ザフィーラのその行動になのはが戸惑いながらそう言った。

隣に居たフェイトもしきりに首を上下に動かしていた。

それもそのはず、ザフィーラは女性である闇の書に容赦ない攻撃し
たからだ。

「……………問題ない。」

「「いやいや、問題大アリですから!？」」

軽く流したザフィーラを、なのはとフェイトが同時にツッコミをし
た。

シュッ

と、そこへ先程ぶっ飛ばされた闇の書が高速移動で再び現れた。

「はあ……はあ……はあ……。」

だが、闇の書はかなり息があがっていた。

やはり、ザフィーラの攻撃がかなり効いていたようだ。

「はあ……はあ……くっ！？……はあああ！……！」そして、闇の書は突っ込みザフィーラの顔に拳を放った。

「！？」

だが、その拳はザフィーラには届かず当たる寸前で止まってしまった。

突然、身体が言うことをきかなくなってしまったのだ。

実はこの時、闇の書の中ではやてが目を覚ましていた。

「ほんなら名前をあげたる。闇の書なんて名前は、貴女には似合わへんからな。私は管理者や。私にはそれが出来る……！」

「主…」

はやての足下に白い魔法陣が展開され、

「>外に居る管理局の魔導士の人、聞こえますか？そこに居る子の保護者、八神はやてです。<」
外に居る人へ念話を送った。

「>外に居る管理局の魔導士の人、聞こえますか？そこに居る子の保護者、八神はやてです。<」

「えっ！？はやてちゃん！！」

「はやて！？」

「主！？」

念話を受けたザフィーラとなのは、フェイトは驚きながらも、はやての名前を呼んだ。

「>その声は……なのはちゃん、フェイトちゃん！？それに、ザフィーラもそこにおるんか！？」<」
そして、はやても逆に驚いていた。

「>はい！！私もここにおります、主！！<」

「>うん！！なのはだよ！！実は、いろいろあって闇の書さんと戦ってるの！！<」

ザフィーラとなのははやてに念話で、そう返事をした。

はやての声を聞いて、三人は少し安心した。

「>ゴメンなのはちゃん、フェイトちゃん、ザフィーラ。何とかその子止めてあげてくれへんか？<」

「>え？<」

「>魔導書本体からはコントロールを切り離れたんやけど、その子が動いとると管理者権限か使えへん。今、そっちに出てるのは、自動行動の防御プログラムだけやから。管理者権限が使えれば、なんとか出来るかもしれへん！！<」

はやてがなのは達に説明した。

「>わかった。魔力ダメージを与えればいいんだね！！<やろう、フェイトちゃん！！ザフィーラさん！！<」

「うん！！<」

「ああ！！<」

なのはとフェイトは、闇の書に向けてデバイスを構えてデバイスの先に、ザフィーラは手のひらに魔力を溜め

「スターライトブレイカー!!!!!!」

「プラスマスマッシャー!!!!!!」

「波ああああ!!!!!!」桜色、金色、青色の閃光が放たれて闇の書を呑み込んだ。

闇の書の中

「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る。」

はやては両手を闇の書の顔に添える。

「強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール……リインフォース。」

闇の書に新たな名を贈り、魔法陣は強く輝いた。

「新名称『リインフォース』認識。管理者権限の使用が可能になります。」

「うん!!」

「ですが、防御プログラムは止まりません。」

「まあ、何とかしよ。」

はやての前に一冊の本『リインフォース』が現れた。

「行こか、リインフォース。」

はやてはリインフォースを抱いた。

「はい、我が主。」

はやては光に包まれた。

ドカアアアアンツ

なのは、フェイト、ザフィーラが放った三色の閃光は大爆発を起しました。

「やった……かな？」

「分からない。」

なのはとフェイトは話をしていた。

その時、爆煙の中から黒い球体のようなものが飛び出して、海へ落ちた。

そして、なのは達に、エイミィからの通信が入った。

「「みんな気をつけて！！闇の書の反応、まだ消えてないよ！！！」

「「！？」」

どうやら、あの黒い球体が闇の書の防御プログラムのようだ。

すると、なのは達のすぐ近くの建物の屋上に白い光が現れた。

それと同時に、ザフィーラは青色の粒子となってその白い光の元へ向かった。

「おいで…私の騎士達…」

そして、白い光を囲むように、守護騎士達が現れた。

「我等、夜天の主の下に集いし騎士。」

剣の騎士 シグナム

「主在る限り、我等の魂尽きる事無し。」

湖の騎士 シヤマル

「この身に命在る限り、我等は御身のもとに在る。」

盾の守護獣 ザフィーラ

「我等が主、夜天の王、八神はやての名の下に。」

鉄槌の騎士 ヴィータ

そして、光の中には、はやてとリインフォースがいた。

「リインフォース。私の杖と甲冑を。」

「はい。」

はやては黒いバリアジャケットを見につけ、杖を手にした。

直後、光は消えて、中からははやてが姿を現した。

「夜天の光よ、我が手に集え！！祝福の風リインフォース……セツトアップ！！！！」

夜天の書をセツトアップさせたはやては、髪の色が変わり、騎士甲冑をイメージしたようなバリアジャケットを身に纏い、背中には三対の漆黒の翼が現れた。

今ここに守護騎士達が復活し、夜天の王『八神はやて』の元に集結した。

そして、ついに闇の書を巡る戦いもいよいよクライマックスだ！！

第十話形勢逆転！！ザフィーラの超絶パワー炸裂（後書き）

オッス、オラ悟空

はやてがついに闇の書の中から出てきた。
それに、シグナム達も復活した。

そして、後は闇の書の防衛プログラムをぶっ壊すだけだ！！

次回・魔法少女リリカルなのは S

これで終わりだ！！防衛プログラム破壊

「これで、ようやく終わったなあ。」

第十一話これで終わりだ！！防衛プログラム破壊

「はやて……。」

ヴィータは目に涙を浮かべて、はやての名前を呼んだ。
はやては優しく微笑んでいた。

「主はやて、すみません。」

「はやてちゃん……その……ごめんなさい。」
シグナムとシヤマルが、はやてに謝った。

はやては首を横に振った。

「ええよ、みんなわかってる。リインフォースが教えてくれた。そ
やけど細かい事は後や。」

はやては嬉しそうに微笑み

「おかえり、みんな。」

「う……うあああ……！！！！！！」
はやてはシグナム達におかえりと、温かい言葉を掛けた。
そして、その言葉を聞いてヴィータが泣きながらはやてに抱き付い
た。

「はやて……はやて……はやてえええ……！！！！！！」

涙を流しながら、ヴィータははやての名前を何度も叫んだ。
はやては優しくヴィータを抱いて、頭を撫でた。

丁度その時、なのはとフェイトが飛んできた。

「なのはちゃんとフェイトちゃん、ゴメンな。ウチの子達がいる
迷惑掛けてしもつて。」

「うっん。」

「平気。」

なのはとフェイトは笑顔で答えた。

「とじろで…。」

「なに？はやてちゃん。」

唐突に、はやてが訊いてきた。

「悟空さんは、どこにおるんや？」

「ああ！？」

悟空がどこにいるか聞かれ、なのはとフェイトは悟空を置いてきた
事を思い出した。

「そつだ、悟空さん寝ちゃったからそのまま置いてきちゃった！

「！」

「どどどどうしよう、なのは!!」
なのはとフェイトがあたふたしていた

その時

シュンッ

はやての後ろに人影が現れ

「なのは、フェイト。オラを置いてくなんて、二人ともひでえぞ。」
と、優しく懐かしい声がした。

「っ!?!」

はやてはゆっくりと後ろに視線を向けた。
そこには

「……………悟…空さん……………」

「はやて、無事だったか？」

悟空が笑顔でそこに立っていた。

「悟空さ」「悟空!?!?!?!」「…あっ!?!」

ポフッ

「おっと、なんだどうしたヴィータ？」

はやてが悟空の名前を呼ぼうとした時、ヴィータが先に悟空に飛び付き抱きついた。

悟空は少し驚いたが、ヴィータを抱き止め頭を撫でた。

この時はやてが、

「（くうく、ヴィータなんちゆう羨ましい事を〜）。」
と、心の中で叫んでいたとか。

そこへ

「はやてちゃん。」

「はやて。」

なのはとフェイトがはやて近くにきた。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、ごめんな。うちの子達がいろいろ迷惑かけてしまったみたいで…。」

はやては申し訳なさそうな表情で二人に謝った。

「ううん、気になしで。」

「全然平気だから。」

二人は、笑って答えた。

「そっか、ありがとう。」

そして、はやても笑顔になってお礼を言った。

「……つて、悟空さん！！ボロボロやないですか！？なのはちゃん達も！！シャマル、三人に回復魔法や！！」
はやては悟空の今の状態を見て、あたふたしてシャマルに三人の回復を頼んだ。

「はい！！クリアルヴィント、本領発揮よ？」
シャマルはそう言って右手の人差し指にはめている指輪に口づけをした。

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで！！」
シャマルの足元に魔法陣が浮かび、緑色の暖かな光が悟空達三人を包み込んだ。

シユウウウウウッ

すると、悟空達の傷がどんどん回復していった。

「湖の騎士シャマルと『風のリング』クリアルヴィント。癒しと補助が本領です。」
シャマルはそう言うにつこり微笑んだ。

「ありがとうございます！！シャマルさん！！」

「す、凄い……。」

「サンキューな、シャマル。」
なのは、フェイト、悟空はそれぞれシャマルに礼を言った。

「……………ん？」

「？……………どないしたんですか？悟空さん。」
突然、悟空がキョロキョロし始め、はやてが不思議に思い訊いてみた。

「いや、近くにユーノとアルフの気があるんだけどよ。それともう一つ一回感じたことがある気が……………」

「すごい、よくわかったな。」

そう言つて、一人の黒髪の男の子とユーノとアルフが現れた。

「あれ？おめえは確かあ？」

悟空が黒髪の男の子見覚えがあり、必死に思いだそうとしていると

「あつ！！あたし達が結界に閉じ込められた時、出てきていきなり悟空に瞬殺された奴！！」

ヴィータが黒髪の男の子を指差してそう言った。

「それを言うな！！僕だつて気にしてるんだ！！……………コホンツ！！時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。和んできるところ悪いが、時間が無いのでこちらの話を聞いてほしい。」

ヴィータに言われた事を意外と気にしていたらしく取り乱したが、咳払いをして本題に入った。

「時間がねえ？…一体なんの時間だあ？」

「あその黒い物体：闇の書の防衛プログラムが、後数分で暴走を始める。そこで、僕等はそれを何らかの方法で止めなければならぬ。そして、停止させる方法は現在二つあるんだ。」

「二つか……んで、その方法は？」

悟空は、クロノにその二つの方法が何なのか訊いてみた。

「まず一つ目、極めて強力な氷結魔法で停止させる。ようするに氷付けにする事だ。そして二つ目、軌道上で待機している戦艦アースラの魔導砲…アルカンシエルで消滅させる事、この二つだ。それだ、これ以外に他にいい手は無いか？」

クロノがそう言うと、みんな一様に渋い顔をした。

「えっと…最初の氷付けにするのは多分難しいと思います。主のな防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから。それに凍結させても、コアが在る限り再生機能は止まりません。」

シヤマルの話によると、どうやら凍結させるだけでは防衛プログラムが止まることはないようだ。

「アルカンシエルも絶対ダメだ！！！！こんなところでアルカンシエル撃つたらはやての家まで吹き飛んじゃうじゃんか！！！！」

ヴィータは、魔導砲アルカンシエルの使用に反対した。

「そ、そんなに凄いの？」

なのはは、ヴィータの話の聞いてアルカンシエルについてユーノに

訊いてみた。

「えっとね、発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲…つまり、当たり一帯を吹き飛ばしちゃうんだ。」

「あ、あの、私はそれ反対です!!！」

「同じく!!！」

そして、ユーノの説明を聞いてなのはとフェイトもアルカンシエル使用に反対した。

「僕も、かあさ…艦長も使いたくないよ。…でも、闇の書防衛プログラムの暴走が本格的に始まったら、被害はそれよりずっと拡大する!!！」

「暴走が始まると、触れた物を侵蝕して無限に広がっていくから…。」

「クロノの言葉にユーノが、さらに付け加えた。」

「はい、みんな!!あと十五分しかないよ!!！」

その時、エイミィが残り時間を通信で伝えた。

「何かないか？」

クロノは悟空の方を向き、そう訊いた。

「何かって言われてもなあ。オラわかんねえぞ!!！」

ヴィータが悟空に近付き、訊いてみた。

「ああ！！オラがそのアルカンシエルっちゅうもんの代わりを撃ちやあいいんだ。」

『はあっ！！??？』

ザフィーラ以外の者達は驚愕の声を張り上げた。

「アルカンシエル以外の代わりって、そんなものあるわけないだろう！？」

クロノは驚きながらも悟空に詰め寄った。

「かめはめ波だ。」

しかしその時、ザフィーラが静かにそう言った。

「そうだ。」

「あのく、そのかめはめ波って本当にアルカンシエルの代わりになるんですか？」

なのはが、ザフィーラにそう訊いてみた。

「ああ……いや、むしろアルカンシエルよりも威力は遥かに上だろう。かめはめ波は、惑星一つを消し去る威力がある。」

『はいいいいい！??』

それを聞いて、みんなはさらに驚いた。

まさか、惑星一つを消し去る威力を持っているとは思ってもみなか

ったようだ。

「でも、クロノ君！！それだけの威力があれば……。」

「ああ！！防衛プログラムを消滅させられる！！」

「クロノ君！！暴走臨界点まであと十分！！」
「エイミイはキーボードを操作しながら言った。」

「よおしくし！！そんじゃ、みんないつちよやってみつか！！」

『おお！！！！』

そして、なのは達はそれぞれの場所についた。

「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の複合四層式や！！まずはソレを破るで！！」
と、はやてが言った。

「バリアを抜いたら本体に向けて、私達の一斉攻撃でコアを露出！！」
と、フェイト

「そしたらユーノ君達の強制転移魔法で、上空に転送！！」
空を見上げながら、なのはが言った。

「そして、あとは孫のかめはめ波で消滅！！」

シグナムが言った。

なのは達は防衛プログラムを止めるために、それぞれのデバイスを構えた。

そして、防衛プログラムの周辺に数本の禍々しい黒い柱が立ち、防衛プログラムが暴走を始めようとしていた。

「夜天の魔導書を、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム。闇の書の…『闇』」
防衛プログラムを見ながら、はやてが呟いた。

その時、黒い球体が消え、中から防衛プログラムが姿を現した。カニのような足があり、カラスのような黒い翼が生え、獣のような鋭い爪を持った前足、幾つかの動物を合わせたような機械の怪物だった。さらに、頭部には、紫色の女性のようなモノがあった。

「チェーン・バインド！！！！」

「ストラグル・バインド！！！！」
アルフのオレンジ色のバインドと、ユーノの緑色のバインドが、防衛プログラムの周りにある尻尾のようなモノを捕らえた。

「縛れ、鋼の軛！！」
ザフィーラから白い魔力の刃が現れ、複数の尻尾を横薙ぎに斬り払った。

「レイジングハート、エクセリオンモード!!」
なのはは、レイジングハートの形態を変えた。
そこへ、ヴィータがグラーファイゼンを構えながら近寄って来た。
「ちゃんと合わせるよ!!高町なのは!!!!」

「ヴィータちゃんもね!!」

「『鉄槌の騎士』ヴィータと、『鉄の伯爵』グラーファイゼン!!
!!」
撃鉄を起こしカートリッジをロードさせ、ヴィータはグラーファイゼンを巨大ハンマーにさせた。

「轟…天…爆碎!!!!」
叫びながら、巨大ハンマーを大きく振り上げ、

「ギガント…シユラーク!!!!」
防衛プログラム目掛けて振り下ろした。

ガギイイイインッ

防衛プログラムはバリアを張って、巨大ハンマーとぶつかる。衝撃で波が荒れる。

ミシツミシツ

パライイイインッ

しかしバリアは、ヴィータの巨大ハンマーによって粉々に砕かれた。

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン、行きます!!!」
足下に桜色の魔法陣を展開する。

カートリッジロードをすると、レイジングハートから桜色の翼が出て、防衛プログラムに向けて構える。

「エクセリオンバスター!!!!!!」
先端に桜色の魔力が溜まっていき、

「ブレイク・シュート!!!!!!」
桜色の閃光を放ち、防衛プログラムのバリアに直撃して、桜色の閃光はバリアを容易に破った。

「次、シグナムとフェイト!!!!」

「『剣の騎士』シグナムが魂、『炎の魔剣』レヴァンティン!!!」
レヴァンティンを上に掲げ、

「刃と連結刃に続く、もう一つの姿!!!」
撃鉄を起こして、レヴァンティンの柄の部分と鞘は合わせて『弓』に変化させた。

そして、魔力で矢を形成して、防衛プログラムに向けて構えた。

「翔けよ、隼!!!!!!」

矢は紫色に輝き、防衛プログラムに向かって放たれた。

ドカアアアアンツ

バリアに当たった矢は爆発して、バリアを砕いた。

「バルディッシュユ!!!ザンバーフォーム!!!!!!」

バルディッシュユの形が変形して、金色の刃が出て剣の形になった。

「フェイト・テストロッサ、バルディッシュユザンバー!!!行きます
!!!」

足下に金色の魔法陣が展開される。

バルディッシュユを上に掲げ、撃鉄を起こす。

「撃ち抜け、雷神!!!!!!」

バルディッシュユを振り下ろし、金色の魔力刃が伸びて、伸びた金色の魔力刃は、バリアをを防衛プログラムごと斬った。

その時、防衛プログラムからミミズのようなモノが出てきて、砲撃を放とうと魔力を溜め始めた。

「『盾の守護獣』ザフィーラ!!!砲撃など撃たせん!!!!!!」

しかし、ザフィーラが白い魔法陣を展開して、白い魔力の刃が、ミミズのようなモノを貫いて動きを止めた。

「ガアアアアアッ!!!!!!」

「っ!?!」

だが、闇の書の闇は巨大な口を開き、さらに強力な砲撃を放った。
ドカアアアアアッ

「ザフィーラ!?!」

その砲撃は、ザフィーラに直撃して、はやてはザフィーラの名前を叫んだ。

「そんなっ!?!」

「ザフィーラ!?!?!?!」

みんながザフィーラの名前を呼んだが、爆煙の中から返事は返って来ない。

「うそやろ、ザフィーラ………ザフィーラアアアア!?!?!?!?!」
はやてが叫んだその時、爆煙の中から金色の光が漏れ、闇の書の闇に青色の閃光が放たれ、

ダアアアアンツ

「ガアアアアツ!?!」 闇の書の闇の頭を粉碎した。

「な、なんや!?!」

はやてが驚いていると、爆煙が吹き飛びザフィーラが現れた。

「!?!…無事だったんや、ザフィー………ラ?」

ザフィーラを見つげ、名前を呼ぼうとしたが言いよどんだ。

他のみんなも、ん?…って顔でザフィーラを見た。

そこへ、ザフィーラがみんなの元へ降りてきた。

「ザフィーラ、お前!?!」

「その姿って!?!」

「はああ!?!」

シグナム、シヤマル、ヴィータはザフィーラの姿を見て驚いた。他のみんなも啞然としていた。

ザフィーラの白銀の髪は金髪になり逆立っており、瞳の色が碧色に変わっていた。

ザフィーラは超サイヤ人になっていた。

「えっと、ようわからへんけどザフィーラなんやな。」

「ああ。」

「ザフィーラ!! 貴様、主はやてになんという口の聞き方を!?!」

ギロツ

「うっ!?!」

シグナムはザフィーラの気迫に押され、押し黙ってしまった。

それもそのはず、ザフィーラは超サイヤ人になっているため、性格が荒くなっていて、しかも顔もきつくなっており、かなり怖い。

「はやて、早く次の攻撃を……。」

「う、うん!! 分かった!! 彼方に来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりて撃ち貫け!?!?!」

はやてはザフィーラの気迫に押されながらも、白い魔法陣を展開する。

すると、防衛プログラムの上空に、七つの白い槍を出した。

「石化の槍、ミストルティン!!!」

そして、白い槍は防衛プログラムを貫き、防衛プログラムは貫かれた所から石化していった。

だが、石化した防衛プログラムは内側から破壊して、獣の顔をした機械やら尻尾やらが無茶苦茶に飛び出してきた。

「うわ〜!!!なんか凄い事になってるよ!!!」

アルフは若干引いて、そう言った。

「やっぱり並の攻撃じゃ通じない!!!」

「だが、攻撃は通っている。プラン変更はなしだ!!!」

クロノが氷結の杖『デュランダル』を構えて、エイミィに答えた。

「悠久なる凍土、凍てつく極の地にて、永遠の眠りを与えよ。」

呪文を唱えて、クロノがデュランダルを振った。

すると直後、海がどんどん凍っていった。

「凍てつけ!!!」そして、そのまま防衛プログラムごと凍らせた。

しかしそれでも、まだ防衛プログラムは止まらなかった。

「行くよ、フェイトちゃん!!!はやてちゃん!!!」

「うん!!」

なのはの言葉に、二人は頷いた。
三人による一斉砲撃だ。

なのはの前に魔法陣が展開され、桜色の魔力が集束される。

「全力全開!!スターライト……」
レイジングハートを振り上げる。

「雷光一閃!!プラズマザンバ……」
足下に金色の魔法陣を展開し、バルディッシュを構える。
空から紫色の雷が落ち、金色の魔力刃に当たる。

はやては杖を空に掲げて魔力を溜める。

「ごめんな…おやすみ……」

防衛プログラムを見つめ、はやては辛い顔をして呟いた。

「響け終焉の笛、ラグナロク……」

そして、三つの白い魔力の弾を作り出す。

「ブレイカー!!……!!」

三人が同時に叫び、桜色と金色と白色、三つの閃光が防衛プログラムに向けて放たれた。閃光は直撃し、大爆発を起こし、

「捕まえた!!」

シヤマルが防衛プログラムのコアを捕らえた。

「長距離転送!!」

「目標上空!!」

ユーノとアルフが転送準備をする。

「転送!!!!!!」

シャマル、ユーノ、アルフの三人によってコアは転送された。

上空

「……来た!!」

悟空がそう呟くと、目の前に防衛プログラムのコアが転送されてきた。

そして、悟空は超サイヤ人になり、かめはめ波の構えを取った。その時、

シュツ

「悟空。」

「ザフィーラ!?!」

ザフィーラが悟空の隣に高速移動で現れた。

「俺も手伝うぞ。」

そう言つと、ザフィーラもかめはめ波の構えを取つた。

「へへっ！！サンキュー、ザフィーラ！！」

「フンッ」

そして、二人はエネルギーを溜めた。

「かああああ！！…めええええ！！…はああああ！！…めええええ！！」

エネルギーはどんどん溜まっていき、

「波ああああ！！！！！！！！」

一気に放たれた。

一つになった青白い閃光はコアを呑み込んだ。

ガギギギギッ

「なに！？」

「しぶとい奴だ！！」

だが、闇の書のコアはすべての魔力を防御魔法に注ぎ込み、まだ消滅していなかった。

「このっ！！…ザフィーラ！！！！」

「ああ!!」

「フルパワーだああああ!!!!!!!!!!」
二人は、それぞれさらに気と魔力を開放させた。
かめはめ波の威力は何倍にも上がった。

パライイイインッ

そして、闇の書の防御魔法を破壊して、そのまま闇の書のコアを呑み込み、

ドカアアアインッ

コアごと大爆発した。

ドカアアアインッ

『!?!?』

「今のは?」

「エイミィ、今のは一体何だ!?!」

クロノがエイミーに通信で訊いた。

「いまのが悟空さんとザフィーラの言ってた、かめはめ波っていう技みたい。」

「どのくらいの威力があつたんですか？」

次に、なのはがエイミーにかめはめ波の威力がどれくらいか訊いてみた。

「えっとね……は、ははは、アルカンシエルの五十倍だつて。」

「なっ！……！！……？……？……？」

それを聞いて、みんな固まった。

「まさか、アルカンシエルより強力な砲撃が撃てるなんて……彼は人間か？」

「いや、悟空さん人間やのうて、サイヤ人っちゅう宇宙人や。」
クロノの疑問に、はやてがそう言った。

「なっ！？彼は宇宙人なのか！？」

「そっや。」

はやてが悟空の事について話していると、そこへ、悟空とザフィーラがゆっくりと空から降りてきた。

「あつ！！悟空さああん、ザフィーラああ！！」

はやては二人を見つげ、大きく手を振った。

それを、悟空は親指を立て笑顔で応えた。

そして、悟空とザフィーラはやての元へ降りた。

「悟空……さ……ん……ですか？」

はやては降りてきた悟空を見て、ザフィーラの時と同じように言いよどんだ。

「ああ、そつかあ！！はやては、超サイヤ人になったオラの事知らねえんか！！……でもま、いつか！！」

そう言うと、悟空は超サイヤ人を解いた。

隣にいたザフィーラも超サイヤ人を解いていた。

すると、なのは、フェイト、はやてが悟空をずっと見ていた。

「ん、どした？」

「けっこう簡単に戻れるんだなって……。」

「不思議だなあ……と思って。」

「うん、黒髪黒目……いつもの悟空さんや！！」

その後悟空達が少しの間談笑していると、突然はやてが意識を失った。

「はやて!..!」

悟空は咄嗟にはやてを受け止めて抱きかかえた。

「（気が減ってんな、オラの気を分けとくか…。）」

悟空ははやての胸に手を当て、気を分けた。

「悟空!..!はやては!..?」

そこへ、ヴィータがはやてを心配して駆け寄ってきた。

「大丈夫だ。疲れて眠ってるだけみてえだ。」

「そっか…。」

それを聞いて、みんな安心した。

「ああ、すまないが色々と話したいことがあるのでアースラに来てくれないか?」

クロノにそう言われ、悟空達はアースラに向かった。

こうして、闇の書の闇は悟空達の活躍により完全に消え去った。

第十一話これで終わりだ！！防衛プログラム破壊（後書き）

オッス、オラ悟空

防衛プログラムを破壊したと思ったら、はやてが突然気を失ってしまった。

だから、一度アースラっちゅう所へ行く事になったんだ。

でも、そこでリインフォースが自分を破壊するって言っちゃった。

次回・魔法少女リリカルなのは S

死ぬなよ！！リインフォースの決断とはやての涙

「諦めんじゃねえぞ！！リインフォース！！」

第十二話死ぬなよ!!リインフォースの決断とはやての涙(前書き)

すみません!!更新遅れました!!

感想、質問待っています!!

第十二話死ぬなよ！！リインフォースの決断とはやての涙

悟空達はクロノに言われ、共にアースラに来ていた。

そして、はやてを医務室に連れていき、ベッドに寝かせた。

そして、今医務室には悟空とヴォルケンリッターとリインフォースがはやてを囲むようにして会話をしていた。

「ようやく終わったな。」

そう、悟空が言った。

「ああ、主はやても容態が良くなったようだ。」

シグナムがはやてを見て、微笑みながらそう言った。

「これで、みんなはやてと一緒に、幸せに暮らせんדר？」

「……それは無理だ。」

と、突然リインフォースが顔を俯かせて言った。

「……えっ！？なんでだ!？」

悟空は、驚きリインフォースに訊いた。

「……破損が致命的な部分にまで至っている。…防衛プログラムは停止したが、歪められた基礎構造はそのままだ。私は、……遠からず新たな防御プログラムを生み出し、暴走するだろう……。」

リインフォースがそう語り、それを聞いてヴォルケンリッター達が悲痛な面持ちをした。

「……なんとか…出来ねえんか？」

悟空が真剣な表情で、リインフォースに訊いてみた。

「無理だ…管制プログラムである、私の中からも…夜天の書本来の姿は消されてしまっている…。」

悟空の質問に、首を横に振ってリインフォースは答えた。

「主はやては大丈夫なのか…？」

「何の問題も無い。私からの侵食も完全に止まっているし、リンクカーコアも正常に作動している。不自由な足も、時をおけば自然に治癒するだろう。」

「そう。じゃあ、それならまあ、よしとしましょうか」
シャマルが、壊れてしまいそうな笑顔で微笑んだ。

「ああ。心残りは無いな」
シグナムもどこか悲しげな、それでいて晴れ晴れとした笑みを浮かべる

「防御プログラムが無い今、夜天の書の完全破壊は簡単だ。破壊しちゃえば暴走する事も二度とない。変わりに…あたしすらも消滅するけど…。」

「……………そんなの駄目だ！！！！」

悟空が立ち上がって声をあげた。

皆の視線が集まった。

「なんで…なんで消えなきゃいけないんだよ！？それじゃ、はやて

「がかわいそうだぞー!!」

「孫、静かにしろ。主はやてに迷惑だ。」
シグナムに咎められたが、

「黙ってられつかよ!!おめえらは、悲しくねえんか!?!」
悟空はそれでも叫び続けた。

「…っ!?!…悲しいよ!?!?!」

「!?!?」

その時、ヴィータが叫んだ。

悟空は驚いて、ヴィータの方を見ると、

「あたし達も、はやてと別れるのは悲しいよ!!でも、これしか方法が無いんだ!!」

ヴィータは泣いていた。そして、泣きながら叫んだ。
他のみんなも、静かに涙を流していた。

「私達も悲しいんですよ。…それでも……。」
すると、シヤマルはそう言つと、悟空の後ろに周り、そつと悟空を後ろから抱きしめ、

「私たちがいなくても、悟空さんが居るんですもの、はやてちゃんもきつと幸せですよ。」
涙を流しながら、そう言った。

その言葉を聞いて、悟空はズキッと心が痛くなった。

「いや、違う。」

「……っ!?」「……」

だがその時、リインフォースが急に口を挟んだ。

「おまえたちは残る。逝くのは……私だけだ。」

「っ!!」

その言葉に悟空は驚いてリインフォースの顔を見た。他の皆も驚き、リインフォースを見た。

すると、リインフォースは突然立ち上がり、

「これから私は、彼等に私の破壊を頼んでくる。」

リインフォースはそう言うと、扉を開け医務室から出ていった。

「夜天の書の破壊?……どうして!? 防衛プログラムは破壊したはずじゃ!？」

なのはは、クロノの言葉を聞いて呆然としたが、すぐにクロノに問い詰めた。

「理由を!! 理由を教えてよ、クロノ!!」
フェイトも問い詰めた。

ユーノは辛そうに口を紡いだ。

そして、クロノが口を開いた。

「闇の書……夜天の書の管制プログラムからの頼みだ。」

「管制プログラムって、悟空と戦ってた奴かい？」

「ああ。」

「防衛プログラムは無事破壊できたけど、夜天の書本体がすぐにプログラムを再生しちゃうんだ。もしかしたら、今度ははやても浸食される可能性も高い。だから、夜天の書が存在する限り、どうしても危険は消えないんだ。」

ユーノがなのは達に説明した。

「管制プログラムは、防衛プログラムが消えている今のうちに、自らを破壊してくれと頼んできた。」

「そんな！？……何とか、ならないんですか？」

「無理だ……夜天の書の元の姿が分からなければ、修復の仕様が無い。」

クロノは悔しそうにしながら、そう言った。

「そんな……じゃあ、それじゃあシグナムたちも一緒に！？」

「いや、私たちは残る。」

その時、別の場所から声が聞こえ、なのは達がそちらの方を見ると、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、悟空が立っていた。

「防御プログラムと共に、我々守護騎士プログラムも本体から解放したそうだ。」

「……っ!?」「……」

シグナムがそう伝えると、なのは達は驚愕した。

「それで、リインフォースからなのはちゃんたちにお願ひがあるって……。」

「お願ひ?」

「リインフォースが……。」

桜台

そこには、リインフォースが立っていた。

すると、後ろから雪を踏む音が聞こえ、リインフォースが振り向く

と、なのはとフェイトが歩いてきていた。

「ああ、来てくれたか。」

「リインフォース…さん。」

「そう呼んで……くれるのだな。」
リインフォースは少し嬉しそうな表情で言った。

「っ!？」

だが、なのは達はどこか辛そうな顔をした。

もしかしたら、…やっと出会えた二人を、永遠に分かつ事になる…
その事を感じているのかもしれない。

「あなたを空へ帰すの、私たちで良いの？」

「やっぱり、はやてちゃんのほうが良かったんじゃないか…それに、最後のお別れだって…」

フェイト、なのはが何かを言おうとしたが、リインフォースは静かに首を横に振った。

「おまえたちだからこそ頼みたい。おまえたちのおかげで…私は、主はやての言葉を聞くことが出来た。主はやてを食い殺さずに済み、騎士たちと悟空も生かすことができた。感謝している。だからこそ最後は、おまえたちに私を閉じてほしい。それに…主はやてを悲しませたくない。だから、私は、一人静かに逝く。」
リインフォースはどこか嬉しくもあり、悲しそうな表情でそう言った。

た。

「そんな……」

「リインフォース……」

なのはとフェイトも悲しそうな表情で呟いた。

「でもそんなの…なんだか悲しいよ!!」

「おまえたちにもいずれ分かる。海より深く愛し、その幸福を守りたいと思えるものと出会えれば…な。」

そう言つて、リインフォースはなのは達に笑いかけた。

少しすると、別の足音が聞こえてきた。

そちらを見ると、ザフィーラを除いた守護騎士達が来ていた。

「ザフィーラは……どうしたんだ？」

リインフォースが訊いてみた。

「あいつは、“仲間を護る守護獣である俺が仲間を殺めるわけにはいかん”つと云つて来なかつた。」

シグナムがそう答えた。

「そうか……。」

リインフォースはそう呟くと、少しして静かに告げた。

「そろそろ始めようか。夜天の魔導書の……終焉だ。」

その頃、悟空は

「ちくしょ………一体どうすりゃいいんだ!!」
椅子に座って、一人ふさぎ込んでいた。

するとそこへ、

「悟空。」

「………なんだ、ユーノか……。」
ユーノが部屋に入ってきた。

「オラになんか用でもあるんか？」

「いや、別にこれといった用は無いんだけど。」
そう言うと、ユーノは悟空の近くに椅子を持っていき座った。

そして、二人はそのままの状態で黙り込んだ。

だがしばらくして、悟空がユーノに訊いてみた。

「なあ、ユーノ。」

「……何？悟空。」

「リインフォースを救う方法っちゅうんは、なんかねえんか？」

すると、ユーノは口を紡いだが、少しして言った。

「可能性は無いに等しいけど、一つだけある。」

「!?!?…本当か!?!？」

それを聞くと、悟空は立ち上がりユーノの肩を掴んだ。

「教えてくれ!!その方法っちゅうんを教えてくれ!!」

そして、悟空はユーノをグワングワンと前後に揺らした。

しかも、かなり力を入れて揺らしているため、ユーノの残像が残るほどだった。

「わ、分かった!!分かったから、揺らすのやめてええ!!」
目をぐるぐる回しながら、ユーノは叫んだ。

「……………ってことなんだ。」

「そっか!!よし、分かった!!サンキュー、ユーノ!!」
ユーノからリインフォースを救う方法を聞いた悟空は走り出し、リインフォースの所へ向かった。

「ちよっ!?!悟空、なのは達が居る場所知ってるの……っ行ってっちゃった。」

「待つてるよ!!リインフォース!!」

悟空はリインフォースの元へ全速力で走っていた。
すると、前方に車椅子に乗った見知った後ろ姿があった。

「おっ!!はやて!!」

「えっ!?!…悟空さん!!」

はやては悟空の声を聞いて、振り返って悟空の名前を呼んだ。

「はやて、おめえもリインフォースの所に行く所なんか?」

「はい!!なんや、リインフォースが消えてまう気がして……」。
はやては胸の部分をギュッと握り、顔を俯かせてそう言った。

「だったら大丈夫だ!!リインフォースを救う方法っちゅうのが分

「かつたんだ!!」

それを見た悟空は、はやてにそう言って励ました。

「ほんまですか!？」

「ああ、オラ嘘は言わねえ!!」

「……良かった。」

そして、はやては涙を流してそう呟いた。

「だったら、リインフォースの元にはよ行きましょう!!」

「よし!!」

そして、悟空は車椅子の取っ手の部分を掴んだ。

「はやて、オラ思いつきり走るっからよ、しっかりつかまってる!!」

「はい!!急ぎましょう!!」

はやては笑顔で応えた。

だが、はやてはこの時知らなかった。

この言葉が原因で、とんでもない目に遭うとは。

「行くぞ!!……そおれえええ!!!!」

ブオオオオオンッ

「なああああ!?!」

悟空は掛け声と共に走り出した。

だが、はやてはあまりのスピードで車椅子の背もたれに押しつけられた。

それもそのはず、悟空の全速力は軽く150?を越えているからである。

そして、悟空は全速力で走り、はやては奇声を木霊させながら、リインフォースの元に向かって行った。

そして、今悟空とはやては雪が降る海鳴市を走っていた。

「はやて、リインフォースがどこに居るか分るんか?」

「えっと……………あそこです!」

そう言つと、はやての桜台を指差した。

「よおし!…んじゃ行くぞ!…!」

悟空はそう言つとと、さらにスピードを上げた。

「だから悟空さん!…!速すぎですつてえええええ!?!」

そして、再びはやての叫びを虚しく木霊させながら悟空達はリインフォースの元に向かって行った。

飛び上がったきた。

「「「「「「!!!??」「「「「「」
これには流石のなのは達も驚いた。

そして

ドスンッ

悟空とはやてはものすごい音をたてて、着地した。

「よし!!はやて着いたぞ……………って、大丈夫か?」

「はあ…はあ……………だ、大丈夫やないです……………」。
はやてはフルフルと震え、涙目で弱々しくそう答えた。
しばらくして、はやては息を整えてリインフォースの方を見た。

「リインフォース……………」。

「主……………」。

そして、悟空に車椅子を押されながら、はやてはゆっくりとリインフォースに近付いて行った。

「はやて…!!」

その時、ヴィータが思わずはやての傍に寄りつとした。

だが

「動くな!!……頼む。動かないでくれ、儀式が消える。」
リインフォースがそれを止めた。

「リインフォース、儀式つてなんや……一体何しとるん?」

「主、申し訳ありませんが私は消えなくてはなりません。」
そうリインフォースが言った。

「何でや!?!」
はやては驚き、リインフォースに詰め寄った。

「基礎構造が歪められたままなのです。このままでは、また新たな
防御プログラムを組み直してしまいます。その際、高確率で主はま
た侵蝕されてしまいます。」
少し悲しそうな表情で、リインフォースがはやてに説明した。

「だめや!!防御プログラムなら私がかんとかする!!だから!!」
だが、はやては引き下からずリインフォースの考えを否定した。

「主、お聞き訳を……。」

「そんなん認める訳にはいかへん!!」

「ですが、そうしなければ主が…」「心配すんな!!」「…!!?」
はやてとリインフォースの会話を遮り、悟空はそう言った。

「実はなユーノから聞いたんだけどよ、リインフォースおめえを救う方法が一つだけあるんだ。」

「そや、悟空さんリインフォースを救う方法知つとるんや!!」

「っ!?!」

リインフォースは悟空とはやての言葉を聞いて驚いた。

「その方法と言うのは何だ?」

リインフォースは驚きながらも悟空に訊いてみた。

「無限書庫つちゆう所におめえを救う方法があるかもしれねえんだ。」

それを聞いて、リインフォースはまた悲しそうな表情になった。

「だが、見つかる可能性は…。」

「そんなのわかんねえ、やんなきゃ0だけどよ、やってみりゃ1以上になるかもしんねえだろ。」

「だがまた、プログラムが再生したら……。」

「そんな時はまた倒しやいいじゃねえか!」

「……………」

そして、少しの時間が流れ

「はやて。」

悟空がはやてに話し掛けた。

「リインフォースに言いてえことを言ってみる。」

「はい!」

そして、はやては車椅子を自力で動かしてリインフォースに近付いた。

「…リインフォース……………」

「はい。」

「一緒に生きていこう。死ななくてもいい方法一緒に探していこう。」

「主……………」

「せやから…………死ぬなんて…………悲しいこと言わんとい……………」

「ですが……。」

「お願い……。」「

「………わかりました、主………。」

はやての想いを聞いたリインフォースははやてと共に生きていく事を選んだ。

こうして、『闇の書事件』は完全に幕を閉じた。

第十二話死ぬなよ！！リインフォースの決断とはやての涙（後書き）

オッス、オラ悟空。

はやての想いを聞いてリインフォースと一緒に生きていくって言っ
て良かったな、はやて！！

そんでえ、その後アースラに戻ってオラ達はリインフォースからザ
フィーラがどうして超サイヤ人になるのかを聞いたんだ。

次回・魔法少女リリカルなのは S

衝撃事実！！ザフィーラがオラと同じサイヤ人

「ザフィーラもサイヤ人だったんか〜。」

第十三話 衝撃事実！ザフィーラがオラと同じサイヤ人（前書き）

次回は、過去話が続きます。

第十三話 衝撃事実！！ザフィーラがオラと同じサイヤ人

そして今、リインフォースが共に生きていくと言ってくれ、はやてはリインフォースに抱きついて泣いていた。

「ヒグツ…リインフォース…」

「はい。」

「これからも、ずっと一緒やで…」

「はい…いつまでも主のお傍におります。」

その光景を、皆が微笑みながら見ていた。

だが、それをぶち壊す者がいた。

ぐうううううう！！！！

突然聞こえた轟音に目を向けた先には

「ははっ！！わりいわりい、オラ腹減っちゃった！！」

頭をポリポリ掻きながら笑っている悟空の腹の虫の音であった。

「はあ…孫、お前と言う奴は…」

シグナムはこめかみの部分を押さえながら呆れていた。

周りの皆も苦笑していた。

「とりあえず、アースラに戻るとすつか!!そんで、オラ腹いっぺえ食うぞお!!」

そして、悟空はもと来た道に戻って行った。

「まったく、孫の奴は……。」

「まあ、悟空さんらしくてええやないか!!さっ、うちらも行こ!!」

はやて達も悟空のあとを追うように歩いて行った。

悟空ははやて達よりも早くアースラに着いていた。

そして、アースラの食堂に向かって途中である人物とあった。

「おっ!!ザフィーラじゃねえか!!」

「悟空。」

壁に背を預け立っているザフィーラと会った。

悟空はあの時の事を思い出し、礼を言った。

「ザフィーラ、あの時はサンキューなおめえが来なかったら、オラリンフォースにやられてたかな。」

「仲間として当然だ、気にするな。」
そう言うと、ザフィーラは悟空の方に歩み寄った。

「それに、礼を言うならこちらもだ。……彼女を、リインフォースを救ってくれた事に礼を言うぞ悟空。」

そして、ザフィーラは悟空に右手を差し出した。
それに、気付いた悟空も右手を差し出し

「へへっ！！気にすんな！！」

「ふっ。」

互いに、握手をした。ザフィーラはこの時無意識のうちに口元を吊り上げ笑っていた。

するとちょうどその時、はやて達が後ろから来ていた。

「悟空さん！！……あっ！！ザフィーラもおったんやね！！」
はやては悟空とザフィーラに笑顔で話し掛けたが、守護騎士達は固まっていた。

「あれ？どうしたんや、皆固まって。」
はやてが不思議に思っ て訊いてみると

「ぎ、ザフィーラが………笑ってる……。」
ヴィータがプルプルと手を震わせながらザフィーラを指差してそう言った。

「ああ、私も初めて見た。守護獣が笑う所など。」
リインフォースも、驚いた表情で呟いた。

「私もびっくりしちゃったわ。ザフィーラが笑うなんて……ねえ、シグナム。」

「そうだな。」

シヤマルとシグナムも驚いていた。

そんな中、ザフィーラは

「そ、そんな事より皆これから食堂に行くのだから？俺も少々小腹が空いてな。先に、行ってるぞ。」

自分の口元を押さえながら、気恥ずかしそうに食堂に向かって行った。

「はは！！ザフィーラ、何恥ずかしがってたんだ？」

「う、うるさい！！」

「ああん、ザフィーラ！！うちにも、笑ってみせてえな！！」

「主！？…い、いえ…その……。」

と、そんな会話をしながら皆食堂に移動していった。

そして、食堂に着くとクロノ、リンディ、エイミィがすでにいたが、悟空は三人をそっちのけでご飯を注文して食べ始めた。

ガツガツツ、ムシヤムシヤツ、バリツベリツ、ボリツバリツ、カチヤカチヤツ、バリツムシヤツ

そして現在、皆悟空の食欲に唾然としていた。

「あの悟空さん、ちょっとよろしいかしら？」
すると、リンディが悟空に話し掛けてきた。

ゴクンッ

「ああ、別にいいぞ!」

悟空は口に入れていた食べ物を一気に呑み込みリンディの方に向いた。

そして、リンディは悟空に質問してきた。

「悟空さんは一体どうやってここへ？」

「えっと、オラ界王神界で魔人ブウを元気玉でやっつけて、帰ろうとしたら光に包まれちまって気付いたら森の中で倒れてたんだ。」

「艦長、それってもしかして……。」

「ええ、間違いなく『次元漂流者』ね。」

「次元漂流者、なんだそりゃあ？」

悟空は聞き慣れない言葉に首を傾げた。

悟空が疑問に思っていると、傍になのはが寄って来て教えてくれた。

「次元漂流者っていうのは、世界規模の迷子……つまり、悟空さん迷子になっちゃったんです。」

「いい！？オラ迷子になっちまったんか！……そんなじゃ、オラ元の世界に帰れないんか！？」

「はい……悟空さんの世界がまったく特定できないので……」。

「じゃあ、オラもう帰れねえんか！！」

悟空はリンディの言葉を聞いてうろたえた。

だが、結局

「でも……ま、いつか！！」

で済ましてしまった。

ドデエエン！！

そして、それを聞いたザフィーラ以外の皆は椅子ごと後ろにずつけた。

「ま、いつか…って、悟空さんそれでいいんですか!？」

「ああ、オラがいなくてもオラの世界の地球には悟飯がいるかな。」

悟空は嬉しそうなかしどこか悲しそうなお表情で言った。

「悟飯…って、誰ですか？」

は yet は聞き慣れない言葉に思わず悟空に訊いてきた。
他の皆も悟空の方を見ていた。

「ん?…ああ、悟飯っちゆうんはオラの息子だ。」

それを聞いた者達は一瞬固まったが、すぐに

『ええええええええ!!??』

大きな声を上げ驚いた。

「息子って、て事は悟空さん結婚してはるんですか!？」
は yet は動揺しながら、悟空に質問した。

「ああ。」

「じゃあ、悟空さん今一体何歳なんですか？」

次に、なのはが何歳か訊いてきた。

「えっと、確か…オラ、39ぐれえだと思っぞ。」

『ええええええええ!!??』

そして、また皆は声上げ驚いた。

「お父さんとお母さんより歳上！？でも、全然見えない！！」
なのは悟空の外見を見ながら驚いていた。周りの皆もうんうんと頷いていた。

「そっかあ？ま、どうでもいいや！！」
だが、当の本人は全然気にしてなかった。

「あー！おばちゃん、カツ丼おかわり五十人前ぐれえ頼む！！」

「いや、悟空さんだけ食いはるんですか。」

さらに、おかわりをする悟空にはやては思わずつつこんでしまった。

そして、ふと悟空の横に座っていたザフィーラを見て、はやては目を見開き驚いた。

「ザフィーラ！？あんたも一体どれだけ食う気や！！…てか、ザフィーラそんなに食べれたっけえ！？」

悟空と同じくらいザフィーラもカツ丼を食べていたのだ。

「いえ、超サイヤ人になってから妙に空腹が酷くなりました。」

ザフィーラは自身の体の変化に不思議に思いながら答えた。

その時、悟空はある事を思い出した。

「そっいやザフィーラ、おめえなんで超サイヤ人になれるんだ？それに、リインフォースはなんで超サイヤ人の事知ってた？」

悟空はそれぞれ、ザフィーラとリインフォースに訊いてみた。

すると

「それは、私が教えよう。」
リインフォースがそう言った。

「実は、主はやてにお会いになる前の主がサイヤ人という種族だったのだ。」

「なんだって！？…ちゅう事は、おめえ達オラのいた世界に来たんか！？」

悟空は驚いた。

それもそのはず、リインフォース達がまさか自分の生まれ故郷に来ていたとは思わないだろう。

「ああ、そしてその主の名は……『バーダック』。」

「！？」

「彼は、歴代の主の中で勇敢な本物の戦士だった。そして、我々を道具として扱うのではなく、共に戦う仲間として受け入れてくれた。」

リインフォースは嬉しそうな表情でそう言った。
その時、シグナムが悟空の様子に気付いた。

「どうした、孫？そんなに、驚いて……。」

「……………そのバーダックっちゅうんはな、オラの父ちゃんなんだ。」

「「「「何(だつてノですって)！?」「」「」」

守護騎士達は悟空の父親がバーダックという事に驚愕した。

「そんでよお、その話もつと詳しく教えてくんねえか?」

「分かった。そこからは、私が話そう。」

悟空の頼みに、シグナムがかつてでた。

「まず、主バーダックと出会った所から話そう。」

そして、シグナムは静かに語り始めた。

守護騎士達とバーダックはどのような出会いをしたのか。

第十三話 衝撃事実！！ザフィーラがオラと同じサイヤ人（後書き）

オッス、オラ悟空。

まさか、オラの父ちゃんがリインフォース達の主だったなんてなあ、オラびっくりしたぞあ。

さてと、一体どんな話になるんだろうな。

次回・魔法少女リリカルなのは S

過去編突入！！守護騎士達とバーダックの出会い

「どんな話になるか、オラワクワクしてきたぞあ。」

第十四話過去編突入！！守護騎士達とバーダックの出会い（前書き）

ついに、過去編に入りました。

感想・質問待っています。

第十四話過去編突入！！守護騎士達とバーダックの出会い

シグナム達守護騎士がはやてに出会う前の物語。

シュウウウンッ

とある惑星に闇の書が光を放ちながら出現した。

しかし、その惑星は

ドカアアアンッ

ポオオオオオンッ

ドオオオオオンッ

激しい戦闘の最中だった。

だが、しばらくして

「オラアアアア！！！！」

緑色のチョッキのようなものを着て、髪が四方八方に跳ね、頬に古傷がある男が最後の敵の身体を拳で貫いて倒し、戦闘が終了した。

「へっ！！ちよろいもんだぜ！！さてと、この星も征服したし帰るか。」

そして、古傷の男が仲間達の元に戻ろうとした時

「ん？…なんだこれは……………本？」

転移してきた闇の書を見つけた。

男は闇の書を持ち上げ、調べ始めた。

「変わった本だな。…見たことねえもんだし、とりあえず貰っとくか。」

そう言うと、男は闇の書を脇に抱え仲間達の元へ飛んでいった。

男が目的地に到着すると、ピンク色のチョッキのようなものを着た女性が寄ってきた。

「まったく、なにやってたんだい？…遅いよ、『バーダック』！！」

「わりいな、ちよつと遅れちまった。…許せ、『セリパ』。」

女性は腰に手を当て、すこし怒り気味な口調で話し掛けてきた。

この会話で、頬に古傷がある男はバーダックと言い、ピンク色のチョッキのようなものを着た女性はセリパと言うようだ。

二人が少しの間話をしていると、セリパはバーダックが抱えている本に気がついた。

「バーダック、一体どうしたんだい？…その本。」
セリパは闇の書を指で差しながら、訊いてみた。

「ああ、こいつか？いや、そこに落ちてたんだけどよ珍しい本だからな貰ったんだよ。」

バーダックはセリパに軽く説明して歩いて行った。

そして、バーダック達は惑星ベジータに戻って来た。

「じゃあな、オレは先に帰るぜ。」

そう言っつて、バーダックは自分の家に帰って行った。

「ちっ！！今回も張り合いのねえ奴等ばかりだったぜ！！」

バーダックはベッドに仰向け寝転びながら、愚痴をこぼしていた。

どうやら、征服した惑星にいた敵が弱すぎてイライラしているようだった。

「どっかにもっと強い奴はいねえのか？」

バーダックはそう言っつと、先程拾った鎖が巻かれている本を手にとった。

「てめえがオレを満足させるぐらい強い奴だったらな。…もしそうだったら、思いつきり叩きのめしてやるのによ。」

そう言っていたバーダックは、無意識のうちに気を闇の書に流し込んでしまった。

その時

『闇の書が起動します。』

突然、本から無機質な声が流れた。

バーダックは咄嗟の事に驚き、本を投げ捨てた。

パタンッ

そして、床に落ちると同時に本から鎖がとれ強烈な光を放った。

「ぐっ!？」

バーダックはあまりの眩しさに目を閉じた。だが、徐々に光の勢いは弱くなってきた。

そして、バーダックはゆっくり目を開けると絶句した。

そこには、紫色の変わった陣の中に、ピンク色の長髪をポニーテールにした美女、金色の髪をショートカットにした美女、赤色の髪を三つ編みにした幼女、銀色の髪を短髪にして狼の耳を生やした男が片膝をつけしゃがんでいた。

「闇の書の起動……確認しました。」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にてございます。」

「夜天の主の下に集いし雲。」

「ヴォルケンリッター……何なりと命令を。」

『……………』

しばらく無言が続いたが、先にバーダックがしびれをきらし叫んだ。

「なんなんだ、おまえら!!」

「我らは、闇の書の主を護衛する守護騎士です。」

バーダックの質問にポニーテールの女性が答えた。

「守護騎士?…闇の書……………つてのは、これの事か?」

すると、バーダックは床に投げ捨てた本を拾い女性に見せて訊いた。

「はい。…そして、あなたがその闇の書の主選ばれたのです。」

「へえ、オレが主ねえ。」

ポニーテールの女性が質問に答えたが、バーダックは興味が無い様子だった。

「あ、なにか命令はありませんか?」

金髪の女性が怯えたのを見て、バーダックは罪悪感を感じ謝った。突然、謝られ混乱した金髪の女性は気にしないように言った。

「そういえば……おまえらの名前まだ訊いてなかったな。」

バーダックは四人の名前を知らない事を思い出し、四人に訊いた。

「そうでしたね…では改めて、私は剣の騎士『シグナム』と言います。」

「湖の騎士『シャマル』です。」

「あたしは、鉄槌の騎士『ヴィータ』。」

「我は、盾の守護獣『ザフィーラ』です。」

「シグナムにシャマルにヴィータにザフィーラか、覚えてぜ!!!…
…よし、ならこれからよろしくなおまえら!!!」

「「「はい!!!」」」

「……………と言うのが、我らと主バーダックの出会いだ。」
そう言っつて、シグナムは一旦話を中断して皆の方を見た。

「へえ、結構あっさりとした出会いやったんやなあ。」
はやてはそのままの感想を言った。

「そんでえ、その後は一体どうしたんだ？」
先の話が気になるのか、悟空がシグナムに続きを訊いてきた。

「そう慌てるな、孫。……………その後は、主バーダックが……………。」

そして、シグナムはバーダックに出会った後の話を語り始めた。

第十四話過去編突入！！守護騎士達とバーダックの出会い（後書き）

オッス、オラ悟空

オラの父ちゃん、バーダックとの出会いをシグナムから聞いたオラ達はその後話を聞いたんだ。

次回・魔法少女リリカルなのは S

一触即発！？ヴォルケンリッターVSサイヤ人

「その実力、我らに見せてみよ！！！！」

第十五話 一触即発！？ヴォルケンリッター vs サイヤ人（前書き）

試行錯誤したけど、なんかぐだぐだになってしまった！？

第十五話 一触即発！？ヴォルケンリッター vs サイヤ人

バーダックと守護騎士達が出会った後、時間も遅いので明日他のサイヤ人達に守護騎士達を紹介することにして、バーダック達は眠りについた。

ちなみに、守護騎士達は各自適当な場所で寝た。

Side:バーダック

「おい、おまえら起きろ！！朝だ！！」

バーダックは声を上げ、守護騎士達を起こした。

だが、シグナムとシャマルとザフィーラはすぐに起きたが、ヴェータは

「すう〜？すう〜？」

起きるところか可愛らしい寝息を出しながら爆睡していた。

「起きねえな、仕方ねえこうなったら……。」

バーダックはもう一度叫んで起こそうとしたその時、シグナムが制止した。

「主バーダックの手を煩わせる訳にはいきません。ここは、私にお任せください。」

シグナムはそう言うと、レヴァンティンを起動させ、鞘をつけたまま上段に構えた。

「お、おい！？…ま、まさか……………」
バーダックはシグナムが何をするか察して、止めようしたが

「……………ふん！！！！」
シグナムはレヴァンティンを振り下ろした。

ゴオオオオオオン

「いつてええええ！！！？？」

その日の朝、バーダックの家から大きな打撃音と女の子の悲痛な絶叫が聞こえたそう。

259

Side: ヴィータ

「【シグナム！！あたしの頭思いつきりレヴァンティンで叩きやがって、ギガ痛かったじゃねえかよ！！】」
ヴィータは、頭を擦りながらシグナムを睨み念話で文句を言っていた。

「【起きないお前が悪いんだ。自業自得と言つものだ。】」
だが、シグナムはヴィータに自業自得だと言いつ張っていた。

あの後、あたし達はバーダックに？ついて来い？って言われてついて行っている。

あたしはその途中で、バーダックに訊いてみた。

「なあ、バーダック？」

「ん？なんだ？」

「一体何処に向かってんだ？」

「ああ、この星の王の所に向かってんだよ。」

そして、あたし達は歩き続けた。

……………にしても、一体いつになったら着くんだよ。

S i d e : シグナム

「着いたぞ。」

しばらく歩き続けて、バーダック達は城のような建物の前で立ち止まった。

「主バーダック、ここにその王が居るのですか？」

「ああ……。」

バーダックはそう短く答えると、一人で歩き始め、門番のような人物に話し掛けた。

「おい！！王に会わせろ、話がある！！」

……主バーダック、その物言いはかなり失礼だと思つのですが……
……。

シグナムがそう思った矢先、

「バーダック！！貴様、なんだその態度「うるせえ！！」グハツ！！」

バーダックは、門番が何かを言う前に顔面を殴り、気絶させた。

「黙って王に会わせりゃいいんだよ。」

「何をやってるんですか！？主バーダック！！」

「ああ！？……何が？」

バーダックは？なんか悪い事したか？？的な表情で訊いた。

「何が？…ではありません！！何、門番を倒してるんですか！！」

「何でつて…こいつが速く王の所に案内しねえのがいけねえんだよ。」

バーダックは気絶して倒れてる門番を指差しながら言い放った。

「理由になってません！！いいですか？人に頼む時はですね」とにかく行くぞ！！」つて、だから私の話を聞いてください！！」

まったく！！主バーダックは何故、人の話を最後まで聞いてくださらないのか。

シグナムは、心の中でぐちぐち言いながらも、他の三人と一緒にバーダックの後ろ姿を追っていった。

「ここだ。」

バーダック達は巨大な扉の前で立ち止まった。

そして、バーダックは両手を扉に添えると、ギィィと特有の音をたてながら扉を開いた。

「おい！！ベジータ王、話がある！！」

ですから主バーダック！？何故あなたは、そのような乱暴な言い方

なのですか!?

「何だ、騒々しいぞバーダック!何の用だ!」

玉座のような椅子に座っていた、髭を生やした男性が立ち上がりバーダックの方に歩いてきた。

「色々な。……それより、オレの新しい仲間が居るんだ。紹介するぜ。」

「新しい仲間?」

「ああ!……こいつらだ。」

そう言うと、バーダックはシグナム達を指差した。

「初めまして私は、剣の騎士シグナムと申します。」

「鉄槌の騎士……ヴィータ……。」

「湖の騎士シャマルです。」

「盾の守護獣ザフィーラだ。」

守護騎士達は、それぞれベジータ王に自己紹介をした。

「でよ、こいつら仲間にしよと思うんだがよ……どうだ?」
バーダックは、ベジータ王にそう言った。

「……その前に、こやつらの戦闘力はいくつだ？」

「あっ！？そっぴゃ、こいつらの戦闘力のはかるの忘れてたぜ。」

「……戦闘力？」

守護騎士達はバーダック達の会話の中に聞き慣れない言葉があり、聞き返した。

「ああ、戦闘力ってのはだな、そいつの強さの数値の事だ。」
バーダックはそう言うのと、頭につけていた装置のボタンを押した。

「主バーダック、それは？」
シグナムがバーダックに訊いてみた。

「こいつは、『スカウター』って言う装置でな。相手の戦闘力をはかる事が出来るんだ。」
そう言うって、バーダックは初めにシグナムを見た。

「ほう、シグナムは戦闘力3800か。……まあまあってところか。」
次に、ヴィータを見た。

「ヴィータは、戦闘力3650。……まあ、シグナムと同じくらいだな。」

次に、シャマルを見た。

「シャマルの戦闘力は、1380。……仕方ねえか。」

「…………ぐすつ……。」
シヤマルが涙を流していたが、バーダックは無視して最後にザフィーラを見た。

「ザフィーラは、戦闘力：3720。……結構高けえじゃねえか。」

「ちよつと待てええ!?!」

その時、ヴィータが突然吠えた。

「何であたしの戦闘力が、ザフィーラより下なんだよ!!納得できねえ!!」

どうやら、ヴィータは戦闘力がザフィーラより下だと言う事に不満があるようだ。

だが、当のザフィーラは

「俺は、別に戦闘力が上だろうが、下だろうが気にはせん。」
気にしていない様子だった。

その言葉を聞いたヴィータはさらに吠えた。

「お前が納得しても、あたしが納得できねえんだよ!!」
そう言つて、ザフィーラに飛び掛かったが、バーダックに襟の部分を掴まれて止められた。

「うお〜!!離せ、バーダック!!」
バーダックに掴まれながらも、ヴィータは手足をジタバタさせて暴れ続けた。

「おいおい、暴れんなって。」

「ヴィータ、あまり主バーダックに迷惑を掛けるな。」

「そうよ、ヴィータちゃん。落ち着いて。」

そう三人が言うと、ヴィータはジタバタするのをやめ、静かになった。

「うう。分かったよ。」

「よし!!良い子だ!!」

そう言うと、バーダックはヴィータを下ろし、頭を撫でた。

「って、子供扱いすんな!!」

ヴィータはそう怒鳴るが、バーダックの手を退かそうとはしなかった。

Side:ベジータ王

驚いたな、バーダックが連れて来た者達を見た時は、到底我々の戦力にはならぬと思っておったが、以外にも戦闘力があつたようだな。金髪の女以外は……。

「おい、ベジータ王!!こいつら仲間にしてもいいか?戦闘力はなかなかあるみてえだからよ!!」

ふむ、そうだな。バーダックの言う通り、なかなかの戦闘力は有しているだからな。

「良いだろう。」

「やったぜ!!」

バーダックは、握りこぶしを作りガッツポーズした。

「ただし!!……………」

「ん?」

「その金髪の女以外はな。」

ベジータ王はシャマルを睨みながらそう言い放った。

「はあ!?!なんでだよ!!なんで、シャマルだけ駄目なんだよ!!理由を言いやがれ!!」

バーダックは当然のごとく怒り、ベジータ王に怒鳴りながら理由を訊いた。

「理由だと?…簡単な事だ。その女は、ただ単に戦闘力が低いから

だ。」

ベジータ王は、そう冷たく言った。だが、バーダックは諦めなかった。

「それがどうした！！シヤマルの戦闘力は確かに低い！！だがな、それでもシヤマルは俺の仲間だ！！」

「そうだ、シヤマルは我らの仲間だ！！」

「戦闘力が低いからって、そんなんで決めんじゃねえ！！」

「シヤマルは、俺達にとってかけがえのない仲間だ！！」

「バーダックさん……みんな……」。

シヤマルは、バーダックとシグナム達の言葉に感動していた。

「ふん！！笑わせるわ！！我々に必要なのは……力だけだ！！」

ベジータ王はそう叫ぶと、高速移動でシヤマルに接近した。

「弱者は死ぬがいい！！」

「きゃああ！？」

ベジータ王は、拳を振り上げシヤマルを貫こうとした。

シヤマルは、恐怖により悲鳴をあげ、目を瞑った。

ガシッ

「??？」

だが、いつまで経っても貫かれる感覚がなく、不思議に思ったシャマルが目を開けると

「大丈夫か？シャマル。」

「ば、バーダックさん……は、はい！！大丈夫です！！」

「そうか。」

バーダックはそう言って安心した表情をしたが、すぐに真剣な表情になりベジータ王を睨みつけた。

Side：バーダック

「ベジータ王！！てめえ、オレの仲間になにしようとしたのかわかってんのか！！」

バーダックは、ベジータ王に怒鳴った。

だが、ベジータ王は静かに言った。

「始末しようとしたただけだが……。」

その言葉を聞いた途端、バーダックはぶちギレた。

「くたばれえ！！！！！」

拳にありつたけの気を注ぎ込み、ベジータ王に殴り掛かった。

しかし

ガシッ

「ぐっ！？」

「ふん！！ぬるいわ！！！」

ベジータ王は、バーダックの拳を軽々受け止めた。

「おらぁ！！！」

「ぐおお！？」

だが、バーダックは素早くベジータ王の腹に蹴りを入れ、吹っ飛ばした。

「シャマル！！！」

「はい？…ひゃあ！？」

シャマルは、呼ばれバーダックの方を向くと突然抱き上げられ、奇声をあげ驚いた。

バーダックは、シャマルを抱えたまま後方にジャンプして距離を取った。

「シャマル!! 怪我はないか!!」

「シャマル!! 大丈夫だったか!??」

「無事か!?? シャマル!!」

着地すると同時に、シグナム、ヴィータ、ザフィーラが声を掛けながら近寄ってきた。

「ええ、大丈夫よ。バーダックさんが、助けてくれたから。」

シャマルは、微笑みながらそう言った。

「おまえら!!」

「コッコッ!??」

その時、バーダックが叫んだ。

「話は後で好きなだけやれ!! 今は、目の前のヤツに集中しろ!!」
そして、バーダックの目線の先には

「やっつけてくれおったな、バーダック。」

ほとんど無傷のベジータ王が立っていた。

「なっ!?!?…嘘だろ!?!? バーダックの蹴りをまともに喰らったはずなのに!!」

ヴィータは、無傷のベジータ王を見て驚いた。

「へっ!! やっぱり、あの程度の攻撃じゃ、びくともしねえか。」

バーダックはそう言うと、構えを取った。

ベジータ王も、構えを取りいつでも戦闘できる状態だった。

「主バーダック！我々も、共に戦います！！」

そう言うのと同時に、シグナム、ヴィータ、ザフィーラはバーダックの前方に、シャマルはバーダックの後方にと、自分の配置についた。

「おまえら！？なにやってんだ、ここはオレだけで充分だ！！おまえらは、逃げる！！」

バーダックは、守護騎士達に逃げるように言うが守護騎士達は逃げようとはしなかった。

「いえ、主バーダックを守ることが我々守護騎士の使命です！！」

「そうだぜ、バーダックはあたしが守る。絶対な！！」

「盾の守護獣の名にかけて必ずや、主をお守りいたします！！」

「これからバーダックさんは、一人で戦うじゃありません。私達と一緒に戦うんです。ですから、後方支援は、私に任せてください！！」

守護騎士達は、自分の思いを言った。

バーダックは、しばし唾然としていた。

だが、バーダックはすぐに表情を緩めた。

「へっ!!分かったよ、そこまで言うなら……しっかりオレを……。」
バーダックは、気を放出させ

「守ってみせるよ!!!」

叫びながら、ベジータ王に突っ込んでいった。

「……はい!!!!!!!!」

そして、守護騎士達もバーダックと一緒に、ベジータ王に突っ込んでいった。

「よかるう!!!貴様らの力を我に見せてみるがよい!!!」

ベジータ王もそう言うと、バーダック達の方へ突っ込んできた。

「たあああ!!!」

「てええい!!!」

シグナムは、ベジータ王に左側から斬りかかり、ヴェータは、右側からハンマーを振り下ろした。

だが

ガシッ ガアンッ

「なっ!?!」

「ぐっ!?!くそお!!」

「ふん!!この程度か……。」

ベジータ王は、左手でシグナムの剣を鷲掴みして止め、右手の甲で
ヴィータのハンマーを受け止め防御した。

「いや、まだだ!!」

だがそこへ、すかさずザフィーラが接近して

「でえいや!!」

ドゴオオンッ

「ぐうっ!?!」

拳をベジータ王の腹にめり込ませた。

突然だったため、ベジータ王は反応が遅れもろにザフィーラの拳を
受けてしまった。

「…効かぬわあ!!!!」

ドオオオオンッ

「くうっ!?!」

「ぐあぁ!?!」

「うわぁ!?!」

だが、ベジータ王はその攻撃に耐え、叫びながら身体全体から衝撃波を放ちシグナム、ザフィーラ、ヴィータを吹き飛ばした。

さらに、衝撃波が強力だったのかシグナム、ヴィータは背中から壁に激突し、ザフィーラは地面をバウンドしながら転がっていき、壁に激突して止まった。

「くっ!?!レヴァンティン!?!」

「ちくしょう!?!アイゼン!?!」

「カートリッジロード!?!!?!」

【エクスポーション】

ガシュンッ

すぐに立ち上がったシグナムとヴィータがそれぞれのデバイスに呼びかけ、撃鉄を起こして薬莖を排出した。

すると、シグナムのレヴァンティンの刀身は紫色の炎に包まれ、ヴィータのグラーファイゼンはハンマーの部分の片方が尖り、片方が噴射口のように変化した。

二人はまたベジータ王に突っ込んでいった。

そして

「紫電一閃！！！！！」

シグナムは、レヴァンティンに炎を纏わせたまま振り下ろした。

「ラケーテンハンマー！！！！！」

ヴィータは、回転しながらそのままの勢いでハンマーをベジータ王目掛けて振った。

ベジータ王は、シグナムとヴィータの攻撃をもう一度腕で防御しようとした時

「縛れ……鋼の軛！！！！！」

ガアアアアアッ

「なにっ！？」

タイミング良くザフィーラが、鋼の軛でベジータ王の手足を絡め取り動きを封じた。

そして

ドオオオオオッ

シグナムとヴィータの攻撃が炸裂し、土煙があがった。

「シグナム！！ヴィータ！！……下がれ！！！！！」

バーダックがそう叫ぶと、シグナムとヴィータは土煙の中から飛び出してきたバーダックの隣に着地した。

それを見て、バーダックは右手にエネルギーを溜め、大きなエネルギー弾を作った。そして

「ぶっ飛びやがれええ！！！！！！！！！」

ダアアアアアッ

そのエネルギー弾を、土煙の中に居るベジータ王に向けて放った。エネルギー弾は、着弾して大爆発を起こした。

「やりましたね、主バーダックー!!」

「やったな!!」
それを見たシグナムとヴィータが、嬉しそうな声を上げた。

「いや、まだわかんねえからな油断すんじゃねえぞ。」
だがバーダックは、二人にそう言いながらじつと土煙を見ていた。
その時

コツツ コツツ コツツ

土煙の中から、足音が聞こえた。
そして、土煙の中に人影が見え始めた。

出てきたのは

「今のは、効いたぞ………バーダック。」
アーマーをボロボロにしながらもゆっくりと歩いるベジータ王だった。

「まだ続けるか？」

「当然だ。」

その言葉と共に、バーダックとベジータ王は同時に踏み込み

「おらああ……!!」

「はあああ……!!」

互いの拳と拳を激突させた。

そして、二人はラッシュでぶつかりあった。

だが、戦闘力の差なのか徐々にバーダックが押され始めた。

「ぐう!? (やべえ、このままじゃ……………)」

「ふん!! どうした、バーダック動きが鈍いぞ。」

そしてついに

バアアアアアッ

「がはっ!?!」

ベジータ王の拳が、バーダックの腹にめり込んだ。

「ふっ!! 死ねえ、バーダック!!……!!」

ベジータ王は、バーダックにエネルギー波を放った。

咄嗟に、バーダックは腕をクロスさせ防御した。

だが、あまりの高威力でバーダックは守護騎士達の所まで吹っ飛んでいった。

「あ、主バーダック！……！」

「バーダック！？」

「バーダックさん！……！」

「主！……！」

そして、吹っ飛ばされたバーダックの元に守護騎士達が駆け寄って来た。

「大丈夫ですか？主バーダック……！」

シグナムはバーダックを身体を起こしながら、怪我はないか訊いた。

「ああ、大丈夫だ。………ちつくしよ、やっぱり強えなベジータ王！……！」

「当たり前だ！……我と貴様とでは、力の差がありすぎるのだ……！」

「そうだな………確かに、オレとお前とじゃあ力の差がありすぎるな………だが………」

そう言いながら、バーダックはゆっくりと立ち上がり、構えを取った。

「オレは、絶対に負けるわけにはいかねえんだ……！……行くぞ、おまえら……！」

「……はい!!!!!!」
「……」
バーダックの掛け声と共に、守護騎士達はバーダックと一緒にベジータ王に突っ込んでいった。

だが

「く、くっそ!!」

「……ぐっ!!」

「か、勝てねえ……強すぎだ。」

「はあ……はあ……はあ……。」

「ぐうう!!」

バーダックと守護騎士達は数時間もの間、ベジータ王と戦い続けたが、皆力を使い果たし床に倒れていた。

「もう終わりか？」

「へっ!!まだやれるに………決まってるだろうが!!」
守護騎士達が倒れている中、バーダックは立ち上がった。
しかし、すでに身体は言うことをまったくきかない状態であった。

「無理をするな。もう立っているだけで限界なのだろう。」

「いや、まだまだ戦えるぜオレは………。」
そう言っつて、バーダックは構えを取った。
だが、ベジータ王は構えを取らなかった。

「……………。」

「!?!?…どういつつもりだ、ベジータ王。なんで、構えねえ。」
疑問に思ったバーダックがベジータ王にそう訊いた。

すると、ベジータ王はこう呟いた。

「バーダック、そいつらは貴様にとって本当に大切な仲間か?」

「ああ?急になに言っつてんだ?」

「答える!!そいつらは貴様にとって大切な仲間か?」

そして、バーダックは構えを解いて真剣な眼で答えた。

「ああ、こいつらはオレの大切な仲間だ!!」

「そうか、ならば好きにしる。」

そう言うと、ベジータ王は踵を返して歩いていった。

「お、おい!! 待ちやがれ!!!! どういうつもりだ、なんでやめるんだ!!!!!!」

「貴様の眼を見ていて、考えが変わったのだ!!!!!!」
ベジータ王はそう言い残して去っていった。

「…意味分かんねえぞ…!!?…うう!!?」
呆然と見ていてそう呟いたその時、戦闘での疲労によってバーダックは倒れた。

「主バーダック!! / バーダック!!? / バーダックさん!!? / 主!!」

倒れたと同時に、守護騎士達がバーダックの元に寄ってきた。

「!?!? 酷い怪我だ!! シヤマル、主バーダックに治癒魔法を!!」

「分かったわ!!」
シヤマルはそう言うと、右手の人差し指にはめている指輪に口づけをした。

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで！！！！」

そして、シャマルの足元に緑色の魔法陣が展開され、緑色の光がバーダックを包み込んだ。

すると、バーダックの傷が消えていった。

「……傷の治療は出来たけど、意識はじきに戻る筈よ。」

「そうか。」

「よかったあ〜。」

「ふむ。」

シャマルの言葉を聞いて、守護騎士達は一安心した。

「あ！！みんなの傷も治さなきゃいけないわね！！！！」

そう言うと、シャマルは再び足元に緑色の魔法陣を展開させて、守護騎士達の傷を治した。

「はい、おしまい じゃあ、みんなバーダックさんの家に転移するわよ。」

「ああ、頼む。」

そして、守護騎士達とバーダックは家へ転移した。

こうして、バーダックとベジータ王の闘いは意外な結末で幕を閉じた。

第十五話一触即発！？ヴォルケンリッターvsサイヤ人（後書き）

オッス、オラ悟空。

なんかいろいろあつたけど、なんとか闘いに勝利した父ちゃん！

そして、シグナム達は初めて父ちゃんの仕事の手伝いをする事になったんだ！！

次回・魔法少女リリカルなのは S

守護騎士達がお手伝い！？やるぞ惑星侵略

「主バーダックのお仕事を、我々にも手伝わせてください！！！！！！」

第十六話 守護騎士達がお手伝い!?! やるぞ惑星侵略(前書き)

もうすぐ、バーダック&ヴォルケンリッターVSフリーザ軍団が始まると思います。

第十六話 守護騎士達がお手伝い！？やるぞ惑星侵略

ベジータ王との戦闘から数日後

Side：バーダック

「うっ……ここ、ここは？」

バーダックは、薄く眼を開いて周りを見た。

ここは……オレの家か！！

…しかし、なんでオレはここにいるんだ？

たしかオレは、ベジータ王と戦って……戦い終わった後、オレは気を失って……それから……

バーダックが、いままでの出来事を思い返そうとしたその時、

バアアアンツ

「……（主）バーダック（さん）！！！！！！」

ドアが勢いよく開かれ、シグナム、シャマル、ヴェータが入ってきた。

「主バーダック、お目覚めになられましたか！！！！！！」

「ああ……なあ、シャマル。」

「はい？なんですか？」

「オレは一体どれぐらい眠ってたんだ？」

「えっと、3日間ほど眠ってました。」

シヤマルは、バーダックにどのくらい眠っていたか訊かれ答えた。

「3日か……結構寝ちまったな。……よつとー!!」

バーダックは、ベッドに手をつけ、腕の力だけでベッドから飛び起きた。

着地すると、首をコキツコキツと鳴らした。

そして、バーダックはシヤマルの方に向き直った。

「ところで、シヤマル。」

「はい？」

「ザフィーラのヤツが、見当たらねえんだがよ。何処行ったんだ？」

「へ？……ああ!!本当だわ!!」

「そついえば、あたしも見てねえな。」

「私もだ。」
バーダックに訊かれ、シャマル、ヴィータ、シグナムはザフィーラ
がないということに気がついた。

おいおい、おまえらの仲間だろ……気づけよ。

シグナム達の反応を見て、酷くザフィーラに同情したバーダックで
あった。

「しょうがねえ、探しに行くか……。」
バーダックはそう言って、ザフィーラを探しに行くために部屋から
出ていった。

シグナム達も、ザフィーラを探すためにバーダックの後を着いてい
った。

Side: ザフィーラ

その頃、当のザフィーラは

「ふっ！……せいつ！……でいやっ！……」
虚空に、拳や蹴りを放ちながら一人で修行をしていた。

そして、ザフィーラは修行しながら先日の戦いを思い返して思った。

俺は……強くなる……かならず……今度こそ

主や仲間達を守護するために!!!!!!

そして、ザフィーラはがむしゃらに修行を続けた。

S i d e : バ ー ダ ッ ク

数時間後

「おっ!!こんな所に居たのか、ザフィーラ。探したぜ。」

「まったく、主バーダックの手を煩わせるな。」

「そうよザフィーラ。次から、気をつけてね。」

「つーか、初めから急に居なくなんじゃねえよ。」

ザフィーラの背後から、バーダック達が姿を現した。

「主、シグナム、シャマル、ヴィータ………そうか、すまない。どうやら、心配を掛けさせてしまったようだな。」

「まあ、気にすんな!!じゃあ帰るか!!!!」

バーダックがそう言って、家に戻ろうとした時

「おい、バーダック!!!!!!!!!!」

突然、上から呼ばれた。

そして、バーダックは声のした方を見た。

「セリパ!!!!!!!!!!」

「やっと見つけたよ、バーダック!!!」

その人物は女性で、バーダックの仲間のセリパであった。

「ん?……あんた達誰だい?見慣れない奴らだね?」

その時、セリパはシグナム達に気づいた。

「ああ、こいつらはオレの新しい仲間だ。」

「へえ、また新しい仲間が出来たのかいよかったね!………それにしても、女ばかりだね。」

「まあ、仕方ねえさ。ところでセリパ、なにか用があつて来たんだろ?」

バーダックは、セリパのもっともな疑問を軽く流し彼女になにか用があるのではないか訊いた。

「あつ!?!そうだった……さっき、フリーザからの命令があつてある惑星カナッサを侵略して来いってさ。」

「ちっ！フリーザか……オレどうもあの野郎のこと気に喰わねえんだよ。」

バーダックは、『フリーザ』と言う人物が気に喰わないらしく悪態をついていた。

守護騎士達は、話について行けずシグナムが代表して訊いてみた。

「主バーダック。」

「ん？なんだ？」

「フリーザとは一体？……それに、侵略とは？」

「ああ！！おまえらには言ってなかったな！！」

バーダックは、シグナム達に自分の仕事などについて説明していないのを思い出し、バーダックはシグナムの質問に答えた。

「オレ達サイヤ人は、惑星の地上げ屋：まあ、簡単に言えば惑星を征服するのが仕事なんだ。そして、その惑星征服を命令するのがさつきオレ達の会話に出てきたフリーザってヤツなんだ。」

「なるほど…分かりました！！」

バーダックの説明を聞いて、シグナムは理解して頷いた。

「よし！！セリパ、とっと惑星力ナツサって所を侵略して終わらせようぜ！！」

「ああ!!」

そう言つて、バーダックとセリパが飛びたとうとした時、シグナムが声を掛けてきた。

「主バーダック!!お待ちを!!」

「ん?……あつ!!わりいがセリパ先行つてくれ!!」

「わかった!!すぐ来ておくれよ!!」

そう言つと、セリパは先に目的地に飛んでいった。

「で?なんだよ一体?」

「その惑星侵略と言つのをですね……」

「……ああ……」

「我々にも、手伝わせてください!!……!!」

「………は?」

「それで？これは一体どういうことだい、バーダック。」

「いや、こいつらがどうしてもオレ仕事を手伝いたいって言ってよ。」
「バーダックは、シグナムを指差した。」

「……すいません。」「」「」
すると、シグナム達は息ぴったりに謝った。

「いや、別にいいんだけどさ。」
セリパがそう返すと、バーダックに一人の男が寄ってきた。

「なんだよバーダック！お前女に囲まれてよ、しかもすげえ別嬪
ばっかりじゃねえかよ！！羨ましいぜ！！」

「うっせえよトーマ、悔しかったらお前もいい女見つけてみるよ！」
「！」

「言ったなあ、今に見てるよ！！」
トーマと呼ばれた男は悔しそうに地団駄を踏んだ。
彼は長い髪を後ろで束ねていて、面長だが意外と男前な部類に入る。
ちなみに、バーダックとは無二の親友である。

そして、少し離れた所にサイヤ人が二人座っていた。

名前はトテッポ。

彼の風貌はエラの張った輪郭をしており、頭頂部が禿げて額に二本の斜めの傷がある。

その傷は、いままでの激しい戦歴を象徴しているように見える。

もう一人のサイヤ人の名前は、パンブーキン。

やや肥満体ではあるが、スピードはかなりのもの。

五人の中では一番気が短く、思考は良く言えば素朴で悪く言えば単純かつ短絡的。

さらに、自分たちをよく使ってくれるフリーザたちに唯一感謝している。

「よし!!おまえら、今回も気合い入れてやるぞ!!!!!!」

『オオオオオ!!!!!!!!!!』

などと、そういう会話をしているうちに目的の惑星カナッサに到着した。

S i d e : ? ? ? ?

同時刻頃、惑星ベジータではある二人の赤子が産まれた。

「おぎゃああー！おぎゃああー！」

「ついに産まれたぞ！……バードックの子供だ！」「サイヤ人の赤子の世話係の男が、その赤子を抱き上げながらそう言った。

「『カカロット』……この、バードックの子供の名前は『カカロット』だ！……！」

すると、その後もうひとつの産声があがった。

「もう一人産まれたぞ！……これは、パラガスの子供だ！」

「名前は、『ブロリー』だ！……！」

「よし！……じゃあさっそく、その二人の戦闘力を計測するぞ……！」

計測の結果

カカロット 戦闘力：2

ブロリー 戦闘力：10000

こうして、二人のサイヤ人『カカロット』と『ブロリー』と言った名の赤子が産まれた。

その頃、バーダックは

Side：バーダック

「うらああ……！」

バキイーンッ

「ぐああ!?!」

惑星カナッサの住民達を殺しながら、侵略していた。

そして

「紫電一閃……！」

ズシャアアアッ

「ラケーテンハンマー……！」

グシヤアアアッ

「縛れ!!!鋼の軛!!!」

ザシユツ ザシユツ

守護騎士達も、次々とカナツサを殺していった。

ちなみに、シャマルはバーダック達の怪我を治癒魔法で回復させる役割であった。

バーダックと守護騎士達のコンビネーションは抜群であった。

不意に、バーダックが敵に後ろをとられても

「飛竜一閃!!!!!!」

スバアアアッ

シグナムが敵を切り刻んだ。

「主バーダック、もう少し周りを見て戦ってください!!!!!!」

「へへっ!!!わりいな!!!!!!」

ヴィータの隙を狙って敵が迫って来ても

「させるかよ!!!!!!」

ドシューウウッ

バーダックが拳で、敵の身体を貫く。

「怪我ねえか？」

「うん！！あたしは、大丈夫！！！！！」

そして、わずか数時間で惑星カナッサを侵略してしまった。

こうしてバーダックは守護騎士達と協力して、惑星カナッサを侵略した。

だが、バーダックはあのような悪夢が起きるとは想像しなかった。

第十六話守護騎士達がお手伝い！？やるぞ惑星侵略（後書き）

オッス、オラ悟空。

カナツサつちゆう惑星を侵略し終わった父ちゃんは、カナツサ星人の最後の生き残り『トウロ』つちゆうヤツから不思議な攻撃を喰らっちゃった！！

次回・魔法少女リリカルなのは S

夢を見た！！バーダックの知った衝撃の未来

「まさか……オレは、未来が見れるようになったのか……。」

第十七話夢を見た！！バーダツクの知った衝撃の未来（前書き）

すいません！！

試行錯誤している間に凄い時間がかかってしまいました。

第十七話夢を見た！！バーダックの知った衝撃の未来

惑星カナッサを侵略したバーダック達は、惑星ベジータに戻って来て休憩室にいた。

「はあ、今回も歯ごたえねえ仕事だったな。」

「なんだい、バーダック。あんたまた満足しなかったのかい？」

「まあっ！！いつもの事だろ！！！！」

バーダック達は慣れていたので、それほど疲れてはいなかった。

「ん？おい、大丈夫か？おまえら。」

だが、シグナム達は

「はあ…はあ…は、はい大丈夫です。」

「もう無理！！あたし疲れた！！！！」

「たしかに、少々疲労が激しいな。」

「私は、そろそろ魔力が尽きそうです。」

シグナムは、息を乱してはいたがしっかり受け答えはした。

ヴィータは、汗だくの状態です。床に寝転んで休んでいました。ザフィーラは、額に汗を滲ませていたがそれほど疲れているように見えなかった。

シヤマルは、戦闘中の治癒魔法でのサポートのせいか魔力が底を尽きかけていた。

「まあ、初めての惑星侵略だったからな。しっかりと休んどけよおまえら！……！」

「……はい！……！」

その後、バードックは仲間達と談笑をしていた。すると、トーマとある話題をもちあげた。

「バードック！……そういや、お前子供産まれたんだってな！……！」

「本当かい！？そりゃ、いいニュースだね！……！」

「やめろよ、トーマ、セリパ。照れるじゃねえかよ！……！」
バードックが照れていると、シグナム達も寄ってきた。

「主バードック！……ご子息が産まれたのですか！？おめでとございます！……！」

「おめでとう、バーダック！！なあ、あたし今度その子供見てみてえ！！！！！」

「主、おめでとうございます。どうか、お幸せに。」

「バーダックさん！！もし、赤ちゃんに何かあったらすぐに呼んでくださいね！！！！」

そして、シグナム達もそれぞれお祝いの言葉を送った。

そんな楽しい時間が流れていると、

バアアアアンツ

突然、ドアが勢いよく開かれた。

バーダック達は、驚きドアの方を見た。

すると、そこには侵略した惑星の住人、カナツサ星人の生き残りがあった。

「ちっ！？まだ生き残りがいやがったのか！！」

バーダックはそう叫ぶと戦闘態勢を取った。

他の者達も、バーダックに続き構えを取った。

「うあああああ！！！！！！」

カナツサ星人の最後の生き残り『トウロ』は、雄叫びをあげながらバーダックに向かって走り出した。
だが

「主バーダックには指一本触れさせん！……！」
トウロの前にシグナム達守護騎士が立ち塞がった。
そして、

「縛れ……！鋼の軛……！！！」

ザフィーラは、鋼の軛でトウロの手足を貫き拘束した。

さらに、

「はああああ……！！！」

ズシヤアアアツ

「でりやああああ……！！！」

ドゴオオオンツ

シグナムとヴィータが踏み込みそれぞれの武器で、トウロを斬りつけ、殴った。

「がああ！？……くっ、喰らええええ……！！！！！」

しかし、トウロは諦めておらずバーダックにエネルギー弾を放った。

「風よ……！！！」

ビュウウウウツ

だが、そのエネルギー弾がバーダックに届く事はなかった。
なぜなら、シャマルが残り少ない魔力で広範囲防御魔法『風の護盾』
でエネルギー弾を防いだからである。

ムにより首を切り落とされ絶命した。

「うっ！？……うっ……。」

ドサッ

「主バーダック！……！」

「バーダック！……！」

「主！……！」

「バーダックさん！……！」

それと同時に、バーダックも意識を失い倒れた。

S i d e : バ ー ダ ッ ク

バーダックは、真つ暗な空間で目を覚ました。

うう……ここは何処だ？オレは確か、惑星力ナツサの野郎の変な光線喰らっちゃったんだ！！それから……

バーダックがさらに思い出そうとしたその時、周りの風景が突然変わった。

そして、写し出されたのは

な、なんだよこれ

バーダックは絶句した。

生まれ故郷である惑星ベジータが自分達の雇い主フリーザによって破壊されている風景が写っていた。

ゆ、夢なのか！？頼む、夢なら覚めてくれ！！

そして、その言葉と共に再び真つ暗な空間になり、バーダックの意識も少しずつ覚醒していった。

「……………ックさ……………ーダックさん……………」

「くっ……………うう……………」

「バーダックさん……！」

「……………！……………シヤマルが……………」

バーダックは、目を開け目の前にいたシヤマルの名前を呟いた。そして、周りを見渡してここが医務室だということに気付いた。

「大丈夫ですか？」

「ああ。」

「待つててくださいね。今シグナム達を呼んできますから!!」
そう言つて、シャルルは医務室から出ていった。

シャルルが出ていった後、バーダックは先程の夢について考え込んだ。

「(さっきの夢はなんだったんだ？あれは未来なのか!?!はっ、まさかな。)」

バーダックがそこまで考えた所で

ガチャッ

シャルルとシグナム、ヴィータ、ザフィーラが入ってきた。

みんな心配そうな表情だった。

その中でも特に

「バーダックウウ!!!!!!」

「ぐぶう!?!」

ヴィータは今にも泣きそうな表情のまま思いつきりバーダックに抱きついた。

だが、抱きつき所が悪く鳩尾にジャストミートした。

そのため、バーダックは強烈なダメージを受け再び意識を失いかけた。

「ヴィータ!?なにをやっている!!!!!!」

「ヴィータちゃん!?駄目よ、バーダックさんは怪我人なんだから!!!!!!」

シグナムとシャマルはヴィータの行動に驚いたが、バーダックの様子を見て慌ててヴィータをバーダックから引き剥がした。

「あの……大丈夫ですか?バーダックさん。」

「あ、ああ……なんとかな。」

少しして、バーダックは先程のダメージから立ち直った。

「……ご、ごめんバーダック。あたしのせいで……。」

ヴィータは勢いよく抱きついた事を謝った。

だが、バーダックは

「いや、お前はオレを心配してやったことなんだろう?だったら、許してやるさ!!!!!!」

ポフッ

「あうう……。／＼／＼／」

そう言つて、バーダックはヴィータの頭を優しく撫でてやった。ヴィータは、撫でられて顔を真っ赤にさせた。

そこでバーダックはトーマ達がいな事に気付いた。

「なあ、シグナム。」

「何ですか？」

「トーマ達は何処に行ったんだ？」

「先程惑星ミートと言う星を侵略しに行かれましたが……………」。

ガバツ

それを聞いたバーダックはベッドから飛び起きた。

「オレ達も行くぞ……!!」

「ま、待つてください!?!? バーダックさん大丈夫何ですか?」

「ああ……もう平気だ、とつとと行くぞ……!!……!!」

そう言つて、バーダックは医務室から出ていった。
シグナム達もバーダックのあとを追つて医務室から出た。

タッタッタッ

「ん？」

しばらく走り続けていると、バーダックはある部屋の前で立ち止まった。

そして、ちょうどシグナム達もバーダックに追いついた。

「どうしたんですか？主バーダック。」

「……………」

シグナムが不思議に思い、バーダックに訊いてみたがバーダックは何も言わずある部屋に入つていった。

そこは、サイヤ人の赤ん坊の保管所だった。

「……………」

バーダックは一人の赤ん坊の前に立っていた。

「主バーダック。その子供が……………」

「ああ、オレの息子カカロットだ。」

バーダックがそう言うと、ヴィータとシヤマルがカカロット近寄った。

「わあ、バーダックにそっくりだ!!!!!!」

「そうね、特に髪型なんて瓜二つね!!!!!!」

ヴィータがカカロットの頬をツンツンとつついた。

すると

「うう……うあああ!!!!!!あああ!!!!!!」

案の定、泣き出してしまった。

「わあ!?!や、やべっ!!!!!!ど、どうしよう!!!!!!ど、どうしよう!!!!!!」

泣かしてしまったヴィータあわてふためいた。

「私に任せてヴィータちゃん!!!!!!……はい、よしよし。ごめんね起こしちゃった?さあ、泣き止んで。」

シヤマルは、カカロットを抱き上げ背中をほとんど叩いてあげながらあやした。

そして、少しすると

「…………ふわああ…すつうう…すつうう」
カカロットは泣き止み寝てしまった。

「あらら？寝ちゃったわ。」
そう言つて、シャマルは再びカカロットをベッドに寝かせた。

「ギガスゲー!!!」
ヴィータは、シャマルがカカロットを寝かしつけた所をみて感心の声をあげた。

するとそこに一人の白衣を着た男性が来た。

それを見たバーダックはその男性にある事を訊いてみた。

「おい!!そこのお前!!!」

「!?!…なんですか?」

「オレの息子の戦闘力はいくつなんだ?」

「…………誠に残念ですが…………あなたの息子の戦闘力は…たった2です…………。」
それを聞いたバーダックは失望し、カカロットを睨んだ。

「…………クズが!!!…………。」

そう言っつて、バーダックは部屋から出ていった。

「主バーダック!!!お待ちを!!!!!!」

そして、シグナム達もバーダックのあとを追い部屋から出ていった。

そして、バーダック達は惑星ミートに到着した。

だが、バーダック達は悲惨な光景を見た。

「!!!!!!トーマ!!!!!!セリパ!!!!!!パンブーキン!!!!!!ト
テッポ!!!!!!」

バーダックの仲間であるトーマ達がスタボロにされ、皆虫の息だった。

そんな中

「ぐっ!?!?!がはっ!?!」

「じほっ!?!?!はぁ!?!?!はぁ!?!?!はぁ!?!?!」

「トーマ!!!セリパ!!!大丈夫か!?!」

トーマとセリパが、吐血をしながら起きあがった。

「バ、バーダック!?!ぐっ、オレの言う!?!事をよく!?!聞け!?!」

トーマは今にも消え入りそうな声でバーダックに言った。

「ああ！！なんだトーマ。」

「オ、オレ達……は……ドドリアの……部下共……にやられた……。」

「なんだと!?!」

「そ、そして……フリーザがオレ……達サイヤ人を皆殺……しする計画を聞いた……んだ……。」

「……まさか……!?!?。」

そして、バーダックはあの時見た夢の事を思い出した。

「た、頼む……バーダック……オレ達サイヤ……人の命……と未来を守つ……てく……れ……。」

パタッ

そこまで言ったのと同時に、トーマの手が力を無くし落ちた。

「……くっ!?!……トーマ……。」

「バーダック……。」

そして、後ろからセリパがバーダックに話し掛けた。

「あたし達のかわり……にフリーザの野郎を……倒しておくれ……。」

「ああ……約束するぜ……。」

「あたし……達の魂を吸っ……て力に……して勝って……おくれ……よ……。」
「……。」
そう言つて、セリパも静かに瞼を閉じた。

「くっ!?!?……さねえ、許さねえぞおお!!!!フリーザああああ……!!」

ドオオオオオンッ

バーダックは怒りの雄叫びをあげ、気を全開に放出した。

そして、バーダックはついにフリーザへの復讐を誓った。

第十七話夢を見た！！バーダックの知った衝撃の未来（後書き）

オッス、オラ悟空。

仲間達を殺された父ちゃんは、フリーザに復讐を誓った。

だけど、他のみんなはフリーザを倒すのに協力してくんねえ！！
いったいどうすりゃいいんだ！？

次回・魔法少女リリカルなのは S

お前だけは許さねえ！！バーダック怒りの復讐

「フリーザアアア！！！！オレは貴様が許せねええええ！！！！！！！！！！」

第十八話お前だけは許さねえ！！バーダック怒りの復讐（前書き）

次回から本格的にフリーザ軍団対バーダック&ヴォルケンリッターの戦闘が始まります！！！！！！

ここまで焦らしてしまいすいませんでした！！！！！！

第十八話お前だけは許さねえ！！バーダック怒りの復讐

怒りの雄叫びをあげたバーダックはゆっくりと立ち上がった。

「トーマ、セリパ、パンブーキン、トテツポ、お前らの魂はオレが……オレ達が吸ってやる。」

バーダックがそう言うのと同時に

シュウウウウンッ

すぐ近くが輝いて闇の書が現れた。

「闇の書？」

バーダックは突然現れた闇の書を見ていると、闇の書はふわふわと飛びながらバーダックに寄ってきた。

「バーダックさん、闇の書の手でトーマさん達のリンカーコアの蒐集してください。」

「リンカーコア？……なんだそりゃ？……まあいいか。」

そして、バーダックは闇の書を開きトーマ達に向け命令した。

「蒐集……！」

シュウウウウンッ

すると、トーマ達の体から何かが闇の書に吸収されていった。

「むっ!？」

「なんだ……これ……。」

「なにかしら?」

「力がみなぎってくるようだな。」

その時、シグナム達の体に異変が現れた。

突然、シグナム達の体に力がみなぎり始めたのだ。

「よし、終わったぜシャル。」

「はい、ご苦労様です。」

そう言っつて、シャルは闇の書を受け取り開いた。

「……!?!?……うそ……!?!?」

そして、驚愕した。

「どうした?シャル。」

「なにかあったのか?」

そんなシャマルの驚き方にシグナムとヴィータが寄ってきて訊いてみた。

「も、もう400頁になってる……………」。

「はあああ!?!」

シャマルから予想外な事を聞いて啞然とした。

そんな中、ヴィータが一番に正気に戻り慌てた様子で言った。

「ちょ、ちょっと待てよ!!!!!!てことはあれか!? トーマ達一人ずつから100頁も蒐集したってことかよ!!!!!!」

「そういうことになるわね……………」。

「……………うそだろ……………」。

「それよりも、これで闇の書の管制人格を呼び出せるわ!!」
シャマルはそう言って、闇の書をバーダックに渡した。

「バーダックさん!! 闇の書から管制人格を呼び出してあげてください……………」

「……………って、どうやるんだ?」

「闇の書に命令すれば出てきます。」

「わかった!! やってみるぜ!!!」

シヤマルの説明を受け、バーダックは闇の書を持ちながら命令した。

「出てこい!!! 闇の書の管制人格!!!!」

ピカアアアアッ

すると、闇の書は輝きだし勝手に開きバーダックの目の前にベルカ式の魔方陣が展開された。

そして

シュウウウウッ

魔方陣の中から人影が現れた。

その人影は女性で、バーダックの前で片膝を地につけた状態で現れた。

「お前が……闇の書の管制人格か？」

バーダックはおそろおそろ目の前の女性に訊いてみた。

「はい……私は闇の書の管制人格。主の命により呼び出されました。

……何なりとご命令を……。」

「ああ、オレの命令は……オレと一緒にフリーザと戦ってくれ!!

!!!」

「はい、お任せください！！我が主！！！！」

こうして、バーダックは闇の書の管制人格を仲間に加えた。

そして、バーダックはさらに仲間を増やそうと他のサイヤ人達にフリーザの裏切りについて話したが

「はあっ！？なに言ってるんだ？お前はよ。」

「頭でも打ったんじゃないやねえんじゃないやねえのか？」

「そんな事起きるわけねえだろ！！！！バカじゃねえのか？お前。」
と、誰一人バーダックの言葉を信用する者はなく最終的に『アイツはイカれたヤツだ！！』と言われた。

その時、シグナム達が自分達の主をバカにしたサイヤ人達に襲い掛かるうとしたが、バーダックの手で止められた。

「主バーダック！！何故止めるのですか！？あの者達は、真実を話した主を愚弄したのですよ！？」

「そつだよ！！あたし、あいつらをぶん殴らないと気が済まないよ

「……………」
シグナムとヴェータが止めたバーダックに詰め寄ったがバーダックは静かに言った。

「いや、もういい……………もう……………オレ達だけでやるしかねえ！！」

「……………」
そう言つて、バーダックは覚悟を決めた。

「行くぞ……………おまえら……………」

「……………」
「……………」
「……………」

「オレ達……………サイヤ人の未来をかけた戦いに……………」
そして、その言葉と同時にバーダック達はフリーザ軍団がいる場所へ飛んでいった。

Side：フリーザ軍団

「フリーザ様の命令通りまずサイヤ人達を皆殺しにする。いいな？」

『『『』』』』
『『』』』』
『』』』』』

フリーザ軍団のリーダーのような男が部下達に今回作戦の確認をしていた。

「よし！！では、作戦開：「ピピピッ」：ん？なんだ？」

リーダーのような男が作戦開始の合図を出そうとしたその時、その男のスカウターがある反応を確認した。そして、その直後フリーザ軍団の前に六人の男女が降りてきた。

S i d e : バ ー ダ ッ ク

こいつらは、フリーザの部下共か。

「なんだ？おまえら。」

バーダックがそう思っていると、リーダーのような男が話し掛けた。

「お前：サイヤ人だな？だったら悪いが死んでもらうぜ。」

そう言うと、リーダーのような男はバーダックに向けてエネルギー弾を放った。

だが

パアアアアッ

「な、なんだと！？」

「……………」
バーダックはいとも簡単にエネルギー弾を片手だけで後ろの方へ弾き飛ばした。

「な、何かの間違いだ……喰らえ!!!」
そう言つて、男はさらにエネルギー弾を2、3発放つた。

しかし

「はああああ!!!」

スパアアアアッ

「だりやああああ!!!」

ズバアアアアッ

「うおおおお!!!」

バアアアアッ

エネルギー弾はすべてバーダックに当たる前に、シグナムが剣で斬り裂き、ヴィータがハンマーで叩き潰し、ザフィーラが拳で破壊した。

「な、なに!?!」

リーダーのような男が動揺している隙に、バーダックは接近して

「おらああああ!!!」

バキイイインッ

「ぐはぁ!?!」

殴り飛ばした。

男は吹っ飛び近くの岩に激突して、岩は砕けて下敷きになった。

『隊長!?!?!!』

他のフリーザ軍団の隊員達が岩の所に集まった。

「隊長!?!くっ!?!?バーダック、貴様!?!?!!」

「皆でかかれ!?!?!!」

『おおおおお!?!?!!』

一人の隊員の言葉が合図かのように、フリーザ軍団が全員でバーダック達に襲い掛かった。

バーダックは構えて迎え討とうとするが

「我が主……ここは私にお任せを……」

と、管制人格が言いながらバーダックの前に立った。

そして、手を上に掲げ魔力を集中させた。

「遠き地にて……闇に沈め。」

すると、掲げた手の先に巨大な漆黒の球体が形成され

「デアボリック…エミツション!!!!!!」
手を振り下ろし、フリーザ軍団に向けて放った。

ズシャアアアアアンツ

フリーザ軍団は為す術もなく漆黒の球体に呑み込まれ跡形もなくこの世から消滅した。

「我が主…終わりました。」

「ああ。」

管制人格がバーダックの方を向き、戦闘終了と報告した。

「なあなあ、バーダック!!これなら、フリーザって奴にも勝てるんじゃないか?」

ヴィータが先程の管制人格の技を見て、自信満々そうな表情でバーダックに訊いた。

「いや、まだわかんねえ。あの野郎にしたら、あの程度の攻撃屁でもねえ筈だ。」

「そ、そんなに強いのかよ。そのフリーザって奴。」

「ああ、だからおまえら油断するんじゃないぞ!!!いいな!!!!!!」

『はい!!!!!!』

そして、バーダック達はフリーザのいる宇宙船に向かって飛んでいった。

S i d e : : : ? ? ? ?

「変ですね？」

「どうかされましたか？」

「先程惑星ベシータに送った隊員達が戻って来ません。おそらく何者かにやられたのでしょう。」

「なんですってー!？」

「それに、おそらく隊員達を殺した者はこちらに向かって来る筈です。」

「どうしますか!?!フリーザ様!?!」

「ホホホホ、決まっているじゃありませんか。ザーボンさん、すぐに戦闘の準備をしてください。いいですね？」

「はっ！……！」

「一応の事も考えて私も出ます。」

ついに黒幕、宇宙の帝王フリーザが動いた。

果たして、バーダックはフリーザに勝てるのか？
そして、サイヤ人の運命は………。

第十八話お前だけは許さねえ！！バーダック怒りの復讐（後書き）

オッス、オラ悟空。

ついにフリーザ軍団達との戦いだ！！！！

父ちゃんもサイヤ人の未来のために必死に戦った。

そして、ついに父ちゃん達の前にフリーザが姿を現した。

次回・魔法少女リリカルなのは S

「未来を賭けた最終決戦！！バーダック&ヴォルケンリッターVSフリーザ」

「最終決戦だ！！！！行くぞおまえら！！！！」

第十九話未来を賭けた最終決戦！―バーダック&ヴォルケンリッターVSフリー

過去編完結

今回はかなり長いです。

後書きの予告の後に、ある豆知識が書いてあります。

第十九話未来を賭けた最終決戦！！バーダック&ヴォルケンリッターVSフリー

バーダック達は、フリーザのいる宇宙船目指して飛んでいた。

「管制人格、一つ訊きたいのだが。」

「なんだ？将。」

その途中で、シグナムが管制人格にある質問をした。

「先程の戦闘で私の力が格段に上がっていたが、何か知っているか？」

「そうだよ、あたしもさつきから凄い力が溢れてくるんだよ。」

「それは、我也感じていた。」

「実は…私も……。」

シグナムの質問に続いてヴィータ、ザフィーラ、シャマルも管制人格に訊いた。

そして、管制人格は驚くべき事を言った。

「さつき戦闘の前に、主が四人のサイヤ人から蒐集しただろ？」

「ああ。」

「実はその時、我らの構成プログラムにサイヤ人の特性のすべてが上書きされたらしいのだ。」

「……はああ!?!」「……」

シグナム達は、管制人格から驚くべき真相を聞かされ啞然とした。

「あ、主バーダック!?!?!」

「ん?どうした?シグナム。」

「お願いがあるのですが、我らの戦闘力を計測してはいただけませんか?」

シグナムは、突然バーダックを呼び止め戦闘力を計測するように頼んだ。

「は?戦闘力?…まあ、別にかまわねえけどよ。」

ピッ ピッ

バーダックはそう言って、スカウターを動かしシグナム達の戦闘力を見ようとしたが、

ポオオオンッ

「なっ!?!」
スカウターが壊れてしまった。

「す、すげえじゃねえかよおまえら!?!?!いつの間にスカウターがぶっ壊れるほどの戦闘力を身につけてたんだ!?!?!おまえら一万越えてるんじゃないか!?!」

バーダックは、スカウターが壊れるほどの戦闘力に興奮していた。それには、シグナム達も驚いていた。

「だが、どうやってそんな戦闘力を身につけたんだ?」
バーダックが不思議に思ったが、管制人格がバーダックの横に行つて教えた。

「おそらく主が蒐集された時に、あのサイヤ人の特性が我々の構成プログラムに上書きされたためかと。」

「……………そうか。」
バーダックはどこか嬉しそうな、だがどこか悲しそうな表情で返事をした。

「まあ、すげえ事が分かったんだ早くフリーザのところに行くぞ!?!?!」

「……………はいっ!?!?!?!?!」
バーダックの号令と共に、皆フリーザの宇宙船目指して再び飛んで行った。

S i d e : フリーザ

「フリーザ様!!!!!!」

「どうかしましたか？ザーボンさん。」
フリーザが椅子に座りながら待っていると、フリーザの部下『ザーボン』が部屋に入ってきた。

「先程、宇宙船のセンサーがこちらに向かって来る生命反応を感知しました。そして、その生命反応の戦闘力を計測したところ皆一万を越えており、中には二万以上の者もいました。」

「そうですか、やはり来ましたか。しかし、戦闘力二万以上とは驚きましたね。」

「どうされますか？フリーザ様。」

「とりあえず、兵を向かわせてください。」

「はっ！……！」

ザーボンは、フリーザから指示を聞くと部屋から出ていった。

Side：バーダック

「着いたぞ。」

バーダック達は、すでにフリーザの宇宙船が見える位置まで来た。
た。

「あれが、フリーザの宇宙船ですか。…大きいですね。」

「変な形だな。」

シグナムとヴィータは、フリーザの宇宙船を見てそれぞれの感想を
呟いた。

「よしっ！…行くぞ！…！」

そう言っつて、宇宙船に向かって近づいたその時

バアアアンツ

どこからかエネルギー弾がバーダックに向けて放たれた。

「うお！？」

バーダックは、上体を反らしギリギリ回避した。

「大丈夫ですか！？主バーダック！！！！」

「お怪我はありませんか！？我が主。」

「ああ、避けたから大丈夫だ。」

シグナムと管制人格がバーダックに寄り安否を心配したが、バーダックは回避していたので無傷であった。

「シヤマル！！ここら一帯を搜索魔法でサーチしろ！！！！バーダックに攻撃した奴を探せ！！！！」

「分かったわ！！」

「見つけたら、あたしがこの手でぶっ殺してやる！！！！」
ヴィータは、シヤマルにこのあたり一帯をサーチするよう指示してバーダックに攻撃した奴が見つかるのを殺気を撒き散らしながら待っていた。

「……………。」
ザフィーラはいつでも戦えるように身構えていた。

そして

「……………！？…みんな気をつけて！！私達囲まれてるわ！！！！」
シヤマルが探索魔法の結果を言ったのと同時に、バーダック達の周

りに数え切れない程のフリーザ兵達が現れた。

「ちっ！？奇襲か！！！！！」

「そう言うことだ。…喰らえ！！一斉射撃だ！！！！！」

一人のフリーザ兵の言葉と同時にバーダック達を囲むように配置されたフリーザ兵達が一斉にバーダック達に向けてエネルギー弾を乱射した。

「ふはははは！！！！死ねえ、バーダック！！！！！」

「くたばれえ！！！！！」

「ははははは！！！！死ね死ねえ！！！！！」

エネルギー弾を撃っているフリーザ兵達は、口々に叫びながら容赦なくエネルギー弾を撃ち続けた。

しばらく撃ち続けて、

「よしっ！！もうこれぐらいで良いだろう！！！！全員撃つのをやめろ！！！！！！」

一人のフリーザ兵が叫び、エネルギー弾の嵐は止まった。

「はっはっは！！それにしても呆気なかったな！！！！！！」

そして、フリーザ兵が高笑いしていると少しずつ爆煙が消えてきた。

「はっはっは!! はっはっは……はっ! ?」

高笑いしていたフリーザ兵の表情が突然凍りついた。

爆煙の先に現れたのは

周りに守護騎士達が立ち並び、三角形の魔方陣に守られた、無傷のバーダックであった。

Side:バーダック

「ふう〜、危なかったぜ。ありがとよ!! おまえら!!!!!!」

「これが、私達の使命ですから。」

シグナムは、バーダックに振り向きながら言った。

「あたしが奴ら全員ぶっ飛ばしてやる!!!!!!」

ヴェータは、目の前に広がる無数の敵達を睨みながら言った。

「私は、全力でバーダックさんのサポートをします!!!!」

シヤマルは、バーダックの後ろに下がристиンバイしながら言った。

「我は、主を絶対にお守りいたします。」
ザフィーラは、拳を構えながら言った。

「私は、主と共に戦います！！！！」
管制人格はそう言つと、バーダック前に移動して

「ユニゾン…イン！！！！」
バーダックの身体に入り、一つになった。

ピカアアアアッ

そして、辺り一面を光が包んだ。

守護騎士達とフリーザ兵達はあまりの眩しさに目を瞑った。

強烈な光がおさまり、守護騎士達とフリーザ兵達は変化したバーダックの容姿に目を見開いた。

バーダックの髪の毛は逆立ち色は雪のように白く鮮やかに煌めく白銀に染まり、瞳はまるで吸い込まれるような深い赤色をしており、背中には三対の漆黒の翼が生えていた。

「す、すげえ……何なんだ、こいつは。どんどんパワーが溢れてきやがる。」

「主、聞こえますか？」

バーダックが、変化した自分の容姿とパワーに驚いていると、突然どこからか管制人格の声が頭の中に響いた。

「管制人格か？…どこにいるんだ！！！！」

『主の身体の中にいます。』

「オレの身体の中！？」

『はい、私は主とユニゾンをしている状態です。』

「ユニゾン？」

『ユニゾンと言うのは、つまり主と融合して主の戦闘能力を飛躍的に高めると言うことです。』

「なるほどな。」

バーダックは、管制人格の説明を理解したのか首を縦に動かした。

「まあいいか、とりあえず行くぞ！！おまえら！！！！」

「『はい！！！！』」

S i d e : シグナム

「はああ！……！」

ズシャアアツ

「ギャアア！？」

シグナムは、愛刀レヴァンティンを振るいフリーザ兵を倒していた。

「くそっ！？一斉にかかれ……！」

「うおおおお……！」

一人のフリーザ兵の言葉を合図に兵達が一斉に向かってきた。

くっ！？一斉にかかってきたか………だが

そしてシグナムは、フリーザ兵達の間を駆け抜け通りすぎ、レヴァンティンをゆっくりと鞘に収めると同時に

スパパパアアンツ

フリーザ兵達の身体はシグナムの疾走居合いにより、バラバラに切り刻まれた。

戦闘力が格段に上がった我らの敵ではない……！！！！

S i d e : ヴ ィ ー タ

「おい！！誰かあの【チビ】を殺せ！！！！！！」

ビキッ

「くそっ！？あいつ【チビ】のくせにかなりパワーがあるぞ！！！！！！」

ビキッビキッ

「だったら、オレがああ【チビ】をやってやる！！！！！！」

ビキッビキッビキッ

「さつきから、あたしの事……………」
ヴィータは、顔を俯かせ肩を震わせていた。そこへ、一人のフリーザ兵がヴィータに突っ込んできていた。

言うてはならない禁句を叫びながら

「死ねえ！！この【チビ】がああ！！！！！！」

…ブチンッ

グシャツベキヤツボコオツグチャツ

フリーザ兵達を次々と殺していった。

S i d e : ザフィーラ

「喰らえ！！！！！」

バキイイインッ

一人のフリーザ兵がザフィーラの頬を殴った。

しかし

「その程度の攻撃では、我は倒せん！！……でいやああ！！！！」

ダアアアアンッ

「がはっ！？」

ザフィーラはフリーザ兵の拳をもとせず、ザフィーラは殴ってきたフリーザ兵を逆に殴り飛ばした。

そして、ザフィーラはフリーザ兵達が群がっている所に飛び込み

「はあああああ！……！」

ズダアアアアッ

『があああ！？』

回転蹴りで周りのフリーザ兵達を一掃した。

さらに

「縛れ！！鋼の鞭！！！！！」

ザシュッ ザシュッ ザシュッ

残りのフリーザ兵達を鋼の鞭で串刺しにした。

Side：シヤマル

「みんな！！頑張つて！！！！！」

シヤマルは非戦闘員のため後方からシグナム達にエールを送っていた。

するとそこに

「お前から先に倒してやる！！！」

別行動をしていたフリーザ兵がシャマルに襲い掛かった。

「へっ!?!?...きゃあああ!!!!!!!!!!!!!!」

パアアアアンツ

突然現れたフリーザ兵に驚きシャマルは思いきりビンタをかました。普通ならばフリーザ兵には効かないが、今のシャマルは戦闘力が大幅に上がっているため

「じばあ!?!」

ビンタを喰らったフリーザ兵はそのまま吹っ飛んでいった。

その後も、数人のフリーザ兵がシャマルに襲い掛かったが全員シャマルのビンタで倒された。

Side:バーダック(ユニゾン状態)

「うらああああ!!!!!!!!!!」

ダアアアアンツ

バーダックはたった一人で何千人ものフリーザ兵と戦っていた。だが、バーダックは管制人格とユニゾンしているため完全に有利であった。

『我が主、私の魔法もお使いください。』

「おうー!!」

バーダックはそう言うと、片手を上に掲げた。すると、その片手の先に大量のエネルギーが集中し始め巨大な球体を作られた。

「喰らいやがれ!!デアボリック……エミッション!!!!!!」

ゴオオオオオツ

そして、思いきり片手を振り下ろすとその巨大な球体はたくさんフリーザ兵を呑み込みながら飛んでいった。

「まだまだ!!!!!!」

バーダックはさらに、もう片方の手をつきだし

「はああああ!!!!!!」

ドオオオオオンツ

超極太の砲撃を放ち、それを横薙ぎに動かしさらにフリーザ兵達の数を減らした。

S i d e : フリーザ

「フリーザ様!!!!!!」

「どうしましたか?」

フリーザがいる部屋にザーボンが慌てた様子で入ってきた。

「先程送ったフリーザ兵達が……ものの数分で……全滅しました。」

「ほう、そうですか。」

「どうしますか?フリーザ様。」

「そうですね……惑星ベジータを破壊するついでにそいつらも排除
しましよつかね。」

そう言うと、フリーザは椅子から立ち上がった。

「と言いつつ?」

「この私が倒してきますよ……。」

そして、フリーザは部屋から出ていった。

Side:バーダック

バーダック達は、その場にいたフリーザ兵達をすべて殺しフリーザの宇宙船に辿り着いていた。

「フリーザア……！出てきやがれ……！ぶっ殺してやる……！！！！！！」

「！！」
バーダック達は、宇宙船の屋根の所に降りバーダックは声を張り上げた。

その時

ウィーンッ

「ホホホホ、この私を殺す？出来るものならやってみなさい。」
屋根の中央のハッチが開き、そこから宇宙の帝王フリーザが姿を現した。

バーダックがフリーザの姿を視界に捉えると思いきりフリーザを睨んだ。

こいつのせいでトーマ達が……

「フリーザアアアア……！！オレは貴様が許せねええええ……！！！！喰らえ……！！！！！！」

バーダックは怒りのすべてを込めて叫んだ。
そして、叫びながらバーダックは砲撃を放った。

ドカアアアアソッ

砲撃はフリーザに命中し、土煙が舞った。

「やりましたね、主バーダック!!」

「なんだよ、結構あっさり終わっちゃったな。」

その時、シグナムとヴィータがバーダックの傍に寄ってきた。
だが、バーダックは土煙の方を睨み続けていた。

「いや、あの野郎がこれぐらいでくたばる訳ねえ。」

「ホホホ、その通りですよ。」

「「「「「っ!?!?」「」「」

突然、土煙の中から声が聞こえ守護騎士達は驚きそれぞれのデバイスを構えた。

そして、土煙の中から

「私がこの程度で死ぬわけないでしょう?」
無傷のフリーザが姿を現した。

「しかし、下等生物にしてはなかなか良い攻撃でしたよ。」

「へっ！…てめえに褒められたって嬉しくねえんだよ！…！！」

「…さて、どこからでもかかってきなさい。なんなら、五人まとめて相手してあげてもいいですよ？このフリーザ様直々に。」

「ふんっ！…言われなくても分かってんだよ！…行くぞ！…おまえら！…！！」

「…はい！…！！！！！！」

そして、バーダックとシグナム達はフリーザに向かっていった。

「うらああああ…！！！！」

バーダックはフリーザに接近してラッシュで攻めているが

「ふふふ、動きが遅いですよ。」

フリーザにことごとく避けられている。

くそっ！？全然当たらねえ！！！！なんて、速い動きしやがる！！！！！！

「主バーダック！…お下がりください！！！！！！」

「っ!?!?」

シグナムの声を聞き、バーダックは咄嗟にフリーザと距離を取った。すると、シグナムが入れ替わるように現れ

「紫電一閃!?!?!」

炎を纏った剣をフリーザに振り下ろした。

だが

ガキイイイインッ

「な、なに!?!?」

「その程度では、私は倒せませんよ。」

いともかんとんに、腕で受け止めていた。

「くっ!?!?」

「驚いてる暇はないですよ。」

ドガアアンッ

「かはっ!?!?」

フリーザはそう言いながら、シグナムの腹に自分の尻尾を叩きつけ

「それっ!?!?!?!?!」

パアアアアンツ

「ぐあっ!?!」

さらに、フリーザは身体を回転させその勢いでシグナムを尻尾で叩き飛ばした。

だが

「シグナム!?!?!」

ポフツ

「大丈夫か?」

「ああ、すまないザフィーラ。」

ザフィーラが先回りして、シグナムを抱き止めた。

「次は、あたしだ!?!?!」

ヴィータはまっすぐフリーザに向かっていった。

そして

「でやああああっ!?!?!?!?!」

アイゼンを振り下ろした。

しかし

ガアアアンツ

「なあっ!?!」

「あなたは、以外に力があるんですね。」

ヴィータのアイゼンは、フリーザの頭に直撃したにも関わらずフリーザは平然としていた。

「でも残念でしたね。その程度の力では私にダメージを与える事は出来ませんよ。」

シュツ

そう言うな否や、フリーザはヴィータの背後に高速移動で回り込み

シュルツシュルツ

ガッ

ヴィータの首を尻尾で締め上げた。

「がっ!?!...ぐ、ぐるじい!?!...!」

ヴィータは必死に尻尾を外そうとするが、ピクリとも動かなかった。

「ヴィータを放せ!?!...はああああ!?!...!」

その時、バーダックがヴィータを助けるために突っ込んできた。

「放してほしかったら、放してあげます…よ…!!!!」

ブウウンッ

フリーザは、締め上げていたヴィータをバーダックに向かって投げた。

「うわあああっ!!??」

ポフウンッ

「大丈夫か？ヴィータ。」

バーダックは驚いたが、しっかりとヴィータを受け止めた。

「わ、わりい!!…!!??…あぶねえ!!バーダック、後ろだ!!!!」

シュッ

「遅いですよ。」

「しまっ!?!」

フリーザは、バーダックがヴィータを受け止めて動きを止めた隙に高速移動で背後に来ていた。

そして、人差し指を向け

「じゃあね。」

ピイイイイッ

デスビームを放ったが、

「主は、指一本触れさせん!!!!!!」

ザフィーラが間に入り、プロテクションを展開した。

だが

パリイイインッ

ズシューウウウンッ

「があああ!?!」

デスビームはプロテクションを突き破り、ザフィーラの肩を貫いた。

「邪魔ですよ。…死になさい!!!!!!」

フリーザは、邪魔をしたザフィーラにもう一発デスビームを放とうとしたが

「させるかあ!!!!!!!!!!!!」

ダアアアアンッ

「なっ!?!」

バーダックが、フリーザの腕を蹴り上げデスビームの軌道を変え

「おらあああ!!!!!!!!!!!!」

バキイイイインッ

「がつ!?!」

もう片方の脚をフリーザの顔面に叩き込み、遠くへ蹴り飛ばした。

そして、バーダックはザフィーラとヴィータを抱えシャマルの所まで高速移動で下がった。

ちなみに、シグナムもいつの間にかシャマルの所に下がってきていた。

「シャマル!!ザフィーラを治療してやってくれ!!!!!!」

「はい!!静かなる風よ、癒しの恵みを運んで!!!!!!」
シャマルが呪文を唱えると、ザフィーラを緑色の光が包んだ。

シュウウウウツ

すると、ザフィーラの肩の傷口が少しずつ塞がり、ついには完全に治った。

Side:フリーザ

蹴った……この私の顔を……… 下等生物の分際で……

「くっ!?!」

フリーザは不意に口元を手の甲で拭った。

そして、見てみると血が付いていた。

わ、私の顔に傷を……下等生物の分際でよくも……よくも……私の顔を……

「ゆ、許さんぞ……猿野郎が……!」

そう叫ぶと、フリーザは身を屈め全身に力を入れた。

「ぐぐぐっ……!」

思い知らせてやる……!このフリーザ様の恐ろしさを……!……!……!
!……!

S i d e : バ ー ダ ッ ク

「大丈夫か？ザフィーラ。」

「はい、もう大丈夫です。」

ザフィーラは、そう答えるとすぐに起き上がった。

「でも、無茶しちゃダメよザフィーラ。」

「シャマルのいう通りだ。あまり無茶はするなザフィーラ。」

「善処する。」

シヤマルとシグナムが心配するが、ザフィーラは問題なく答えた。

ドオオオオオンッ

その時、突然大気が震えた。

「……………っ!?」「……………」

その衝撃と同時に皆身構えた。

すると、ある方向からフリーザが迫ってきていた。そして、フリーザはバーダック達の前で止まった。

「よ、よくも私に傷をつけてくれたな。もう許さん!!この猿が!!……」

フリーザは一気に気を爆発させた。

「望むところだ!!てめえこそぶっ殺してやる!!……!!」
バーダックも気を爆発させ全身から放出した。

「……はあああああ!!……!!……!!……!!」

フリーザとバーダックは極限まで気を高め、

「くたばれえ!!猿が!!……!!」

「てめえを倒して、未来を変えてみせる!!……!!」

同時に動き激突した。

「おらあああ！……！」

「はああああ！……！」

バーダックとフリーザは、拳や蹴りをぶつけ続けていた。

しかし

バキイイインッ

「がはあ！？」

フリーザの拳がバーダックの腹にめり込んだ。

「はああ！……！」

そして、フリーザが蹴りでバーダックを吹っ飛ばそうとしたが

「縛れ！！鋼の軛！！……！」

シュンッ シュンッ シュンッ

「っ！？」

突如現れた複数の白い刃がフリーザを貫こうとしたため、フリーザは高速移動で後ろに下がりバーダックから距離を取った。

だが

「たああああ！！！！！！」

「おりやああああ！！！！！！」

「なんだと！？」

高速移動で避けたフリーザにシグナムとヴィータが突っ込んできた。

「紫電一閃！！！！！！」

「その技は効きませんよ！！！！！！」

ガキイイインツ

シグナムがフリーザに紫電一閃を放つが、フリーザは腕で容易く受けた。

「…ふつ。」

すると、シグナムは薄く口の端を吊り上げるとフリーザから離れた。

その時、フリーザに影がかかった。

フリーザが不意に上を見上げると

「轟！！！！天！！！！爆！！！！碎！！！！」

ヴィータが

「ギガント!!!」

自分の身体の何倍もある巨大なグラーフアイゼンを

「シューラーク!!!!」

振り下ろしていた。

ドゴオオオオンッ

「ぐお!?!」

突然の事で、反応が遅れたフリーザは両手で受け止めた。

「ちっ!!!ぶっ飛ばええええ!!!!!!」

「があああ!?!」

だが、フリーザはそのままヴィータにぶっ飛ばされた。

「くっ!?!...このクス共があ!!!!!!」

フリーザはぶっ飛ばされたがすぐに体勢を立て直した。

しかし、

シューッ

「はああ！！！！」

バアアアアッ

「ぐあ！？」

高速移動したかのようにシグナムがフリーザの眼前に突如現れ、連結刃でフリーザをまたぶっ飛ばした。

「行くぞ！！レヴァンティン！！カートリッジロード！！！！」

ガシユンッ ガシユンッ

そして、そんなフリーザにさらに追い討ちを掛けるかのように、シグナムは鞘と剣を繋げ弓矢に変化させ、それをぶっ飛んでいくフリーザに狙いをつけ

「駆ける！！！！隼！！！！」

『シユツルムファルケン！！！！』

ビシユンッ

燃え盛る炎の矢を放った。

ヒュウウウウッ！！！！

そのまま炎の矢はフリーザに飛んでいき

ドガアアアッ！！！！

直撃して大爆発を起こした。

シグナムは弓矢に変化したレヴァンティンを元の剣と鞘に戻し、レヴァンティンを軽く振り鞘に収めた。

そして、ヴィータと共にバーダックのいる所まで下がった。

「主バーダック、今の攻撃ならさすがのフリーザも……………」

「ああ、少しは効いてる筈だ。」

バーダックがそう言った時、爆煙が晴れてきた。

その爆煙の中には

「ぐぐつ、クズ共の分際で…………よくも私に傷をつけてくれましたね。」

「ポロポロになり、所々から血を流しているフリーザがいた。」

だが、ポロポロになった事によりフリーザの怒りは限界を越えた。

「もう許さんぞー！虫けら共めー！！！！」

そう叫ぶと、フリーザは両手を上に掲げ、ありったけのエネルギーを集中させた。

すると

ゴオオオオオオツ

まるで、太陽を思わせるかのような巨大なエネルギーボールが形成された。

「!?…やべえ!?おまえら!!防御しろ!!!」
そして、バーダックの言葉と同時に

「惑星ベジータと共に!!消えて無くなれえええ!!!!!!」
!

ゴオオオオオツ

フリーザは腕を振り下ろし、エネルギーボールをバーダックと惑星ベジータ目掛けて放った。
対するバーダック達は

「行くぞ!!おまえら!!!」

「『はい!!!』」

『我が主!!!主も防御魔法が使えます!!!どうかお使いください!!!』

「分かった!!!」

ズウウウウウンツ

自分達の出せる限りの力で防御魔法を展開して受け止めようとして

いた。

そして

ズガアアアアソツ

「死ねえ！！！！クス共があ！！！！！」

「ぐっ！？…おまえら持ちこたえろ！！！！！」

「はい！！！！！」

「当たたり前だ！！！！諦めてたまるかよ！！！！！」

「くっうう！！！！！」

「くっ！？重い！！！！！」

フリーザのエネルギーボールと、バーダック達の防御魔法が激突した。

だが、完全にフリーザのエネルギーボールが押ししており、バーダッ

ク達は少しずつ後ろに下がっていった。

そして、ついには

……ミシッ……ミシッ……ビキッビキッ

バーダック達の防御陣がひび割れていった。

「ふふっ!!」

それを好機と見たフリーザは、突然手のひら程のエネルギーボールを作りバーダック達とつばぜり合っているエネルギーボールに撃ち込んだ。

すると、エネルギーボールが急に膨張し始め

ドカアアアアンツ

核爆発かのごとく大爆発をおこした。

S i d e : ヴ ィ ー タ

「ううっ……あれ、ここは？」

目を覚ましたあたしは地面に仰向けで倒れていた。
周りには、シグナム、シャマル、ザフィーラに管制人格も気を失い倒れていた。

……ちよつと待て、管制人格？

……なんで管制人格もいるんだよ。管制人格はバーダックとユニゾンしてたんじゃ……！？

その時、ヴィータは誰かが自分に覆い被さっている事に気付いた。
ヴィータは妙な胸騒ぎを感じながらその人物を見た、そして驚愕した。

「バ……バーダック……ク……！？……バーダック……！！！！！」

ヴィータは、ありつたけの声でバーダックの名前を呼んだ。
その声で、シグナム達も目を覚ました。

「うっ……ヴィータ、どうし………主バーダック……！！！！！」

「バーダックさん……！！！！！！！」

「主……！！！！！！！」

「我が主……！！！！！！！」

目覚めたシグナムを初め、みんなバーダックの元に駆け寄った。

バーダックは虫の息で、さらに背中では火傷のように焼け爛れていた。そして、バーダックの周囲は血だまりが出来ていた。

「おい！！管制人格一体何があつたんだよ！！なんでバーダックはこんなにポロポロになつてんだ！！！！」
切羽詰まつた様子でヴィータが管制人格に訊いた。

「実は、あの時……………」
すると、管制人格は先程の事を話した。

フリーザのエネルギーボールが膨張して大爆発を起こす瞬間

パアアアアッ

「我が主！？」

バーダックは管制人格とのユニゾンを突然解いた。

すると

バツ

エネルギーボールに背中を向け、まるで自分がシグナム達の盾になるかのようにバーダックは両手を広げた。

そして

ドカアアアアアッ

エネルギーボールは大爆発を起こし、その爆風でバーダック達は惑星ベジータまで吹き飛ばされた。

「そして、私達は我が主のおかげでほぼ無傷だった。しかし、私達の身代わりになった主はこのような状態に……………」

管制人格は、先程の事を話し終わると静かに涙を流した。

シグナム達も、管制人格の話聞いて涙を流していた。

「なんで……………なんでなんだよ、バーダック……………あたし達は、別に傷付いたって闇の書の再生能力で治るのに……………」

ウィータもポロポロと、涙の粒を落としながら気を失っているバーダックに話し掛けた。

その時

「ぐうっ!? ……がはっ ……はぁ ……はぁ ……」
バーダックが目を覚ました。

「……………主バーダック!? / バーダック!? / バーダックさん!? / 主!? / 我が主!?」

「はぁ…はぁ…よ、よぉ…おまえ…ら大丈夫だ……ったか?」

目を覚ましたバーダックは途切れながらもシグナム達に話し掛けた。

「…はい……………主バーダックのおかげで…我々は無傷…です……………」

「シグナムは、涙を流しながらバーダックの言葉に答えた。」

そして、次にヴィータがバーダックに詰め寄った。

「バーダック……!!」

「よお、ヴィー……タ……だ、大……丈夫だった……か？」

バーダックは、ヴィータの姿を見つけると自分がボロボロでありながらも彼女の安否を気遣った。

「あたしの事はどうでもいいんだ……!!……なんで……なんであたし達の身代わりになったんだよ……!!……なんで……なんでなんだよ……バーダック……!!」

ヴィータは、叫びながらバーダックの身体に顔を押し付けながら泣いた。

すると

ポンッ

「へっ……そんなの決まっ……てんじゃねえ……かよ……!!」

バーダックは、ヴィータの頭の上に手を置き

「おまえら……がオレの大……切な仲間だからだよ……!!。オ、オレは目の……前で仲間が傷付く……のを見たくねえから……!!」

血だらけの顔で微笑みながらそう言った。

だがその時

「へへっ……！？…グッ…ゲホッゲホッ！！」

ビチャッ

「……っっ！？」

深刻なダメージのせいかバーダックはかなりの量の血を吐いた。

「バーダック！？シャマル！！早くバーダックの怪我を治すんだ！

！……」

ヴィータは、バーダックが吐いた血を少し浴びながらもシャマルを呼んだ。

「わかったわ！！！！バーダックさん！！絶対助けますからね！！

！！」

そして、シャマルが治癒魔法をかけようと手をつきだしたが、

ガシッ

バーダックが、シャマルの手首を掴み強制的に止めさせた。

「いい……んだ……オレはもう……死ぬ……自分の命の最後……くらい分かっ……てる……結局、未来は変えられ……なかつたんだ……」。

「……そんな！？」

「嘘だ……嘘だ……！！バーダック……！死ぬなんて言わないですよ！お願いだから生きてよ……！！！」

「そうです……！ヴィータの言う通り、生きてください……！主バーダック……！！！」

「我が主……！どうか生き延びてください……！！！」

「主……！！……お気を確かに……！！！」

バーダックの言葉に、シグナム達は驚き必死に呼び掛けた。

だが、バーダックの瞳が少しずつ閉じていった。

「嫌だ……！あたしもっとバーダックと一緒に居たいよ……！死なないですよ……！……！死なないですよ……！バーダック……！！……！！」
ヴィータは、声を張り上げ叫んだ。

Side：バーダック

すまねえ……おまえらだけを残して逝っちゃうオレみたいなダメな

主を許してくれ……

そして、バーダックの命が尽きようとしたその時、バーダックの脳裏に最後の未来が見えた。

それは、バーダックの息子『カカロット』がフリーザと対決する予知夢だった。

「ふっ……死ぬ間際になっ……てまた未来が見えち……まった……ぜ……」

それを見たバーダックは、微笑み独り言のように呟いた。

そして、拳を天に掲げ、思いきり息を吸い込み叫んだ。

最初で最後の息子へのメッセージを

「カカロットよおおおお！！！！後は、すべてお前に任せる！！！！必ず、惑星ベジータの仇を取ってくれええええ！！！！！！！！」

バーダックが、叫び終わると同時にバーダックが天に掲げていた拳が力を無くし地面に落ちた。

そして……オレの分まで……生きる！！カカロット！！！！！！

その瞬間、バーダックの命の炎は

消えた。

S i d e : ザフィーラ

私の視線の先には我らが主のご遺体が安らかに眠っていた。
そして、それを見送るように我らは主を囲み涙を流し悲しんだ。
特に、ヴィータは主のご遺体にしがみつき声を上げ泣いていた。
主の名を何度も叫びながら……。
私は、自分の力の無さを恨んだ。

私は、主を守りきれず死なせてしまい、盾の守護獣としての使命を
果たせなかった自分に怒りを覚えた。

私は、主を死なせたフリーザを憎んだ。

「っ!?!?」

ザフィーラの中で自身の力の無さに対する恨み、守護獣としての使
命を果たせなかった怒り、バーダックを死なせたフリーザに対する
憎しみが込み上げ始めた。

すると、そこに

「ふふふ、猿にしてはなかなか泣ける芝居でしたね。…さあ、貴様
らもそこにいる猿と同じ所に送ってあげますよ!?!?!?!」
フリーザが、バーダックの事をバカにしながらシグナム達の前に下

「はあああああ！……！！！！！！」

バアアアアアアッ

「ぐはあっ！？」

フリーザの顔面を殴りつけた。

殴られたフリーザは岩をいくつも貫通しながら吹っ飛んでいった。

「す、すごい………。」

「ああ………しかし、一体ザフィーラの何処にあんな力があつたんだ？」

「そんなことどうでもいいよ！！でも、これならバーダックの仇が討てるかもしれない！！！！」

ヴィータが、ザフィーラにバーダックの敵討ちを期待したその時

「うっ！？……く、くううう！！！！！！」

突如、ザフィーラが呻きだしそれと同時に髪の毛が下がり、放出していたオーラも消えてしまった。

そして

バタンッ

ついには、ザフィーラは倒れてしまった。

「……ザフィーラ!?」「……」

シグナム達は驚き、ザフィーラに駆け寄った。

「大丈夫か!? ザフィーラ!!!!!!」

「……………」

シグナムが、呼び掛けたがザフィーラからは応答がなかった。

「シヤマル!!!!!!」

「わかったわ……………大丈夫よ、ザフィーラは気を失ってるだけみたい。」

シヤマルの診察の結果を聞いたシグナム達は安心した。

しかしその時

ドガアアアアンツ

「……っ!?」「……」

巨大な爆発が起きた。

そして、一筋の光が空に飛んでいった。

そこにいたのは

「……ぶつ、どうやらさっきの男は気を失ってしまったようですね。……
……ぶぶぶ、さあこれですべて終わりでしたよ!!!!!!」

先程、ザファイラの拳を顔面に受け吹っ飛んでいったフリーザであった。

そして、フリーザは腕を上に掲げ人差し指を伸ばした。すると、その指先にエネルギーが集まり

ゴオオオオオオツ

バーダックを殺したあのエネルギーボールを再びフリーザは作った。

その瞬間、シグナム達の間絶望感が漂った。

「どうやら……ここまでのようだな……。」

「ええ、そうね……。」

シグナムとシャマルは完全に勝機を無くしていた。

「ちくしょう、結局バーダックの敵討ち……できなかった。」

「しかたない、後は主のご子息に任せよう。」

悔しそうに歯をくいしばるヴィータを、管制人格が宥めた。

「死になさいっ！！！！クズ共がああ！！！！！！！！！！」

そして、フリーザは腕を振り下ろしエネルギーボールを放った。

「せめて、最後は主と共に……。」

その言葉を最後に、惑星ベジータは消滅した。

それと同時に、闇の書は次の主の元に転生していった。

現代

「そして、その次の主が主はやてだったと言うわけです。」
そう言つて、リインフォースは顔を上げ悟空を見た。

「そして、悟空……お前に一つ訊きたい。」

「……なんだ？」

「お前は、フリーザと戦つたのか？」

リインフォースは真剣な表情で悟空に訊いた。

「…オラはフリーザと戦つた。」

「そして、勝つたのか？」

「ああ、フリーザはオラがやっつけた。」

「…そうか!!」

悟空がそう答えると、リインフォースは涙を流した。

シグナム達も嬉しいのか涙を流していた。

第十九話未来を賭けた最終決戦！！バーダック&ヴォルケンリッターVSフリー

オッス、オラ悟空。

ついに、過去の話が終わりシグナム達もフリーザが倒された事に喜んでみてえだ。

そして、やっとオラ達にも平和がやって来たんだ！！！！

そして、オラとはやてとシグナム達はなのはの家に行く事になったんだ。

次回・魔法少女リリカルなのは S

高町家で戦闘開始！？シスコン高町恭也あらわる

「貴様は一体、なのはとどういう関係だ！！！！！」

ちよこつと豆知識

今回の話で、ザフィーラが変身した姿は超サイヤ人ではなく、擬似超サイヤ人と言うものです。

擬似超サイヤ人とは？

超サイヤ人に完全に覚醒しきっていない状態の事です。

劇場版「ドラゴンボール 超サイヤ人だ孫悟空」のスラッグとの戦いにおいて、悟空が変身していました。

髪の毛が逆立ち、金色のオーラを纏い、戦闘力が大幅に上がる所こそ超サイヤ人と同じですが、髪の毛や眉毛が金髪にならず、目も白目を剥き、超サイヤ人とは対照的に理性が失われます。

また、この変身は長時間保つことができません。

劇中では、悟空がスラッグを一時圧倒しましたが、スラッグの正体がナメック星人だと判明した直後に解かれてしまいました。

第二十話高町家で戦闘開始!?! シスコン高町恭也あらわる(前書き)

今回の話でなのはがまさかの……

第二十話高町家で戦闘開始！？シスコン高町恭也あらわる

しばらくして、シグナム達は落ち着き悟空達と話をしていた。

「本当にありがとう悟空！！フリーザを倒してくれて！！！！」

「もういいって、リインフォース。それに、オラもフリーザの事は許せなかったんだ。」

「それでもだ！！悟空、ありがとう！！！！」
「言っても、リインフォースは先程から悟空にお礼を何度も言っていた。」

「リインフォース。もうその辺にした方がええんちゃうか？悟空さんも困つとるようやし。」
「はやてがそう言つと、リインフォースはしぶしぶ席に戻った。」

「助かったあ〜！！サンキューはやて！！…さてと、もう一回食い直すすすつか！！！！」

「って、また食いはるんですか！？」

「あつたりめえだ、オラまだ腹四分目ぐれえしか食ってねえぞ！！！！」

そして、悟空は再びテーブルに置いてあったカツ丼の器を持ち箸で

中身を口の中にかき込み始めた。
すでに、悟空の後ろには400皿程の空になった器がまるで壁のよ
うに積み上げられていた。

そして、もう一人

「……………ザフィーラ…あんたもまだ……………食つんやね……………」

「……………はい。」

悟空の隣に座っているザフィーラの後ろにも悟空と同じくらいの皿
が積み上げられていた。

「でもなんでザフィーラだけなんや？リインフォース達は普通の量
しか食べれへんのに。」

「…そういやそうだな……………なんで、あたし達は普通なんだろう？」

「そうね…なんでかしら？」

はやて達が疑問に思っているとリインフォースが答えた。

「私達は確かにサイヤ人の能力を上書きされたが差があったようだ。」

「

「差？」

ヴィータが首を傾げて訊いた。

「ああ、ザフィーラはサイヤ人のすべてを、将達と私は戦闘能力だけを上書きされたらしい。」

「そうか！……でも、サイヤ人の能力とザフィーラの食欲にどういう関係があるんだ？」

「ヴィータが一瞬納得したが、また別の疑問が浮かび再び首を傾げた。

「ん？…ああ！！それならオラが教えてやつぞ！！」

首を傾げて唸っていたヴィータを見て、悟空が一旦箸を止めその答えを話した。

「サイヤ人つちゆうんは、とにかく一杯飯を食うんだ。…なんでかわかんねえけどな。」

そう言つと、悟空はまたカツ丼を食べ始めた。

「……やっぱ、なんでもありませんだ……サイヤ人って……」

悟空の答えを聞いたヴィータは、サイヤ人の出鱈目さを思い知った。

Side: 悟空

悟空とザフィーラが飯を食べ始めて約三時間後

「ふう〜！！食った食ったあ！！ごちそうさん！！！！」

「ああ、確かにカツ丼と言うのはなかなか美味だった。」
悟空は、食い終わると椅子にもたれ掛かり腹をポンポン叩いた。
対するザフィーラは、食い終わると口元をナプキンで拭いていた。

「二人共、よう食ったなあ……。」
はやてはため息混じりにそう言って、悟空とザフィーラの後ろを見た。

そこには、今にも崩れそうで、天井に届きそうなくらい高く積み上げられた器があった。

そして、数人の局員が必死に積み上げられた器を片付けていた。

「ははっ！オラ今回はずっと戦えばつかだったかな！！いつもよりすっげえ腹減っちゃってたみてえなんだ！！」
悟空が元気よく答えていると

「ちよつといいかしら？悟空さん。」
突然、リンデイが話し掛けてきた。

「ん？なんだ？」

「これから、少し悟空さんを検査しますんでついてきて頂けますか？」
「？」

どうやら検査を行うようだ。

悟空は、『検査』と言う単語にビクッと反応した。

「け、検査っちゅうと……ち、注射もするんか？」

「まあ、一応血液検査も行いますので……………」
リンディがそう言った途端、悟空はもの凄い速さで逃げ出そうとしたが

ガシッ

ザフィーラが悟空の首根っこを鷲掴みにして無理矢理止めた。

「嫌だあ！！オラ注射はしたくねえ！！注射だけはやめてくれえ！！！！」

ザフィーラに捕まりながらも悟空はジタバタ暴れた。
急な悟空の変貌に皆唾然としていた。

「悟空さんにも嫌いなもんがあつたんやな。」
皆が唾然とする中、そうはやてがポツリと呟いた。

その後、悟空はザフィーラに首根っこを掴まれたまま診察室へ連行されていった。
そして、数分後

「いつてええええええ！！！！！！！！！！」

診察室から悟空の断末魔の叫びが響き渡った。

S i d e : シグナム

「いててっ。」

「まったく…注射が怖いとはな……情けない。」

シグナムは、腕を擦っている悟空を見て呆れた様子で呟いた。

「仕方ねえだろ、シグナム。痛えもんは痛えんだからよ。」

悟空がそうシグナムに答えた時

「クロノ君!!悟空さんの検査結果出たよ!!!」

エイミイが何か書かれているボードを持ってやって来た。

「そうか……で、結果は？」

「う、うん…それが……すごい結果が出たんだよ!!!見てこれ!!!」

そう言つて、エイミイはボードを皆に見せた。

検査結果

筋力 S S S +

耐久力 S S +

俊敏性 S S -

「……………これは……………本当か？」

「これは本当の結果だよ！！何度もやり直したんだから！！！！」
啞然としていたクロノがエイミィに訊き、エイミィは少しムツとした様子で答えた。

「わ、分かったからそう怒るな。…それで、彼からはリンカーコアは検出されたのか？」

クロノはエイミィを宥めながら次の課題を訊いた。

「ああ！！そうだった悟空さんからリンカーコアは検出されたんだけど……………」

「だけど……………どうしたんだ？」

急に黙り込んだエイミィにクロノが訊いてきた。

「その……………まだ形成途中らしくてすごく不安定な状態だったんだ。しかも、それが原因で悟空さんの身体にリミッターが掛かっているみたいなんだ。」

エイミィがそう言った時、悟空が手をポンツと叩いて何か納得した様子で言った。

「そっかあ！！だからオラここ最近、身体が動かしくかったんか……………！！！！」

それを聞いたなのは達は驚いた。

「えっ！？それじゃ悟空さん、いままでの戦闘もまだ本気じゃなかったんですか！？」

「ん？ああ！！オラだったらもつとすんげえパワーが出せたと思うんだ。」

それを聞いたなのは達（ザフィーラ以外）は心の中で呟いた。

『（じゃあいままでの戦いは一体……。）』

Side：悟空

「ところでよ、リンカーコア…だったか？そいつは、いつ出来上がった？」

悟空は、エイミィにリンカーコアがいつ出来上がるのか訊いた。

「えっと……だいたい二、三日で安定してくると思いますよ。」

「二、三日か……まっ！！気長に待つとすつか……！！」

そう言っつて、悟空は立ち上がった。

「んじゃ、はやて！！そろそろ帰るか……！！」

「そうですね……ん？あれ？……うちなぐんか忘れてるよつな気が？」

はやては突然、何かを忘れていた事に気が付き唸り出した。
そこで、シャマルがあつと声を上げた。

「そうだわ!! はやてちゃん病院抜け出して来ちゃったんだわ!!
!!」

「!?!? そやったあ!?!? うち病院抜け出して来とんねやった!! 大
変や、石田先生に怒られてまう!!!!」

シャマルの言葉を聞いて、はやては慌てた様子で車椅子を動かす始
めた。

「そんなに怖えんか、石田先生つちゆうんは。」
悟空は、はやての慌てようを見て何気に訊いてみた。

「石田先生つて怒るとむっちゃ恐いんですよ!?! 早く戻らへんと悟
空さんも怒られますよ!!!!」

「いい!?! ホントか!! じゃ急がねえと……。」
そう言うと、悟空はガシツと車椅子の取っ手を掴んだ。

「へっ!?!?、悟空さん……ま、まさか!?!?……。」

「よし!! 思いっきり走って帰るぞ!!!!」

ブオオオオオオオツ

「やっぱりいいいいいい!!?!?」

悟空は車椅子を常人では有り得ない程のスピードで走りながら押し、はやては絶叫を木霊させながら行ってしまった。

取り残されたシグナム達は

「……はっ!? あ、主はやて!! 孫!! 待て!!!!!!」

「はやてええ!!!!!!!!!!」

「はやてちゃん!! 悟空さん!! 待ってください!!!!!!!!」

「我が主い!!!!??」

と、シグナム、ヴィータ、シャマル、リインフォースは叫びながらはやてと悟空のあとを追い掛けていった。
ちなみに、ザフィーラは

「…ふう〜……やれやれ……」。」「
ため息を出して高速移動でシグナム達のあとを追った。

そして、病院に着いたはやて達はこっぴどく石田先生に怒られたそう
うな。

S i d e : なのは

どうも、高町なのはです!!

私は今自分の家の前にいます。

実は私、お母さん達に私が魔導士である事と管理局に入りたいたい
いうことを伝えたいと思っています!!!!

ガチャンッ

「ただいま!!!!」

「あら、お帰りなさいなのは!!!!ずいぶん遅かったのね。」

「うん……ねえ、お母さん。」

「ん?なにどうかしたの?」

「うん!!皆に話したい事があって……」。

「……分かった。じゃあ、お父さん達呼んでくるから。」

そして、なのはは家族に自分が魔導士である事と管理局に入局したいという事を伝えた。

「……………そうか。」

なのはの父、高町士郎はなのはの話聞いて考え込んだ。

「それは……………なのはが決めた事なんだな。」

「…うん…！」

士郎の質問になのはは大きく頷いて応えた。

「そうか……………ならいいよ…！」

「ありがとう…！お父さん…！…！」

こうして、なのはは親に許可をもらい管理局に入局する決意をした。

「あつ…！…そうだ、お父さん…！…！」

「ん？なんだ？」

「明日、私の新しいお友達連れてきていい？」

「ああ、連れてきていいよ！！」

「じゃあ、ちょっと電話してくるね！！！！」

そう言っつて、なのははタタタッと走っていった。

「それにしても、なのはの新しい友達って一体どんな子なんだろう？
ねえ、恭ちゃん。」

なのはの姉、高町美由紀は自分の隣いた人物に質問した。

「さあな。まあ、なのはの友達なんだきつと良い子なんだろう。」

隣にいた人物もといなのはの兄、高町恭也はそう答えた。

Side: 悟空

「ふう〜、石田先生って結構おつかねえ人だったんだな〜。」

ジリリリリッ

「ん？誰からだ？」

突然、電話が鳴ったので悟空は受話器を取った。

「もしもし!!」

「【あっ!!悟空さんですか!!!!!!】」

「お?その声は………なのほか?」

「【はい!!私です、なのはです!!!!!!】」

悟空に訊かれ、なのはは受話器の向こうで元気に言った。

「で、どうしたんだ急に?」

「【実は、明日お父さん達にはやてちゃん達の事を紹介したいので私の家に来ていただけませんか?】」

「ん?たぶん大丈夫だと思うぞ。まあ、はやてにも訊いてみっからよ!!!!!!」

「【はい!!じゃあ、明日待ってますね!!!!!!】」
ガチャッ

そうお礼を言って、なのはは電話をきった。

「あれ?誰からだっ たんですか?電話。」

その時、タイミング良くはやてがリビングから顔を覗かせてきた。

「ああ、なのはからだったみてえだ。」

「あつ！…なのはちゃんからやっただんですか！…それで、なんて？」
はやては、可愛らしく首を傾げて訊いた。

「なんでも、明日なのはの母ちゃん達にはやての事紹介したいから家に来てくれってさ！…！！！」

「そっやっただんですか！…！！！」

「で、どうすんだ？」

「もちろん！！行きますよ！…！！！」

はやては、胸の前で握りこぶしを作り張り切っていた。

そして、あつという間に翌日

ちなみに、なのはの家に行くメンバーは悟空、はやて、リインフォース、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラである。

「よし！！んじゃ、行くとすつか！！！！」

「……って、悟空さんなのはちゃんの家場所知ってはるんですか？」

悟空が行く気満々いると、はやてがもつともな疑問を投げかけた。

「あっ！？……そういや、オラなのはの家知らなかったなあ。はははっ！！こりゃ、めえつたなあ！！！！」

ズゴオオオツ

悟空の今さら的な発言に、はやて達（ザフィーラ以外）はズッコけた。

すると、ザフィーラがため息混じりに呟いた。

「瞬間移動で行けばいいだろう。」

「あ、そっか！！その手があったなあ！！よし！！んじゃ、皆オラの身体を掴め！！！！」

悟空にそう言われ、皆それぞれ悟空の身体を掴んだ。

シグナムとリインフォースは肩に、ザフィーラは後ろから胴着の襟を掴み、シャマルは手を握り、ヴィータとはやてだけは大胆に悟空の脚に両手でしがみついた。

そして

シュンッ

悟空達は瞬間移動した。

Side:なのは

私は今、家の前で悟空さん達がくるのを待っている所です!!
……………待っているんですが……………

「ちょっと、なのは!!はやてはまだ来ないの!?!」

「まあまあ、アリサちゃん。」

さつきからアリサちゃんが騒いでいて、それをすずかちゃんが宥めています。

……………えっ?どうして二人がいるのかって?

実は、二人もなのはが呼んだんです!!

二人もはやてちゃんに会いたいらしいので、二人と一緒に待っています。

「…はやて達遅いね、どうかしたのかな?」

「大丈夫だよ、フェイトちゃん!!はやてちゃんの身に何かあっても悟空さんとザフィーラさんがついてるんだから!!!!!!」

「……うん!!そうだね!!!!!!」

ちゃんと、フェイトちゃんもいます!!!!!!
でも、本当に遅いな?」

なのはがそう思ったその時

シュンッ

「……あれ?」

突然、なのはの目の前が山吹色一色に染まった。

「なのは来たぞ!!!!!!」

そして、頭上から聞いた事のある声が聞こえ、おそろるおそろる視線を
上に向けて

「よっ!!!!!!!!」

悟空がなのはを見下ろしていた。

そして、突然の事になのはは

「にいあああああ!!!!!!?????」

思いきり驚きの声をあげた。

Side: 悟空

「にいあああああ!!!!????」

「うわあ!??ど、どうしたの!?!いきなりでっけえ声出して!?!びっくりしたあ。」

「それはこっちのセリフです!?!一体どうやって来たんですか!?!」

「どうやってって……瞬間移動で来ただけなんだけどなあ。」

「し、瞬間移動!?!」

『瞬間移動』という言葉になのはは啞然とし、後ろの方にいたフェイト達もいきなり悟空が現れた事に啞然としていた。

「おっ!?!アリサ、すずか!?!おめえ達も久しぶりだな!?!!」
悟空に話し掛けられ、最初に復活したのはアリサだった。

「ちょ、ちよつと!?!瞬間移動つてなによ!?!あんだ、超能力者が何か!?!」

「オラ超能力者じゃねえサイヤ人だ。」

「どっちでもいいわよ!?!そんなの!?!!」

「いや、おめえが訊いてきたんじゃねえか…（オラこつこつヤツ苦手だぞ。）」

そして、なのは達に宥められながら数分後アリサも少しずつ落ち着きを取り戻してきた。

「そういえば……。」

ふう〜、やっと解放された〜!!

アリサの尋問から解放され悟空はホッと胸を撫で下ろした。

「はやて、あんたと会うのは久しぶりよね!!」

「そうやね!!」

アリサの問いに、はやては元気良く答えた。

「はやてちゃん!!お母さん達にはやてちゃんを紹介したいから家に入って!!!!!!」

「そうやな!!じゃあ、お邪魔します!!!!!!」

「どつぞ〜!!!!」

なのはに促されはやて達は喫茶店『翠屋』に入ってしまった。

Side：士郎

カラントツカラントツ

どうやら、なのはが戻ってきたようだな。

「おかえり！！なのはー！！」

「ただいまー！！！！」

おや？人数が増えてるな………ああ！！あの子なのはの言っていた新しい友達かー！！！！

そして、士郎は数人分のケーキと飲み物を用意してなのは達が座っているテーブルに持っていった。

「どうぞ。」

「どうもありがとうございますー！！！！」

士郎ケーキと飲み物を置くとはやてがお礼を言った。

「君が、なのはの新しい友達だねー！！これからもなのはの事よろしく頼むよー！！！！」

「い、いえ!!こちらこそよろしく願います!!!!!!」
はやては突然、士郎になのはをよろしく頼むと言われ慌てて言葉を返した。

「ふふっ、そんなに畏まらなくてもいいよ!!じゃあ、なのはお父さんちよつと店の片付けをしないといけないから、また後で。」

「あっ!!..なのはも手伝う!!!!!!」

「いや、いいよ。ゆっくりしてなさい。」
そう言つと、士郎はキッチンに戻つていった。

Side:悟空

パクッ

「ん〜!!こりゃ、うめえ!!オラこんなにうめえケーキ食つたの初めてだぞ!!!!!!」

悟空は、士郎が置いていったケーキをさっそく食べていた。

「...あれ?ザフィーラ、おめえ食わねえんか?」

悟空がザフィーラの方を見ると、ザフィーラはケーキに一切手をつけておらず紅茶を飲んでいた。

「ああ、甘いものはあまり食べないからな。俺はこれだけでいい。」

「そっか！ーんじゃ、オラがもらってや「もらったあ！ー！！」あ
あ！？ヴィータ、そいつはオラが食おうと思ってたんだぞ！ー！」

「へっへーん、早い者勝ちだよ！ー！悟空！ー！」

悟空がザフィーラのケーキをもらおうとしたその時、横からヴィータがそのケーキを横取りした。

ちなみに、ヴィータも一皿目はすでに完食している。

「でも……どうしても食べたいなら、半分あげる！ー！！！」

そう言うと、ヴィータはおもむろにケーキをフォークで半分にして片方にフォークを刺して悟空に差し出した。

そうこれは

「あ、あ~~~~ん／＼／＼／＼／」
で、ある。

ヴィータは、顔を真っ赤に染めながら悟空にケーキを差し出している。

だが悟空は

「ホントか！？ははっ！！サンキュー、ヴィータ！ー！！！」

パクっ

なんの恥じらいもなくヴィータが差し出していたケーキを食べた。

Side:ヴィータ

「ホントか!? ははっ!! サンキュー、ヴィータ!!!!」

パクッ

あっ!? 悟空が食べてくれた。

や、やった!! 悟空に食べてもらった!!……ちょっと、恥ずかしかったけど……。

そ、それにこれで悟空と…か、かか間接キスしちゃった。

そう思った途端

ボンッ!!!!!!

と言う効果音が出るくらい、ヴィータの顔が一気にこれでもかと言うくらいさらに真っ赤になった。

S i d e : 悟 空

「ん?…おわあ!?! ヴィータ!! おめえ大丈夫か!! 顔真っ赤だぞ
! ! ! ! !」

「えっ!?! い、いや大丈夫だよ悟空!! 何でもないよ!!」
ヴィータがそう言ったが、

「ちいと、じつとしてるよ。」

ガシッ

「じ、じご悟空!?!」

悟空は、いきなりヴィータの両方の頬に手を添え、顔を近づけ、
ピタッ

「…あれえ〜? 熱じゃねえみてえだな。おつかしいなあ。」
ヴィータのおでこと、自分のおでこをくっつけ熱を計った。
しかし、熱がない事に悟空は不思議に思った。

そんな悟空をよそに、ヴィータの顔はさらにさらに真っ赤になりつ
いには

「きゅっ〜」。

「あ、あれ!?! おい、ヴィータすっかりしろ!?! おい!?! おい!?!」
ヴィータは、目をくるくると回してしまった。

よ、よっしゃー!!これで、うちも悟空さんとか、かかか間接キスをしたんやー!!

……あ、あかん!!どうしても意識してまう!!……!!

「サンキュー、はやて!!うまかったぞ!!……!!」

悟空はそう言つと、はやての頭を撫でた。

「い、いえ……。／＼／＼／＼」

はやては、顔を赤くしながら頷いた。

その時

「……悟空さんって、結構鈍感なんだね……。戦闘の時はかっこいいのよ。」「

と、なのはが小さく呟いたそうなの。

Side:悟空

数分後

「うう、あれ?あたしどうしたんだっけ?」

目を回していたヴィータが元通りになった。

「おっ!!……やっと起きたかヴィータ!!オラ心配したぞ!!……!!」

「う、うん！！大丈夫！！／＼／＼／＼」
悟空に話し掛けられ、先程の事を思い出したのかヴィータは頬を赤らめながら答えた。

その時、

「なのは、お待たせ。」

「あつ！！やつと来た！！！！」

なのは以外の高町家メンバーが店の片付けを終え戻ってきた。

「はやてちゃん！！紹介するね！！こっちがお父さんとお母さん！！！！」

「高町士郎だ、よろしく。」

「高町桃子です、よろしくねはやてちゃん。」

士郎と桃子は、微笑みながらはやてに自己紹介した。

「で、こっちがお兄ちゃんとお姉ちゃん！！！！」

「高町恭也だ。なのはの事をよろしく頼む！！」

「次は私！！私は高町美由紀！！なのはの事よろしくね、この子意

外とドジッ子だから!!」

「もう、お姉ちゃん!!!!!/!/!/!/」

恭也と美由紀もはやてに自己紹介をした。

そして、美由紀の言葉になのはは、顔を赤くさせながら怒った。
まったく恐くないが……。

「いえ、こちらこそどうも。次はこちらの番ですね。うちは八神はやてって言います!!!!で、こっちが……。」

「シグナムと申します。以後、お見知りおきを。」

「……ヴィータ……。」

「私は、シャマルと言います!!」

「リインフォースです。」

と、女性陣が自己紹介を終え

「次は、オラ達の番だな!!!!!!」

次に悟空とザフィーラの男性陣の番になった時

ギンッ

突然、恭也の目付きが鋭くなった。

「オラ孫悟空つてんだ!!!よろしくな!!!!!!」

「俺はザフィーラだ。……よろしく。」

悟空の元氣一杯な自己紹介とは対象的に、ザフィーラは物静かな自己紹介をした。

「ああ、あなたが孫悟空さんですか!!!なのはから貴方の話をよく聞きました。武術の達人だそうですね。」

悟空達が自己紹介をすると、士郎が話し掛けてきた。

「いや、達人っちゅうんはちょっと言い過ぎだぞ。」

「そちらの方のことも。」

「俺の事か?」

「はい、ザフィーラさん貴方もかなりの武道をお持ちだそうですね。」

「それほどでもない。それに、俺はまだまだ強くなるつもりだ。…

悟空、お前を越えるぐらいな。」

ザフィーラは、悟空を見ながらそう言った。

「へへっ!!そいつは、楽しみだな!!ぜってえ、強くなってくれよな!!!!!!」

「当たり前だ。」

悟空の言葉に、ザフィーラはニヒルな笑みを浮かべ答えた。

「あっ、そうだ!!おい、なのは「『なのは』だと!?!」うわっ!?!なんだおめえ、びっくりするじゃねえか!!!!!!」

悟空がなのはを呼んだその時、突然恭也が声を上げた。

「き、貴様!?!何故なのはの事を名前で呼んでいるんだ!!!そして、貴様はなのはとどういう関係なんだ!?!」

「…いや、名前を言うのは変な事じゃねえぞ。それに、オラはなのはとは『友達』だ。」

「悟空さん……。」
なのはは、悟空が自分の事を『友達』と言ってもらい嬉しそうに笑った。

「ま、またなのはの事を呼び捨てに……もう我慢できん!!!貴様、道場に来い!!!!!!」

そして、所変わって…高町家の道場

ちなみに、見学メンバーは道場の端の方に座っている。

「ふっ!!はあっ!!」

ブオンッ ブオンッ

恭也は、木刀を二本持ち素振りをしていた。
対する悟空は

「おいつちに〜さんし〜!!に〜に〜さんっし〜!!」
かけ声を言いながら、軽い準備体操をしていた。

「ごめんなさい悟空さん。お兄ちゃんのせいで……………」

すると、なのはが突然悟空に謝ってきた。
どうやら、こんなことになってしまった事に罪悪感を感じてしまっ
ているようである。

しかし、悟空は怒る事もせず逆に

ポフッ

「ははっ!!気にすんな!!それによ、おめえは悪かねんだから
よ別に謝んな。」

なのはの頭の上に手を乗せ笑いながらそう言って、なのはの頭を優
しく撫でた。

S i d e : なのは

なのはは、悟空に頭を撫でられ気持ち良い気分になった。

ああ、悟空さんに頭を撫でてもらうと落ち着くな。いつも撫でてもらってるはやてちゃんとヴィータちゃんが羨ましいよ。

そう思っていたが

「おい！！貴様、何故なのはの頭を撫でているんだ！！ゆ、許さん！！早く来い！！！！！！」

「おう、分かった！！じゃ、後でな。」

そう言っつて、悟空はなのはの頭から手を離れた。

「あっ……………」

すると、なのはは残念そうな声を漏らした。

もっと撫でて欲しかったのに…………むう、お兄ちゃんのバカ……………
後でお兄ちゃんには…………O H A N A S I が必要かな。

S i d e : 恭也

「用意はいいか？貴様！！！！！！」

「ああ、オラはいつでもいいぞ。……………それとよ……………」

「なんだ？」

「間違っても手加減だけはしねえでくれよな。」

「ふん！！誰がするか！！！！！！」

「そっか！！んじゃ、さっそく始めるとすっか！！！！！！」

「そっだな！！さっそく始めよう！！！！！！」

そう言つと、恭也は腰を落とし低い姿勢で構えを取つた。
しかし、悟空は

「貴様！？何故構えない！！俺をなめているのか！！！！！！」

「いや、別になめちゃいねえさ。それよりどうした、かかって来ねえんか？」

構えを取らず立っているだけであつた。

「では、こっちからいかせてもらつろぞ！！！！！！」

恭也は素早く近付き

「はあっ!!」

ブオンッ

右手の木刀を横薙ぎに振った。
だが

スカッ

悟空は、腹を退かせ紙一重で避けた。

「(なに!?!…くっ、これなら……)。」

恭也は、一瞬動揺したがすぐに冷静になり左手の木刀を

「(どうだ!!!!)」

ブオンッ

悟空の首筋目掛け振った。

スカッ

「っ!?!」

しかし、悟空は上体を後ろに反らしこの攻撃も紙一重で避けた。

そして、恭也は一心不乱に悟空に連続攻撃を繰り返すが

ヒュンッ ヒュヒュンッ バシッ

悟空は、その攻撃をすべて避け続けた。
そして、時折恭也の木刀を手刀で弾き返したりしていた。

Side：見学メンバー

「す、すごい……。」

悟空と恭也の戦闘を見ながらなのはが呟いた。

はやて達も恭也の戦闘能力に唖然としていた。

しかし、ザフィーラとリインフォースだけは冷静に観戦していた。

「悟空の奴、相手の力量を測っているな。」

ザフィーラが悟空の行動を見て、眉間にシワを寄せながら呟いた。

「ああ、だが高町なのはの兄もそろそろ本気のようにだ。」

リインフォースが目を鋭くさせ、恭也を見ながらそう呟いた。

Side：恭也

恭也の剣術『小太刀二刀御神流』はかなり強力で、しかも恭也は超一流の剣術家でもあり、おそらくは世界でも指よりの実力者である事は確かである。

しかも先ほどからの連激は無駄な動きもなく避ける事も防ぐ事も難関なはずなのだが、悟空は小さな動きでかわしたり手刀で弾いたりしている。

この男、丸腰のくせにに全く隙がない!!……こうなったら仕方がない!!……!!

恭也は悟空から離れるように後ろにバックし………木刀を構えた。

「御神流!!『斬』!!……!!」

そして、先程とは比べ物にならない程の速さで近付き、右手の木刀を目にも止まらぬ速度で悟空に振り下ろした。

スカッ

だが、悟空は素早く左にダッシュするかのようにして避けた。

「なに!?!」

「これは!!……!!」

まさか『御神流』の一つである『斬』を初見でかわした悟空に恭也だけではなく士郎も驚いた。

馬鹿な!? 基本動作の中の初歩技とは言え、御神流の一つを容易くかわすとは……!!……!!?

その瞬間、恭也は理解した。
悟空の身体能力が異常なまでに高い事を。
それでも恭也は引かず悟空を攻めた。

「ならば、御神流!! 『虎乱』!!!!!!」
御神流の技の一つ。二本の木刀から放つ連撃が炸裂するが、悟空は
さすがに全部はかわせないと判断したのか

ババババアンツ

全てを手刀で防いだ。

Side:なのは

「うわぁ……………やっぱり悟空さん凄いや。お兄ちゃんの剣を全部か
わして防いでいる……………」
悟空の強さはなのは自身が身をもって体験したが、この戦闘を見て
なのは再び悟空の強さを実感した。

それに、今の悟空さんすごくかっこいい!!!!!!

Side：悟空

「どうした？おめえ、もうバテたんか？」

「いい気になるなよ！！！！！」

すると、恭也は先程とは違い思いつきり大きな構えを取った。

「小太刀二刀御神流！！奥義之極み！！『閃』！！！！！！……貴様を殺す！！！！！！！」

「いい！？オラさすがに殺されちゃ困るぞ！！！」

ツッコむ悟空をよそに、突如恭也の姿が消えた。

そして、神速の領域の速さで悟空に気づかれないと判断して素早く二本の木刀を同時に神速の速さで振った。

だが

ズドバアアアッ

「なん……だと……！？」

奥義之極みを放った恭也は驚いた。

二本の木刀は同時に悟空目掛け振ったが、悟空は両腕で二本の木刀を受け止めたのだ。

「ま、まさか………小太刀二刀御神流奥義之極み『閃』を防いだのか！？」

これにはさすがの土郎も驚きを隠せなかった。

「わりいな!!今度はオラの番だ!!!!!!」

そう言うと、悟空は二本の木刀を放すように力強く弾き返すと恭也はその衝撃で後ろに思わず後退した。

その隙に悟空が恭也に鋭い蹴りを放った。

豪快で力ある蹴りに恭也は咄嗟に反応してなんとか防いだ。

しかし

「まだまだあ!!!!!!」

悟空の猛撃はこれからであった。

「だりやりやりや!!!!!!」

悟空は、恭也に片方の拳で連撃を浴びせた。

「ぐううう!!?(なんて速く…重い攻撃だ!!!)」

恭也は、木刀を×の形にクロスさせ防いでいた。

「はああっ!!!!」

バアアンツ

だが、悟空は下から防御していた木刀を蹴り上げ守りを崩した。

「しまっ!?!」

「だりやあっ!!!!!!!!」

ズドオンッ

「あぐあっ!?!」

そして、身体を捻り回転させがら空きになった恭也の腹に蹴りを叩き込み後ろに吹っ飛ばした。

さらに、悟空は舞空術で床すれすれを滑るよう移動し吹っ飛んでいく恭也の背後に回り込み

「そおれっ!?!?!」

バキィインッ

「がはあっ!?!」

ラリアットを繰り返し床に叩きつけた。

恭也はそのまま起き上がらなかった。

「ふう〜、終わった終わった!?!?!」

そう言っつて、悟空ははやて達の方に向かっていった。

「悟空さん!! 凄〜い かつこい〜」

なのはが悟空にそう褒めた時、

ピクッ

先程まで起き上がらなかった恭也が突然起き上がり、殺気が溢れた。

「貴様だけは!?!?! 命の欠片も残さん!?!?!?!」

そう叫ぶと、高速移動並のスピードで近付き悟空の背後から木刀を振り下ろした。

「あぶねっ!?!」

突然の事に反応した悟空は横に跳びその攻撃を避けた。

が

恭也が振り下ろした先には

「しまった!?!はやて!!逃げろ!!!!!!」
はやてがいた。

「きゃああつ!?!」

はやては咄嗟に目を瞑り身を屈めた。
そして、その攻撃がはやてにあたる

バキッバキッ

事はなかった。

「……あれ?」

はやては、痛みが来ない事に疑問を感じおそるおそる目を開けると
恭也の木刀が根元から折られその折れた部分は宙を回転しながら舞
っていた。

木刀を折った人物とは

「ザフィーラ!!リインフォース!!」

はやての家族であるザフィーラとリインフォースであった。

「我が主には……………」

「指一本触れさせん……………」

そう言うと、ザフィーラは右腕をリインフォースは左腕を振りかぶり

「……………」

バガアアアアンツ

二人は、恭也の顔面にダブルストレートをめり込ませた。

「ぶるあああつ……………」

そして、恭也は二人のダブルストレートをもろに喰らいぶつ飛ばされ壁に激突して気絶した。

「うつひゃ……………すんげえパンチだな……………ん？」

悟空が、二人のダブルストレートに驚いている時、悟空は落ちてきた木刀の破片に気付いた。

そして、その先に……………なのはが座っていた。

「なのは……………あぶねえ、上だ……………」

「ふえっ……………」

なのはは悟空にそう言われ、上を見て木刀の破片が自分に迫っているのに気付いた。

「にゃあああ!?!」

「なのは!?!?!」

シュッ

悟空は咄嗟に高速移動を使いなのはの元に移動し

ダキッ

なのはを抱き上げ、その場からさらに高速移動で離れた。
そして

カラアアンッ

ワントンポ遅れて木刀の破片がなのはの座っていた所に落下した。

「ふう〜、大丈夫だったか?.....あれ?」

悟空がなのはに安否を訊いたが答えが返ってこないのを不思議に思
い視線を下げると

「むぐっ!?!むぐぐっ!?!?!」

ドンッ ドンッ ドンッ

無意識なのか悟空はなのはをしっかり抱いていたため、なのはは
悟空の遅しい胸板に顔を押しつける形になり苦しそうにもがきなが
ら胸板をドンドン叩いていた。

「あつー！わりい、なのは！！！大丈夫か？」

「ひゃ、ひゃいー！らいじょうぶねす。」

解放されたなのは呂律が回っておらずその上、目がトロンとして頬が若干赤く染まっていた。

Side:なのは

ご、悟空さんに……抱き締められちゃった！！！！！

その上悟空さんのむ、胸に顔を押しつけちゃった！！！！！

でも……いやじゃなかった。むしろ……う、嬉しい。

それに、悟空さんの身体ってすごくいい匂いがするんだな。えへへー！！

「おい、ホントに大丈夫か？」

「ひゃ、ひゃいー！！」

なのはが自分の世界に入りそうになった時、悟空に話し掛けられ現実世界に戻された。

「ホントに大丈夫か？ヨダレ垂れてっぞ。」

「じゃあああ!?!」

悟空にそう言われ、なのはは奇声を上げ口元をゴシゴシと拭った。

「だ、ただ大丈夫です!! 本当に大丈夫ですから!!!!」

「ホントか?.....ま、いつかあ!!!!」

悟空はそう言うと、なのはを下ろした。

「あつ!! はやて、おめえも大丈夫だったか?」

すると、悟空は思い出したかのようにはやての安否を訊いた。

「はい、大丈夫です!! ザフィーラとリインフォースが守ってくれ
はりましたから!!!!」

「そっか!! んじゃ、そろそろ戻ろうぜ!! オラ腹減っちゃった!
!!!!」

悟空はポンポン腹を叩きながらそう言った。

「でしたら、ぜひ私達の家で食べていってください。なのはを助け
てくれたお礼もしたいですし。」

「ホントか!?! いや、わりいな士郎!!」

「いえ、いいんですよ。」

「よし！…じゃ、行くかはやて！…！」

「はい！…」

はやては返事をする、悟空のあとに車椅子を動かしていった。

こうして、悟空達は高町家でごちそうになり、高町家の皆は悟空の異常な食欲に目を丸くしたのは言うまでもない。
そして

高町家 玄関前

「ありがとな、土郎！…飯食わしてもらったまってる！…！」

「いいんですよ、お礼なんですから！…！」

「それに、桃子おめえの料理すんげえうまかったぞ！…！」

「ふふっ！…ありがとございます悟空さん……ほら、なのはも何か言ったら？」

「うん。うん。」

桃子にそう言われ、なのはは悟空の前に出た。

「あ、あの！！悟空さん、もし良かったらまた家に遊びに来てください！！……！」

「ああ！……でも、たまにはおめえもはやてん家に遊びに来いよな！！そのときは、歓迎すつからよ！！……！」

「は、はい！……！」

なのはが返事をするのと同時に、なのはの頭に悟空が手を置いた。

「じゃ、またな！……！」

そう言うと、悟空はなのはの頭を撫でた。

Side:なのは

「悟空さ〜ん！！絶対、また来てくださいね〜！……！」

「ああ！……またな〜！……！」
なのはは手を振りながら帰っていく悟空に思いっきり手を振り返していた。

おまけ

悟空達が帰った後

「うう。。。」

道場の壁に激突して気絶していた恭也が目を覚ました。

「く、くそ!!今度こそ、あいつを殺してやる!!!」
打倒悟空という目標を恭也が掲げたその時、恭也の前に人影が現れ視線を上げると

「な、なのは!?!」

目の前にいた人影なのはであった。

しかし、なのはの背後には黒いオーラのようなものが出ていて目元が前髪で隠れていた。

「お兄ちゃん、今度は私とO H A N A S I Iの時間だよ。」
そう言っつて、なのははレイジングハートをセットアップさせ、杖の先端を恭也の顔の前に構えた。

「ま、待て!?!どうしたんだなのは!?!!」

恭也は、顔を真っ青にさせ訊いたがなのはは無言のまま杖の先端に魔力を収束させ始めた。

「……………ディバイン……………」

「ま、待て!?!は、話せば分か……………」

「バスター……！！……！！」

ズバアアアアアッ

「ぎゃあああああつ……！！……！！……！！……！！」

その日、道場に大きな爆音と恭也の断末魔が響いた。

第二十話高町家で戦闘開始！？シスコン高町恭也あらわる（後書き）

オッス、オラ悟空！！

恭也との戦闘から二日経ってついにオラにもリンカーコアっちゅうものが出来上がった！！

そして、シグナム達に魔法の使い方を教えてもらう事になったんだ！！

でも、ある日リンディからある提案を持ち掛けられたんだ。

次回・魔法少女リリカルなのは S

悟空が就職！？その名も囑託魔導士！！！！

「食卓魔導士？なんかつまそうな仕事だな！！！！」

第二十一話悟空が就職！？その名も囑託魔導士！！

はやて達が高町家に訪れ、悟空が恭也との戦闘から早くも二日が経った。

そして、この日は

「ふう〜、やっとオラにもリンカーコアが出来たぞ！！！！！」

「良かったですね、悟空さん！！！！！」

「ああ！！！！！」

悟空にリンカーコアが出来上がる日なのだ。

「…あつ！？でも、オラ魔法ってどうやって使うんか分かんねえな。」

そう言つと、悟空は腕を組み、う〜んと唸つた。

そんな悟空を見てはやてがある提案をした。

「せやったら、シグナム達に教えてもろうたらどうですか？」

「そつかあ！！確かにシグナム達ならいろいろ知ってそうだもんない！！……あつ、それだったらはやても一緒に修行しねえか？」

「えっ！？良いんですか？」

「良いに決まってるじゃねえか！それに、そろそろはやても身体動かさねえと太っちまうぞ！……！」

悟空の言葉を聞いた途端

「悟空さん！？レディに向かってそんな事言っちゃ失礼ですよ！！

……！」

はやてがすごい剣幕で悟空に注意した。

「わ、わりい！？」

「…分かればいいんですよ。」

悟空が咄嗟に謝罪するとはやてはいつも通りのようにニッコリと笑って許した。

そして

とある次元世界

現在、悟空とはやてはシグナム達守護騎士と共に次元世界に来ていた。

ついでに、なのは、フェイトも一緒に来ている。

「よし！！じゃあ、シグナムオラに魔法の使い方教えてくんねえか

……！！」

「ああ、初めからそのつもりだ。……だがその前に、孫お前は魔力

をコントロールできるのか？」

「…あつ！？そついやそつだな。う〜ん……………」
シグナムにそう言われ、悟空は考え込んだ。

「ねえねえ、悟空。」

「ん？どうしたんだ、ヴィータ。」
悟空が考え込んでいると、ヴィータが胴着をクイクイツと引つ張ってきた。

「とりあえず、ザフィーラみたいに全身から放出してみたら？」

「そつか！…よし、いっちょやってみつか！…！んじゃ、ヴィータあぶねえから下がってる！！」

「うん！…！！」

そう言つて、ヴィータは悟空から離れた。

そして、悟空は腰を落とし拳を握りしめ構えて全身に力を込めた。

「ふん！…ぐ、ぐぐぐつ…！…ぎぎぎつ！…！」

すると、悟空の身体から僅かにだが少しずつ魔力が漏れ始めた。

「はあああああつ！…！…！…！」

悟空が雄叫びを上げたその時

ドオオオオオオンッ

いきなり魔力が全開放出され悟空を中心に巨大なクレーターが作られ、周りの地面を抉り飛ばした。

ザフィーラは、空中に上がり難を逃れたが

『うきやあああああつ!!???』

女性陣達は、突然の事に対処できずにそのまま吹っ飛んでいつてしまった。

「ふう〜、よし!!こんな感じか?.....あれ?.....。」

悟空は、魔力を思いきり放出して出来栄えを訊こうとしたが周りを見て首を傾げた。

それもそのはず、悟空の周辺は何もなく皆も吹っ飛ばされ誰もいなかった。

「みんな...どこ行ったんだ?」

「...悟空、お前が皆を吹っ飛ばしたからだ。」

悟空が首を傾げていると、ザフィーラが空中からゆっくりと下りてきた。

「えっ!?!?そうなんか!!...あちゃ〜、そりゃわりい事しちゃったな。」

「そう思っのだったら、すぐに探しに行くぞ。」

「ああ、そうだな!!」
そう言つと、二人ははやて達を探すためその場から飛び立っていった。

Side:はやて

砂と岩だらけのまるで砂漠のような場所で

ムクッ

突然、砂が盛り上がりモゾモゾと動き出した。

そして、そこから

「ぶはあく!!酷い目にあつたわ!!!!」

はやてが顔を出した。

そして、はやての周りの砂もモゾモゾと盛り上がり始め

「ふう〜、それにしても悟空凄かつたねなのは……………って、なのは
大丈夫!?!」

「うえ〜ん、口の中に砂が入っちゃつたよ〜。」
目尻に涙を溜めながらなのはは起きあがったが、砂が口に入ったらしくしきりにぺっ、ぺっと砂を吐き出していた。

それを、フェイトが心配そうな表情で見つめていた。そして、さらに三つほど砂が盛り上がり

「……まったく、孫の奴は本当に仕方がないな。」

「うええっ……あ、あたし何だか気持ち悪い……。」

「ヴィータちゃん！？だ、大丈夫！！！！」

シグナム達も砂の中から出てきた。

しかし……リインフォースの姿だけが見当たらない。

「あれ、なあリインフォースは何処におるん？」

なのは達は、はやての言葉を聞くとキョロキョロと周りを見回した。

「いませんね。……まったくあいつは一体どこに……ん？」

シグナムが呆れていると突然、彼女は急に黙り込みある一点を凝視していた。

「……どうしたん？シグナム。」

「あの……主はやてが乗っかっているのは……。」

「乗っかつとる？」

不意にはやてが視線を下に向けると

どこかで見えた事のある黒色のバリアジャケット、どこかで見えた事の

ある長い銀髪を周りに散乱させた女性がはやての下敷きになっていた。

「あああ！？リ、リインフォース！！！」

はやては驚きすぐにリインフォースの身体を抱き起こした。

「リインフォース！？お願いやから、目を覚まして！！！！！」

「ううっ……あ、あれ……こっは？」

「よ、良かった〜！！目覚ましてくれたんやね！！！！！」

そう言つて、喜びながらはやてはリインフォースに抱きついた。

「い、一体どうされたんですか？我が主。」

リインフォースが頭に？を浮かべていると

「お〜いつ！！大丈夫だったか〜？」

「あつ！！悟空さんとザフィーラや！！！！！」

突然、声が聞こえはやてがその方に目を向けると悟空とザフィーラがこちらに飛んできているのが見え、

スタッ

「大丈夫ですか？主。」

「いや、すまねえオラちよつと力が入り過ぎちまって……!!」
はやて達の前に着地した。

「孫、こっちに来い。」

「ん？なんだ、シグナム。」

シグナムに言われ悟空が寄ると

ゴツッ

「まったく、バカモンが!!」

シグナムは悟空の頭に拳骨を喰らわした。

「いつてええ！？な、何すんだよシグナム!!」

「それは、こっちのセリフだ。もし主はやてに大怪我を負わしたら
どうするつもりだ!!」

「だから、さつきから謝ってんじゃねえか。」

すると、シグナムと悟空は口喧嘩を始めた。

もともと、悟空がシグナムの剣幕に押されながら……………。

「まあまあ、シグナムそれぐらいにしとき。悟空さんも、うちは別に怒ってませんから。」

口喧嘩をしている二人にはやてが真ん中に入り制裁した。

「……………そうですね。」

「サンキュー、はやて!!助かったぞ!!!!!!」
はやてに言われ、シグナムは悟空への説教を渋々止め、悟空は嬉し
そうにはやてに礼を言った。

「孫!!なんだその態度は!?!やはり、お前にはもっと説教が必要
のようだな!!!!!!」

「いい!?も、もう勘弁してくれよシグナム!!!!!!」
そう言っつて、悟空は逃げ出し、シグナムはそれを追いかけていった。

S i d e : 悟 空

あの後、悟空はシグナムに捕まり小一時間程説教を受け、やっと解
放された。

そして、悟空は次に攻撃魔法の練習をしていた。
ちなみに、現在の指導係はなのはとフェイトである。

「じゃあ、悟空さん!!まず、魔力でこのように魔力弾を形成して
みてください。」

「分かった！……！」
そう言うと、悟空は魔力弾を形成するために右手に意識を集中させた。
すると

シューシューシュー

少しずつだが、右手に魔力が収束され始めた。
そして

ブオオンッ

「よし！！出来たぞ！！！！！」
悟空の右手になのはと同じ魔力弾が形成させた。

「すごいですね、悟空さん。こんなにあっさり出来ちゃうなんて。」
「そっか？……まっ、いいや！！それで、次はこいつをどうすんだ？」

「は、はい！！次はですね、この作った魔力弾を撃ち出す訓練です。
えつと〜……………」
なのはは、キョロキョロと周りを見て手短かな岩を見つけそれに狙いを定め

「こんなふうに……………！！！！！」

ズキュンッ

ボゴオンッ

それ目掛けて撃ち出した。

そして、当たった所は軽く陥没していた。

「す、すっげえ!!……よし、オラも!!……!!」

なのはの手本を見た悟空は、形成した魔力弾を握りまるで野球のような形で振りかぶり投げようとした。

だが

「でりゃあああっ!!……!!」

ツルッ

「あああ!?!」

悟空は投げる寸前に砂に足を取られ滑った。

さらに、バランスを崩したため魔力弾はあらぬ方向にいき

「「にゃあああっ!?!/きゃあああっ!?!」

なのはとフェイトに当たりかけた。

そして、そのまま魔力弾は空中で円を描きながら飛んでいき地面に落下したが

ドガアアアアアンツ

まるで核爆弾が投下されたかのような大爆発が起こり、キノコ雲が立ち上っていた。

それを見たのはとフェイトはあんどりと口を開けて固まっていた。そして、悟空も突然の事に思考が停止してしまった。

「は、ははは！！オラちょっと魔力つちゅうもんを込めすぎちまっ
た見てえだな！！！！」

はははっ！！と悟空は笑いながら頭をポリポリ掻いていた。
しかし、なのは達は悟空の言葉が聞こえていないのか未だに口をあんどりと開けていた。

だが、少ししてなのは達がプルプルと震え始めた。

「お、おい大丈夫か？なのは、フェイトおめえ達なに震えてんだ？
悟空がそう言っと、なのは達は振り返り

「ふえええんっ！！！！」

ドンツ

「うおっ！？」

二人同時に悟空にしがみついた。

「く、悟空さん！？何なんですか！？い、今の！！！！」

「も、もしあれに当たってたなら、私となのはは……………！？」

「「ふえええんっ！……！！！！！！！！」」

……どうやら、二人共悟空のあの魔力弾の破壊力に怯えてしまったようだ。

「わりいわりい！！ほら、もう大丈夫だからよ泣くな泣くな！！！！」

悟空は、泣き続けるのはとフェイトに謝り二人の頭を撫でた。

「「ぐすっ……。。」」

「よし、泣き止んだな！！じゃ、なのは早く次の訓練始めてくんねえか？」

「は、はい！！分かりました！！！！！！」

そして、悟空はなのはとフェイトから収束砲、バインドなど様々な技を伝授された。

そんな修行の日々を送っていた悟空にある日

ピポピポピ

「ん？なんだこの音？」

「あっ！！通信ですね……はい！！なのはです……！」

『なのはさん、リンディです。』

突然、リンディからの通信が入ってきた。

「リンディさん、どうかされたんですか？」

『今、そっちに悟空さんはいるかしら？』

「はい、いますけど……。」

「ちょっと、呼んでくれないかしら？」

「分かりました、悟空さ〜ん！！！！こっちに来てくださ〜い！
「……」

「ん？おお……！」

悟空は呼ばれ、なのはの近くに飛んでいった。

「で、どうかしたんか？」

「リンディさんが、悟空さんにちょっと話があるそうなんです。」

「そうか！………それでリンディ、オラになんか用か？」

『ええ、でもその前になのはさんは席を外していただけないかしら？』

「は、はい！！分かりました！！！！」

そう言うと、なのははフェイトの元に移動していった。

「……………んじゃ、もう一回訊くけどよオラになんか用でもあるんか？」

『はい、悟空さん単刀直入に言いますが囑託魔導士になる気はありませんか？』

「食卓………なんかつまそうな仕事だなあ！！！！」

ズゴオッ

それを聞いたリンディは画面の向こうで思いつきりズッコけた。

『し、悟空さん……………食卓じゃなくて囑託です。』

「あつ!!食卓じゃなくて囑託か!!!!いや、オラ勘違いして
たみてえだな!!!!!!」

少しして、悟空は本題に入った。

「んで、囑託魔導士っちゆうんは一体なんなんだ？」

『まあ、簡単に言えば管理局の仕事を手伝う仕事ですね。』

「……てことは、はやての手伝いが出るっちゆう事だな!!なら、
オラその囑託魔導士っちゆうのやってみっぞ!!!!!!」

『本当ですか!?!では、明日アースラに来てください!!!!!!』

「わかった!!!!!!」

そして、あつという間に翌日

「リンディ、来たぞ!!!!!!」

「いらっしゃい悟空さん。……あら?はやてさん達も一緒に来たの

ね。」

「ああ、はやて達がどうしても来るって言って聞いてくんねえんだ。」

「そう言つて、悟空は後ろを見た。」

後ろには、はやて、リインフォース、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラがいた。

「んで、オラ囑託魔導士試験つちゅうのを受けるんだよね？一体どんな試験なんだ？」

「悟空さんの場合、筆記試験は免除なので実技試験だけです。…ただ……………」

「ただ？」

「悟空さんとまともに戦える相手がなくて……………」

「それならば、その役我が引き受けよう。」

リンディの言葉を聞いてザフィーラが志願した。

「いいんですか！?…では、早速準備をしますね……………」
「そう言つと、リンディは走って行ってしまった。」

そして、数時間後

悟空とザフィーラは試験場で向き合っていた。

「ザフィーラ、おめえと戦うんはあん時以来だなあ！！！！！」

「そうだな。…では、悟空今回は本気で行くぞ！！！！！」

「ああ！！望むところだ！！！！！」

Side:見学メンバー

「悟空さんとザフィーラってどっちが強いんやろ。シグナムはどう思う？」

はやは、対峙している悟空とザフィーラを見てハラハラしていた。そして、不意にどちらが強いかがシグナムに訊いた。

「そうですね……孫は武術において天才ですが、ザフィーラもここ最近超サイヤ人2と言うものになるためにかなり過酷な修行をしていましたから、おそらく二人の実力は五分と五分だと思われま

「そういえばそうだな、ザフィーラの奴すげえ修行してたな。」

「ええ、そのせいでザフィーラかなり身体に負担がかかってたし……。」
シグナムの言葉に続いてヴィータとシャマルがザフィーラの修行の様子の時を思い返してた。

「そ、そんなにえらい修行やったんか……。」
はやては、シグナム達の言葉を聞いてザフィーラの修行の様子を想像したのか冷や汗を流した。
隣にいたなのはとフェイトも冷や汗を流していた。

「次元漂流者でありながらSSSクラス級の実力を持つ。」
リンディの隣には、いつの間にもいたのか眼鏡をかけた見知らぬ人物がいた。

彼女は、時空管理局提督 レティ・ロウランである。

「それにしても、ずいぶんバカっぽそうね……彼。」

「バ、バカっぽそうって、それはちょっと……。」
レティの悟空に対する感想にエイミィは苦笑いした。

「ま、リンディの推薦ならハズレはない筈よね。実力のほどを拝見しましょう。」

「そうね……じゃあ、そろそろ始めようかしら。エイミー、データ収集よろしくね。」

「はい……!!」

そしてリンディは、試験場にいる悟空達に試験の説明するため話しかけた。

Side: 悟空

『では、悟空さんこれから試験の説明をしますね。』

「おう、頼む……!!」

『今回の試験では、気の使用は厳禁です。ですので、魔法のみを使ってください。』

「ええ！？気を使っちゃダメなんか！めえつたなオラまだ完全に魔力を使うの慣れてねえからな。……まっ、やるだけやってみっか……!!」

悟空は、リンディの説明に少し戸惑ったが了解した。

『では、ここまでで何か質問はありますか？』

「いや、オラは特になにもねえ。」

『ザフィーラさんは？』

「俺も特にない。」

『じゃあ、囑託魔導士認定試験実技試験……………開始！！！！』

ダアンツ

リンディの言葉と共に悟空とザフィーラは同時に踏み込み

「うりゃあああ！！！！」

「でいやああ！！！！」

バギイイイインツ

拳と拳を激突させた。

その衝撃で二人がぶつかりあった床にヒビが入った。

そして

ダダダダダダッ

悟空とザフィーラはラッシュで拳や蹴りを何度もぶつけ合わせ

「はあああ！……！！！」

ダアアアアッ

同時に膝蹴りを放ち、ぶつかり合いお互いに距離を取った。

それを見ていたなのは達は啞然としていた。

だが、悟空とザフィーラの戦いは止まらない。

シュッ

二人は高速移動で姿を消し

ダアアッ　ダダアアッ

一瞬で空中に移動して、連続でぶつかり合った。
しかし、

バキイイッ

「ぐああー!?」

わずかに悟空のスピードが上だったのかザフィーラの背後を取り蹴りを叩き込んだ。

「まだだあ!!!!!!」

そして、悟空はぶっ飛ばしたザフィーラに追撃をかけるためにダッシュで追った。

「くっ!?!?なめるなあ!!!!!!」

ドウウンッ

「なあっ!?!?」

ザフィーラは叫ぶと、魔力を放出させ止まり悟空に一気に接近し

ダアアンッ

「がはあっ!?!?」

悟空の腹に膝蹴りを放った。
さらに

シュッ

「でやああ!!!!!!」

バアアンッ

「ぐああ!?!?」

「ぶんっ!!!!!!」

バキインッ

「うあああ!?!」

ザフィーラは高速移動で悟空の背後に回り込み背中に蹴りを入れのけ反った悟空の顔面にハンマーを放ち地面に叩き落とした。

ダアアンッ

「よつと!?!」

スタッ

悟空は地面に落ちたが、受け身を取りすぐに立ち上がった。

そして

シュッ

悟空の前にザフィーラが高速移動で降りてきた。

「へへっ!!ザフィーラ、おめえすっげえ強くなったな!!オラワクワクしてきたぞ!!?!?!」

「当たり前だ、俺はお前を越えるために厳しい修行してきたんだ。これぐらい当然だろう?」

「そつだな!!じゃ、準備運動はこんぐれえでいいかな!!?!?!」

「ああ、ここからはお互い本気でやるか。」

Side：見学メンバー

『そうだな！！じゃ、準備運動はこんぐれえでいいかな！！！！！！』

『ああ、ここからはお互い本気でやるか。』

「くくくえええ！？」

悟空達の言葉を聞いたなのは達は目を見開き驚いた。

「い、今までのが準備運動！？」

なのはは、モニターに映る悟空を凝視しながら呟いた。

「そ、それってホンマなんかシグナム！？」

「いえ！！私から見ても孫の動きはほぼ全力に近い力を出しているように見えました！！」

はやての問いに、シグナムも動揺しながら答えた。

「我が主、将忘れたのか？」

「「えっ!?!」」

「悟空はまだアレになっていないのだぞ。」

「?……ちょっといいかしら。アレって一体何の事?」
リインフォースの言葉にレティが疑問に思い訊いてみた。
すると、リインフォースは呟いた。

「超サイヤ人の事だ。」

Side: 悟空

悟空は腕を前で交差させ、全身に力を込めた。

ボゴオンッ　ボゴオンッ

すると、身体中の筋肉が急に膨れ上がり

「はああああああつ!?!?!?!?!?!」

ドオオオオオオンッ

悟空は気を放出させ、一気に超サイヤ人2に変身した。

「……いきなり超サイヤ人2になるか。」

ザフィーラは、呆れた表情で悟空を見ながら言った。

「へっ、とぼけんなよザフィーラ。おめえもなれるんだろ？」

「やはり、お見通しか。……いいだろう、見せてやる俺の新しい姿を……！」

そう言うと、ザフィーラは腰を低くして歯をくいしばり魔力を放出し始めた。

S i d e : ザフィーラ

ゴゴゴゴゴゴッ

ザフィーラが魔力を放出し始めた途端、試験場が揺れ始めた。

そして

「はああああっ……！」

ドオオオンッ

ザフィーラは超サイヤ人になった。
だが、ザフィーラはそれでも魔力の放出を止めずにさらに放出し続けた。

しばらくすると

バチィッ バチィッ

魔力と一緒に稲妻が放出され始めた。

「うあああああつ！！！！！！！！！」

ドオオオオオオンッ

「くっ！？」

ザフィーラが雄叫びを上げた瞬間、衝撃波が発生し悟空は思わず後ずさった。

Side：見学メンバー

ドオオオオオオンッ

「きゃあああああつ！？」

衝撃波ははやて達の所にも届いた。

「ザフィーラ、大丈夫なんか？」
はやては、ザフィーラがいるであろう煙の中を心配そうに見ていた。
すると

バチイッ

煙の中から稲妻が放出された。
そして、少しずつ煙がはれてきた。

「っ!？」

その時、リインフォースが突然身体をビクリッと震わせた。

「どうしたんや!？リインフォース。」

「煙の中からとてつもない強大なエネルギーを感じます。それも……
……悟空と同等の……。」

Side：悟空

悟空はじつと煙の中を見据えていた。
すると、その煙の中からザフィーラの声が聞こえた。

「待たせたな。」

そして、ゆっくりと歩きながらザフィーラは煙の中から現れた。

「これが俺の新しい姿だ。」
その容姿は、悟空の超サイヤ人2とそっくりで逆立った髪はさらに逆上がり、稲妻のようなオーラを全身に纏っていた。

「…へへっ！…やっぱり、おめえはすげえヤツだザフィーラ。さすがだ。」

「ふっ、ご託はいい。さっさと始めるぞ、この姿はあまり長く維持できないのでな。」

「そうだな、オラもう戦けえたくてウズウズしてんだ!!」
そう言うと、悟空とザフィーラは構えを取え

シュッ

ダダアアンッ

高速移動で瞬時に空中に移動してぶつかり合った。

「はああ!!--!!」

悟空は先程と同じように高速移動でザフィーラの後ろを取り蹴りを放ったが

シュッ

スカッ

「なっ!?!」

シュッ

「止まって見えるぞ!?!だあ!?!!」

バキィンッ

「ぐああ!?!」

ザフィーラは、高速移動で掻き消えた。

そして、悟空の後ろに現れ魔力弾を叩き付けられ空中から落とされた。

「くっ!?!はああ!?!!」

悟空は落とされながらも体勢を立て直しザフィーラ目掛けて魔力弾を形成して撃った。

しかし

シュッ

「こっちだ!?!!」

ドオオンッ

「があ!?!」

また高速移動で避けられ今度は横から蹴りを喰らいぶっ飛ばされた。

Side：見学メンバー

はやて達は、悟空とザフィーラの超絶バトルを見て開いた口が塞がらない状態であった。

「な、なんちゆう出鱈目な戦いなんや……………」。「
はやては、悟空とザフィーラの戦いを見て驚いていた。

「わ、私の想像した以上ね……………むしろ、ありえないわ。」
レティも、想像以上に凄まじい二人の戦いを見て驚いていた。

「リインフォースは、二人の動きが見えとるんか？」

「なんとか……………残像だけですが……………」。「
リインフォースは、高速移動しながらぶつかり続けている悟空とザフィーラを必死に目で追っていた。

「私なんかより、何倍も速い……………ま、まったく見えない……………」。「
フェイトは、二人の高速移動のスピードを目で追ってはいるが追いついていないようである。

「……………あの二人の戦いに耐えられるのかしら……………アースラ……………」。「
騒然とするはやて達の中でリンディはごもつともな事を呟いた。

Side:悟空

ババアンツ ダツ ヒュツ ヒュヒュンツ ドオンツ

「（よし、だんだんとザフィーラの動きが読めてきたぞ!!!）」

「
超サイヤ人2のザフィーラとの戦いから数分後、悟空は少しずつだ
がザフィーラの拳や蹴りの動きが読めてきていた。」

「はああ!!!!!!」

バキイインツ

「ぐっ!?!」

そして、悟空はザフィーラの攻撃を避け反撃の一撃を顔面に放った。
その攻撃により、ザフィーラは怯み後ろに下がった。

「だああ!!!!!!」

バアアンツ

「があ!?!」

悟空はその隙にザフィーラに接近して横腹に蹴りを叩き込み吹っ飛
ばした。

キュイイイインツ

そして、悟空は掌と自分の周りにありつただけの魔力弾を形成して

「だりやりやりやりやりやりや……!!!……!!!……!!!」

それをすべて吹っ飛んでいくザフィーラに撃ち込んだ。

ポオオンツ　ポオオンツ　ポオオンツ

魔力弾がたまに壁や床に当たったりして周りを破壊しながらも悟空は魔力弾を撃ち続けた。

『ちよっ!?!ご、悟空さん!!ストップストップ!!!!!!』

「っ!?!?」

しばらく撃ち込み続けていると、スピーカーからはやての音が聞こえ悟空は魔力弾を撃つのをやめた。

『悟空さん、撃ちすぎです!!危うく壁に大穴が開くところでしたよ……!!……!!……!!』

「いや、わりいわりいはやて。」

『もっ……!!……!!』

悟空ははやてに謝ったが、はやては頬をぷくぷくと膨らませ可愛らしく怒りを露にしていた。

「はははっ！！！！………んっ！？」

悟空は不意に爆煙の中から膨大な魔力を感じそちらに目を向けた。

そして、徐々に煙が晴れていき見えたのは

「はああああっ！！！！」

両腕を左右に広げ魔力を放出しているザフィーラがいた。

「あああああっ！！！！」

そして、ザフィーラは雄叫びを上げながら両腕を前に持っていき手首同士を合わせた。

バチッ バチィッ

すると、手の部分が放電し始め

ゴオオオオオツ

魔力球が形成された。

「悟空！！この俺の攻撃を受ける覚悟があるか！！！！」

「……へっ！！望むところだ！！受けてやつぜ！！！！」

そう言うと、悟空はザフィーラの攻撃に身構えた。

「それでこそ、俺が越えるべき男だ！！行くぞ！！！！………はあああああっ！！！！！！！！」

ザフィーラは、さらに魔力球に魔力を注ぎ込んだ。

『じやじやあーっどじじよー！！！』

『どじじよって言われても……………。』

『ザフィーラ！！さすがにそれはアカン！！やめえ！！！！』
スピーカーからはやて達の声が聞こえるが、悟空とザフィーラには聞こえて…………

「喰らえええ！！……！」

…………いなかった。

「ジャツジメント……………バスタア！！……！」

ドゴオオオオオンッ

ザフィーラは自身の何倍もの大きさがある巨大な砲撃を放った。

そして、悟空は

「はああああっ！！……！」

魔力を全開で放出してバリアを自分を囲むように張った。

なのはも、悟空のピンチに気が動転して暴れておりフェイトとアルフに取り押さえていた。

Side: 悟空

ドオオオオオンッ

「ぐあああ!?!」

ザフィーラの必殺技『ジャツジメントバスター』は悟空のバリアに直撃した。

「(ぐぐっ、こりやべえかも……。)」

だが、威力が悟空の想像以上だったのか少しずつ押され始めた。

「……………こいつだけには、なりたくなかったが……………仕方ねえ!!!」

そう言つて、悟空はある決断をした。

ゴロゴロッ　ゴロゴロッ

その途端、室内にいるはずなのに突然雷が鳴り始め

「ぐあああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ドカアアアンッ

ザフィーラの砲撃は大爆発を起こした。

Side: ザフィーラ

「ぐあああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

ドカアアアッ

「ん!?…なんだ!!!!!!!!!!」

ザフィーラが何か強大なエネルギーを感じたその時

ズダアアアッ

「がはあ!?!」

突如、煙の中から砲撃が放たれザフィーラに喰らった。

「…………い、一体…なにが…………。」

砲撃を喰らったザフィーラは意識が遠のいていき最後に見たのは

煙の中に立つ山吹色の胴着を着た長髪の男の姿だった。

Side: 悟空

「わりいな、ザフィーラ。」

悟空は超サイヤ人を解き気を失ったザフィーラに謝った。

「よっ…と…!」

そして、ザフィーラを担ぐと悟空は額に指を添え

シュンッ

瞬間移動した。

シュンッ

「よっ…!! 終わったぞ…!!…!!」

「悟空さ〜ん…!!…!!」

「おお!…ど、どうした、はやて。」

悟空が瞬間移動でなのは達の所に来た途端、はやてが悟空に抱きつ
いた。

「大丈夫ですか！？悟空さん！！どこか怪我はしていませんか！！」

「ははっ！！心配すんなって、オラどこも怪我してねえからよ！！」

「！！」
「そう言いながら、悟空ははやての頭を撫でた。

「はづううう／＼／＼／＼……。」
「撫でられたはやては、顔を赤くさせ幸せそうな表情になった。

「ああ！？はやてちゃんだけずるいよ！！！！悟空さん、次はなのはを撫でてください！！！！」

「何いつてんだ！！！！次はあたしに決まってるだろ！！！！」

「じゃああ！！！！次はなのはの番なの！！！！」

「いゝや、あたしだ！！！！」

と、なのはとヴィータは言い争い遂には

「もういい！！ヴィータちゃん、悟空を賭けて決闘なの！！！！！！」
「！！」

「おお！！！！上等だ！！！！！！！！」

決闘になってしまい、二人は試験場に行ってしまった。

「……それでリンディオラその囑託魔導士つちゆうんになれるんか？」

悟空は、なのはとヴィータの成り行きを見ていたが軽く流してリンディに囑託魔導士になれるか訊いた。

「はい！！大丈夫です、悟空は囑託魔導士認定試験…合格です。」
リンディは、笑顔で悟空に試験結果を言った。

「へへっ！！やったぞお！！！！！！！！」
悟空は、腕を上げ大喜びした。

こうして、悟空は囑託魔導士になった。

おまけ

ちなみに、悟空を賭けて決闘をしていたなのはとヴィータは

「じゃあああ……。」

「はあ……はあ……まったく、悪魔じみた砲撃バンバン撃ちやがって！
……！」

ギリギリでヴィータが勝利していた。

「でも………へへっ！！これで悟空に撫でてもらえるぞ！！待って
てよ、悟空……！！！」
そう言って、トテトテと悟空の所に走っていった。

「ヴィ、ヴィータちゃん………置いて………てかない………で………。」
なのはは、試験場に置いていかれていた。

第二十一話悟空が就職！？その名も囑託魔導士！！（後書き）

オツス、オラ悟空！！

あの闇の書事件から一週間ぐれえたったある日、修行をしていたオラの前にシグナムが来たんだ。

だが、シグナムはいきなり襲いかかって来やがった。

どうしたんだよ、シグナム！！！！

次回・魔法少女リリカルなのは S

新たな事件！！原因は闇の書の欠片！？

「おめえ、ホンモンのシグナムじゃねえな！！なにもんだ！！！！」

第二十二話新たな事件！！原因は闇の書の欠片！？（前書き）

闇の書の欠片事件ついに発生！！！！

感想・アドバイスがあればください！！！！

第二十二話新たな事件！！原因は闇の書の欠片！？

悟空が囑託魔導士になり数日後

そして、悟空達の活躍により解決した『闇の書事件』から一週間がたった。

Side：悟空

「ふっ！！……せいつ！！……だあっ！！！！！」

『闇の書事件』を解決に導いた者達の一人、孫悟空ははやての家からかなり離れた山奥で修行していた。

ちなみにザフィーラも、別の場所で修行をしたいと言って悟空とは別々で修行しているため現在ここにはいない。

「だりゃあ！！……ふう、よし！！今日はこんぐれえでいっか！！……そろそろ戻るとすっかな、オラ腹減ってきたし……」。

そう言つて、悟空が空に飛び立とうとしたその時

キイイイインッ

「ん？……なんだ？空の色が変わっちゃったぞ。」

突然、空の色が白黒のようなものになってしまった。

スタツ

「ん？」

すると、後ろから何者かが着地する気配を感じ悟空は振り返った。

「シグナムじゃねえか！！なんだ、おめえもオラと一緒に修行した
いんか？それとも、またオラと戦えてえんか？」

「……………」

その正体はシグナムであった。

だが、悟空が話し掛けてもシグナムは一言も返して来ない。

「どうしたんだよ、シグナム。」

悟空が返事を返さないシグナムに近付いた瞬間

ブオオオンツ

ガキイインツ

「っ！？」

「あつぶねえな。いきなり何すんだよシグナム！！」

シグナムは、悟空に剣で斬りつけたが悟空は人差し指だけで軽く受け止めた。

そして、シグナムは再度剣を構え

「はあぁっ！！！！！」

連続攻撃を放った。

しかし

キーンッ キキーンッ キーンッ

悟空は、その連続攻撃もすべて人差し指だけで防いだ。

「ん〜？」

悟空は、シグナムの攻撃を防ぐと首を傾げ不思議そうにした。

「シグナム、おめえ弱くなっただんじゃねえか？」

「なんだと！？それに、貴様は何故私の名を知っている！？」
シグナムは、突然訳の分からない事を言い出した。

「はっ？なに言ってるんだシグナム。おめえはやて達と一緒に住んでんじゃねえか、忘れたんか？」

「……………はやて？…誰だそれは、私はそんな者は知らない！！！！！」

「…っ！？…おめえはシグナムじゃねえな！！！！なにが目的だ！！！！！」

「貴様の魔力を闇の書の糧にさせてもらうぞ!!」
『闇の書』という単語に悟空は目を見開き驚いた。

「はあああっ!!!!!!」

悟空が驚いていると、シグナムが斬りかかってきた。

ヒュッ

悟空は咄嗟に反応して避け

「たああっ!!!!!!」

ダアアアンッ

「がああっ!?!」

シグナムの腹に蹴りを入れぶっ飛ばした。

「……やっぱ、おめえは偽者だな。本物のシグナムの方がもっと強えからな。」

「わ、私が弱いだと!?!ふざけるな!!!!!!」

シグナムがそう怒鳴り再び構えようとしたその時

「な、なんだ!?!…ぐう、ああああ!!!!!!」

突然、シグナムの脚の方からまるでパズルのように碎けていき消えてしまった。

「消えた！？……だが、一体どういう事だ？ヤツの魔力は間違
なくシグナムの魔力だった。」

悟空は、しばし考えたがすぐに止め

「とりあえず、みんなの所に戻らねえと……。」

悟空は、額に指先を添え

シュンッ

瞬間移動した。

八神家

シュンッ

「みんな！！大変だ！！！！」

「きゃああ！？」

悟空は、瞬間移動するなり大声で叫んだ。

どうやらリインフォースの後ろに瞬間移動したらしくリインフォー
スは乙女な悲鳴を上げた。

ちなみに、悟空は気の他にも魔力を感じ取れるため魔力を頼りに瞬
間移動することも可能である。

「悟空！！瞬間移動していきなり叫ぶな驚いたじゃないか！！！！」

「あつ、わりいわりい……………つて、そんな事言ってる場合じゃねえんだ！！！！みんな聞いてくれ！！！！」

悟空がそう言うと、ザフィーラ以外の者達が集まった。

「あれ？ザフィーラは？」

「あいつは、修行だ。もつとも何処でしているかは分らんが……………」

「…。」

「ヴィータの問いに、シグナムが答えた。

そして、悟空は先程の出来事を話した。

「実はよ、さつきオラ修行してる時にシグナムが現れたんだ。」

「なにっ！？だが、私は家から一步も出ていないぞ！！」

「ああでもよ、そいつからはつきりとシグナムの魔力を感じたんだ。それに、オラの魔力を闇の書の糧にするって言ったんだ。」

『っ！？』

闇の書と言っ言葉に皆驚いた。

「一体どういう事ですか！？悟空さん！！」

「わかんねえ、それにはやての事も知らねえ様子だった。」

「私が主はやてを知らない！？どういう事なんだ！！！！」
みんなそれぞれ混乱している中、リンフォースだけ冷静だった。
そして、呟いた。

「その事なら、私に心当たりがある。」

「ほ、ホントか！？」

「ああ、おそらくそれは闇の書の欠片が原因だ。」

「闇の書の……欠片？」

悟空が、不思議そうに呟いたその時

ピピピピッ

ブオンッ

突然、モニターが現れた。

「もしもし、聞こえますか？こちら、リンディです。」

「リンディか。一体どうしたんだ？」
モニターには、リンディが映っており何か深刻そうな表情をしていた。

『海鳴市全域に正体不明の結界が複数現れたんです！！なのはさんやフェイトさんにも出動してもらっています！！』

「わかった、オラ協力する。そこで、片っ端からその結界っちゅうんを調べればいいんだな？」

『はい！！』

「よし！！じゃあ、みんな手分けして調べるぞ！！！！！！」

「「「「「おお！！！！！！」」」」」

悟空達の前にまた新たな事件が発生した。

果たして、闇の書の欠片とは一体なんなのか？

そして、悟空達はこの事件を解決する事は出来るのであろうか！！！！！！

第二十二話新たな事件！！原因は闇の書の欠片！？（後書き）

オッス、オラ悟空！！

オラ達は手分けしてその結界つちゆうんを調べる事にしたんだ。

その時、オラの前になのはが現れたんだ。

だが、なのはの様子がおかしい。

なんかオラとおはなしっちゆうんをしたいみてえだな。

次回・魔法少女リリカルなのは S

おはなしするの！！なのはの砲撃魔法炸裂

「悟空さん、なのはとおはなししましょうなの！！！！！！」

第二十三話おはなしするの!!!なのはの砲撃魔法炸裂

悟空達は、それぞれ別々の方向に飛んでいき結界を調べ回った。

Side:悟空

「ん、確かここら辺から魔力を感じるんだけど、おっかしいな？」
悟空は、周りをキョロキョロ見渡ししながら魔力を探っていた。
そこへ

ジュジュッ

「おっ?通信、誰からだ?」

ブオンッ

突然、通信が入り悟空は回線を開いた。

「オッス、オラ悟空だ。」

『あっ!!!悟空さん、こちらなのはです!!!!!!』

「なのはか、一体どうした?」

『実は、さつき例の結界を調べたんですけどそこにヴィータちゃん
がいたんですけど……。』

「ん？どうした？」

急に黙ってしまったなのはを見て、悟空が訊くとなのはの口から驚
くべき事が話された。

『結界の原因が、どうやらヴィータちゃんだったみたいなんです。』

「なっ！？ヴィータが！！！！！」

『あつ、でも本物のヴィータちゃんじゃなくて闇の書の欠片が作っ
た偽物だったらしいんです！！！！！』

「っ！？……闇の書の欠片か……。』

『悟空さん、何か心当たりがあるんですか？』

「ああ、それでオラとはやて達も手分けして結界の原因を調べてる
んだ。」

『そうですか、じゃあこれからそちらに合流しますから待っていてく

「ださい！……！」

「分かった。」

そう言って、悟空は通信を切った。

「よし！……オラも結界の原因を調べるとすつか！……！」
そして、悟空は再び探索を再開した。

しばらくして

「こいつか……その例の結界っちゅうんは……。」
悟空は、不自然な結界を発見した。
そして、結界に穴を開け中に侵入した。

そこにいたのは

「あつ！……悟空さん！……！」

「……なのは……じゃねえな、こいつも闇の書の欠片が作った偽物か。」

「ほえ？…に、偽物？」

「いや、なんでもねえこつちの話だ。」

バリアジャケットを身に纏った偽物のなのはであった。

「そうですか、じゃあ悟空さん！！なのはとおはなししましょう！！！！」

「おはなし？」

「はい！！おはなしです！！！！！！」

そう言われ、悟空は首を傾げて不思議に思い訊いてみた。

「で、おはなしって何をおはなしすんだ？」

「ええと、闇の書の事とか、闇の書のマスターの事とか、いろいろ聞かせて欲しいんです。力になれる事、きっとあると思うんです…。だから、お願いします！！！！」

闇の欠片なのは、丁寧に頭を下げ悟空にお願いした。

「（ヴィータ達もだけど、オラも初めはなのはを信用できなかったんだよな。だが……………。）」

悟空は頭を上げたなのはの目を見た。

そう言って、悟空は闇の欠片なのはの前髪を手で上げ

ピュッ

お互いの額を合わせた。

S i d e …はやて

ピキュウウンッ

「むっ!?!」

「どっかしましたか？我が主。」

「なんや突然、なのはちゃんを懲らしめなあかん思っつてな。」

「は、はあ……………」

Side: ヴィータ

ピキユウウンッ

「んっ!?!」

「ヴィータ?」

「どうかしたの? ヴィータちゃん。」

「いや、なんかいきなりすっげえムシヤクシャしてきちまって、無性になのはをぶっ叩きたくなってきた。」

「ちよっ!?! ヴィータちゃん何言ってるの!?!?!?!?!」

Side: 闇の欠片なのは

ゾクッ

「ひっ!?!」

弾き彼方に飛んでいき

ヒュウウウウウ

ドカアアアンツ

放物線を描き地上に落下した。

「これで終わりなんか？」

「ま、まだです!!!」

そう言つて、闇の欠片なのは杖を再び構え

「デイベイン………シューター!!!!!!」

杖の先に魔力を集中させ、複数の魔力弾を一気に悟空目掛けて撃ち出した。

しかしこれも

「よっ!!!」

ポオンツ

パヒュンツ

「ええええ!?!」

悟空は手のひらから軽く気合砲を放ち、迫ってきていた魔力弾を破壊した。

シュンッ

「にゃっ!?!」

悟空はなのはの前に高速移動で現れ

キュイイインッ

「はっ!?!」

ポオンッ

「にゃああ!?!」

気弾を作り、なのはの目の前で小さく破裂させ驚かせ

「ほいつ!?!」

ペシッ

「いたあ!?!」

その隙に、なのはに近づきおでこにデコピンを喰らわせた。

「あつう……………」

「はははっ!?!どうしたどうした、おめえの全力全開っちゆうんはその程度なんか?」

S i d e : 闇の欠片なのは

「はははっ!! どうしたどうした、おめえの全力全開っちゅうんはその程度なんか?」

それを聞いた闇の欠片なのは少しカチンときた。

「むう、分かりました!! じゃあ、私が出せる最大砲撃魔法いきます!!!!!!」

そう言って、両手で杖を持ち悟空に向けて突き出した。
すると

ブオンッ

闇の欠片なのは足元と前方に桜色の魔方陣が展開され、空気中に漂う残留魔力を吸収し巨大な魔力球を形成した。

「いきますよ!! 悟空さん!!!!!!」

「よし!! 来い!!!!!!」

「スターライト……ブレイカー!!!!!!!!!!」

ズドオオオオンッ

なのはが叫ぶのと同時に魔力球から一気に魔力を放出し砲撃を放った。

だが悟空は

「……………」
防御をしようとも、避けようともせずスターライトブレイカーに

ゴオオオオオオッ

呑み込まれ

ドカアアアアンッ

爆発した。

「はあ…はあ…て、手ごたえあつた…なの。」
スターライトブレイカーにより魔力をほとんど使ってしまったのか
なのはは息が乱れていた。

「さ、さすがに悟空さんでもこれなら……………っ!？」
そう言つて、爆煙の方を見たなのはは目を見開いた。

なぜなら

「今の攻撃はなかなか良かったぞなのは。だが、この程度の攻撃じやオラは倒せねえな。」
煙が晴れた先には無傷の悟空がいたからである。

「そ、そんな……………」

なのはがそう呟いたその時

シューウウウウツ

「あれ！？か、身体が……………」

闇の欠片のシグナムの時と同様に足元からパズルのように崩れていった。

「な、なに！？どうなってるのこれ！！！！」
突然の事になのはは怯えていた。

それを見た悟空は、なのはの傍に寄り

ポフツ

「ふえ！？」

「安心しろ、おめえはただ悪い夢から覚めるだけだ。何も怖がる事はねえ。」

頭に手を置き優しく撫でながら語りかけた。

「夢？」

「そうだ！！ただの夢だ！！今のおめえはみんなとすげえ仲良くやってっぞ！！！！」

「…それって……………」

「ああ、ヴィータやシグナム、それに闇の…じゃなかった夜天の書のマスターのはやてとも仲良くやってる。だから、安心しろ!!」

「…はい…………悟空さん……………」

「ん?」

「私は、悟空さんとも仲良くやってますか?」

「…ああ!……………」

「そっか…良かった!!……………」
「なのはは、ニッコリ笑い喜んだ。」

そして

パライイイインッ

ガラスのように碎け散った。
それと同時に、結界も消えてなくなった。

Side・悟空

「ふう。」

「悟空さん!!!!!!」

「お？今度は本物のなのはだな!!」

「本物の？……じゃあ、さっきまで戦ってたのって……。」

「なのはの姿をしてた闇の書の欠片だな!!」

「ええ！？だ、大丈夫だったんですか!？」

「ああ、オラはなんともねえ。」

「そうですね。…良かった。」

「それより、オラこれから他の場所も調べてみようと思うんだ！！
なのは、おめえも一緒に来るか？」

「はい……！！」

そう言って、二人は別の場所を調べに飛んでいった。

第二十三話おはなしするの!!!なのはの砲撃魔法炸裂(後書き)

オッス、オラ悟空!!

なのはと合流したオラは他の場所を調べるために一緒に行動する事になった。

ちょうどその頃、はやてと共に行動していたリインフォースの前にもう一人のリインフォースが現れた。

しかも、強さは同じぐれえだ!!!!!!

次回・魔法少女リリカルなのは S

自分を越える!!!リインフォースVSリインフォース!?

「私は負ける訳にはいかない!!!!!!」

第二十四話自分を越える！ーリインフォースVSリインフォース！？（前書き）

更新遅くなってしまいました！ー！すいません！ー！

第二十四話自分を越える！！リインフォースVSリインフォース！？

悟空がなのはと合流し、しばらく辺りを調べていると

ジュジュジュ

「ん？」

ブオンッ

『悟空さん！！聞こえますか？』

「おお、はやて！！一体どうしたんだ、そんなに慌てて？」
突然、通信が入り悟空が回線を開くと相手ははやてであった。

『いえ、ただ悟空さんがケガをしてないか心配で……………。』

「そっか、ありがとな！！心配してくれて、でも大丈夫だオラこのとおりピンピンしてっぞ！！！！」

悟空は元気である事をアピールするために腕をブンブン振り回した。

『そうですか、良かった。』

「それより、はやて。おめえの方は大丈夫なんか？」

『はい、こっちも大丈夫です！！それにリインフォースもついてくれてますし……！！』

「へえ、そうなんか。」

『……あつ、悟空さん！！なんかリインフォースがなんや話したい事があるらしいです……！！』

「リインフォースが？…かわってくれ。」

そして、少しして画面にリインフォースが出てきた。

『悟空、リインフォースだ。闇の書の欠片について知っておいてほしい事がある。』

「知っておいてほしい事？」

『ああ、闇の書の欠片達を倒しているだけではこの騒ぎを静める事はできない。』

「ホントか！？一体どうすりゃいいんだ？」

『闇の書の欠片の中枢を叩くしかない。だが、そいつらは一筋縄ではいかなほど強力な力と魔力を持っている。』

「そいつらを見極める方法はあるんか？」

『おそらく、そいつらは独自の自我を持っているはずだ。』

「わかった!!」

『悟空、無理だけはするなよ。我が主が悲しまれるからな。』

「ああ、わかってるって!! そっちも気をつけるよ、リインフォー
ス!!!!」

ヒュンッ

悟空がそう言うと、画面は消え通信が切られた。

「…なのは、オラ達はこれから騒ぎの原因の中枢っちゅうんを探すぞ。」

「はい!!」

「よし！…んじゃ、行くか！！！！」

そして、悟空となのはは中枢を探すために飛んでいった。

Side：リインフォース

「では、我が主。私達も行きましょう。」

「そっやね！！」

そう言って、リインフォース達も中枢を探すため飛び立とうとしたその時

キイイインッ

「っっ！？」

リインフォースとはやてを囲むように結界が張られ空の色が白黒になった。

「我が主！！気をつけてください！！！！」

「うん！！」

それと同時に、リインフォースとはやてはそれぞれ拳と杖を構えた。そして、そこに一つの人影が現れた。

「なっ!?!」

「り、リインフォース!?!」

二人はその人影を見て驚愕した。

それもそのはず、その人影はリインフォースの姿をしていたからである。

「防衛システムの再生が遅い……阻んでいるのは、お前か?」

「……ああ……。」

「リインフォース……。」

「我が主、どうかお下がりにください。ここは私にお任せを。」

そう言っつて、リインフォースは前に出て、はやては後ろに下がった。

「闇の宿命も、果てない呪いも……終わらんよ。どこまで逃げても追っってくる。」

「だろうな……私も分かっている。」

「ならば、帰ってこい……逃れられないのなら、自我も願いも……無くしてしまえば楽になれる。」

「ああ……昔の私なら、そう言っていたらうな。」
「リインフォースは、少し辛そうな表情でそう言ったが、

「……だが……私には、それはできんよ。」
目を鋭くさせ、闇の書の意志を睨みながらそう言った。

「……何故？」

「終わらない呪いを終わらせるため……宿命をこの手で断ち切るため。それは私にしか出来ないし……私が何より、成すべきことだ。」

「……無理だ……。」

「できるさ……私はその礎となる。」

「……無駄だ……すべては、闇の狭間に消えていく……夢も決意も……悲しみも……！」

そう言って、闇の書の意志は魔力を放出させ周りに撒き散らしながらリインフォースに突っ込んだ。

バキィィィンッ

「ぐっ!?!」

そして、闇の書の意志はリインフォースに拳を振るったがリインフォースは片手で受け止めた。

だが、想像以上の威力があったのかリインフォースは一瞬痛みで顔を歪ませた。

そんな隙を突き闇の書の意志は、身体を捻り

「はあっ!?!」

ダアアアッ

「がつ!?!」

リインフォースの首に強烈な蹴りを叩き込んだ。

そして、そのままリインフォースは回転しながら地上目掛けて落下していき

ドオオオオッ

地面に激突した。

「リインフォース!!!!!!」

地面に突っ込んだリインフォースを見て、はやてはリインフォースの名前を叫び地面に激突したリインフォースの元に向かった。

S i d e : はやて

「ぐっ……はぁ……はぁ……。」

「リインフォース！大丈夫なんか。」

地面に降り立ちリインフォースを見つけたはやてはすぐに傍に寄り、心配の声を掛けた。

「は、はい……なんとか……。」

リインフォースは蹴りを喰らった首の部分を擦りながらゆっくりと立ち上がった。

「ホントに大丈夫なんか？うちも一緒に戦おうか？」

「いえ、今回の戦闘は我が主にとってかなり荷が重すぎると思いますが。」

「なんや、うちだって魔法の練習欠かさずやっとなんやで！！」
荷が重すぎると言われ、はやては頬を膨らませ魔法の練習を欠かさなかった事を主張した。

だが

「いえ、駄目です。」

リインフォースはその言葉を断固拒否した。

「確かに、我が主は魔法の練習を欠かさずやってきました。しかし、それは基礎レベルでの練習です。今回の戦闘は、最低でも将かヴィータのような実戦経験がなければ無理です。」

「そうなんか？うん、困ったな。でも、うちもラインフォースと一緒に戦いたいんや！！」

しかし、はやても引き下がらなかった。

そして

「……………はあ、分かりました。」

ラインフォース方が先に折れた。

「よっしゃ！！じゃあ、早速いこか！！」

「はい、我が主！！」

そう言っつて、ラインフォースははやてと共に再び空に飛び上がった。

S i d e : 闇の書の意志

「今度は、二人掛かりか。」

「しゃあないやる！！！うちらはあんたに勝たなあかんのやから！！
行くで、リインフォース！！！！！」

「はい！！！」

シュッ

はやてがそう言うと、リインフォースは高速移動でその場から消え、
はやては

「バルムンク！！！」

周囲に無数の魔力剣を生成し、闇の書の意志目掛けて放った。

だが

「はあぁっ！！！」

ドオオオオンッ

闇の書の意志は、手を前に突きだし手のひらから衝撃波を出し魔力
剣を破壊した。

それと同時に

「刃似て、血に染まれ！！ブラッディダガー！！！！！」

高速移動で消えたリインフォースが背後に現れ赤い魔力剣を放った。

しかし

「ふっ!!」

ドガガガガッ

闇の書の意志は、振り返りなんと拳ですべての魔力剣を粉々に砕き、リインフォースを見据えた。

すると、リインフォースは何故か口の端を吊り上げ笑っていた。

闇の書の意志が不思議に思ったその時

「クラウドソラス!!」

背後から声が聞こえ後ろを見ると、巨大な白い砲撃が迫ってきていた。

そして、そのまま闇の書の意志は砲撃に呑み込まれ

ドガアアアアッ

大爆発を起こした。

Side: はやて

「よっしゃ!!命中や!!」

思わずガッツポーズをしたはやてだったが、その直後大きな疲労感到に襲われた。

「あちゃ〜、クラウソラスに魔力込めすぎたみたいやな〜。ちょっと疲れてしまった。ふう〜……。」

はやてが一息ついていると、

シュツ

「我が主、大丈夫ですか？」

はやての傍にリインフォースが高速移動で現れた。

「あはは、たぶん大丈夫や。ただ魔力使いすぎてしもつてもうおっきな砲撃撃てそうも……ない……。」

そこまで言って、はやては言葉を切り目を見開いた。

リインフォースは、不思議に思いはやての視線を辿り彼女も目を見開いた。

なぜなら

「無駄だ、その程度の攻撃では私は倒せん。」

はやてのクラウソラスはまともに受けたはずの闇の書の意志が無傷が佇んでいたからである。

「……こら、ちょっと厳しいかもしれへんな〜。」

S i d e : リインフォース

まさか!?!我が主の砲撃は確かに直撃したはずだ!!

リインフォースが動揺していた瞬間

シュッ

闇の書の意志は一瞬でその場から消え

ドゴオンッ

「かつ!?!」

リインフォースの後ろにいたはやての腹に拳をめり込ませていた。

は、速い!?!?

リインフォースが闇の書の意志の移動速度に驚いた。

そして、闇の書の意志は身体を捻り

「はあっ!?!」

バキィンッ

「ああああ!?!」

腹を押さえ悶えているはやての頭に蹴りを放ち、

ダアアンッ

「あぐっ!?!」

はやては吹っ飛びビルの屋上に叩きつけられた。

「我が主!?!」

シュッ

リインフォースはその場から高速移動ではやての元に向かった。

シュッ

「我が主!?!しっかりしてください!?!我が主!?!!」

「ううっ……。」

リインフォースははやての上体を起こし呼びかけた。

しかし、はやては意識を失っておりさらに、先程の蹴りの当たり所が悪かったのか頭から多量の血を流していた。

そのため、ポタポタと血が滴り落ち地面が真っ赤に染まっていた。

まずい!?!血を止めなければ……

そう思ったリインフォースははやての頭に手を添えシャマルに習っていた治癒魔法を使った。

そして、ある程度の治療を施した。

よし！！止血はできたもうこれ以上血が流れる事はないだろう

リインフォースははやての上体をそつと下ろし寝かせ、上空にいる闇の書の意志を睨み付けた。

「くっ！？よくも我が主を……。」
そう言つて、リインフォースは拳を血が垂れる程強く握りしめた。
すると、

シューウウウツ

リインフォースの全身からオーラのようなものが少しずつ出始め

「よくも我が主を！！！！！」

リインフォースが怒りの雄叫びを上げた途端、身体全体を包み込む程の漆黒のオーラが放出された。

そして、リインフォースは漆黒のオーラ纏ったまま闇の書の意志に向かつて飛んだ。

「だあぁっ！！！」

ズゴオンツ

突っ込んだリインフォースは拳に魔力を極限にまで収束させ殴つた。だが、闇の書の意志は自分の前にシールドを展開してその拳を防いだ。

しかし

「うああああ!!!!!!」

リインフォースはそれでも攻撃するのをやめず、両拳で何度も殴り続けた。

「その程度か？お前の憎悪の力は……………」

「黙れええ!!!!!!」

闇の書の意志の呟きにリインフォースはさらに怒りを爆発させた。この時、リインフォースの目は狂気に満ちていた。

Side：闇の書の意志

リインフォースの心が狂気に取り付かれている時、闇の書の意志は口の端を吊り上げ笑っていた。

そうだ、負の感情に身を委ねろ。そして、お前が完全に狂気に取り付かれた時、お前は闇に還る。

なんと、闇の書の意志の行動はすべてリインフォースを闇に還すための罠であった。

「当たれええ!!!!!!」

そうとも知らず、リインフォースは確実に闇に侵食されていた。

S i d e : リインフォース

ガアアンツ

「ふっ、軟弱だな。それでは、お前の主の仇など取れんぞ?」

「くっ!?! つるさい!?!」

ドゴオンツ

「どっした?」

「くそお!?!」

リインフォースは絶えず闇の書の意志に攻撃を続けているが、すべてシールドで防がれていた。

「ならば……。」

そう言うと、リインフォースは一旦距離を取り

「これなら……どうだ!?!」

手のひらにエネルギーを収束させ、砲撃を放った。

だが、闇の書の意志はリインフォースの予想を越える行動をした。

「ふっ……。」

「なにつ!?!」

なんと、シールドを消し両腕を左右に広げ

ドカアアッ

リインフォースの砲撃をまともに受けた。

「いったい……。何を……。」。」

リインフォースが闇の書の意志の行動に疑問を抱いていたその時

「ブラッディダガー!!」

バシユシユシユッ

「っ!?!」

煙の中からいきなり無数の赤いナイフが飛来してきた。

リインフォースはシールドを張り防御しようとしたが

ギユンッ

「なっ!?!」

ナイフがシールドに当たる直前に、左右に分かれてシールドを避け

ドスッ ドスッ ドスッ

「うあああああ！？」

リインフォースに刺さり、鮮血が身体から溢れた。

しかし、ナイフはさらに降り注ぎリインフォースに刺さっていった。

ポタッ ポタッ ポタッ

「はあ…はあ…はあ…。」

そして、ナイフの雨が止まった頃には、リインフォースの身体は血に染まり至るところから血が滴り落ちていた。

「トドメだ。」

「っ！？」

闇の書の意志はそう言つと、両腕を広げ周りに漆黒の球体を形成した。

「喰らえ、ナイトメア！！」

そして、闇の書の意志が右手に魔力を収束させリインフォースに放つと、周りの球体からも砲撃が放たれた。

それを見たリインフォースはシールドは張ろうとしたが

「ぐっ！？…（か、身体が…動かない！！）」
身体が動かなかった。

そして、非情にもそんなリインフォースに

ドドドドドオオオンッ

複数の砲撃が直撃した。

S i d e : 闇の書の意志

「……終わったな。」

闇の書の意志が呟いたのと同時に、爆煙の中からボロボロになった
リインフォースが落下していき

ガアアンッ

はやての横に身体を打ち付けた。

「……これで終わりだ。お前の主と共に消える。」
闇の書の意志は、腕を空に向けてに上げ魔力を収束して巨大な球体
を形成した。

ディアボリックエミッションである。

Side：リインフォース

落下しはやての隣に激突したリインフォースはわずかに残った意識を繋ぎ止め薄目で上空を見てみると、闇の書の意志が巨大な球体を形成して構えているのが見えた。

「ここまで……なのか……。」
リインフォースが諦めかけたその時

「……………諦めたら……あかん!!」
そんな声が聞こえ、リインフォースが横に目を向けると

「我が……主……………」
先程まで、気を失っていたはやてが目を覚ましていたのだ。

「諦めたらあかんでリインフォース……………最後の最後まで頑張るんや。」

「しかし、もう打つ手がほとんどありません。」

「前にも言ったやろ？リインフォースのマスターは私や。無茶は無

茶でも気合で道理を引つ込ます程度の手は持ってきてあるんや。」

「えっ？」

リインフォースは驚きはやてを見つめる。

はやての顔には優しさとそして自身に満ち満ちていた。

「融合システムの裏技!!!リインフォースが私にユニゾンするんやなくて……私がリインフォースに融合するんや!!!」

「そ……それは……!!!」

「そんならいけるよ……戦える。」

「ダメです!!貴方への負担と危険が、大きすぎます!!!」

「へーきや。魔力制御の練習……リインフォースやシャマルに見てもろつてちゃんと毎日してきた。」

「ですが……。」

リインフォースは取り乱さんばかりにはやての提案を否定する、しかしはやては慌てず表情も変えずにリインフォースを見つめる

「それにこんな程度のこと、わたしの大事な祝福の命……削らせるんは絶対イヤや。」

「…………我が主…………。」

「ずっと一緒やったし…………これからも一緒や…行こう？……………リインフォース！」

「はい…………我が主！！」

リインフォースもはやての目を見つめ二人は頷き、手を繋いだ。

「これで…………終わりだ！！」

それと同時に、闇の書の意志が二人目掛けてディアボリックエミッションを放った。

それは、轟音を立てながらはやてとリインフォースに迫ってきた。

その時

「ユニゾン！！」

「……インツ！！……！！」

掛け声と共に、二人の身体から眩い光が放たれその光によってディアボリックエミッションも崩れ去った。

「どづいう事だ！？一体、何が起こったと言うのだ。」
闇の書の意志が突然の事態に驚いていると、光の中から空に向かって一筋の光が伸びそこから出てきたのは

栗色の髪を風にたなびかせ、同じく栗色の瞳と鋭い眼光で闇の書の意志を見据えるリインフォースであった。

「融合率96%……この……力は……！！！」

「>ゆったやるー？夜天の主と祝福の風は……一心同体やって。」

「はい！！！」

リインフォースの中よりはやての声がして、リインフォースは嬉しそうに頷いた。

そして自身の身に湧き上がる温もり、主との絆を感じた。

「>そして、いつかはうちと悟空さんも一心同体（性的な意味で）に……ふふふー！！<」

「……我が主……。」

「>……はっ！！……ああ、そやったなさあ行くで、リインフォース

「!!<」

「……はい、我が主!!」

Side：闇の書の意志

どういう事だ！？奴の魔力が急激に上がった………そうか!!ユニゾンか、しかも主の方がユニゾンするとはな。

闇の書の意志は、はやてとリインフォースの奇想天外な行動に驚いていた。

すると、目の前にユニゾンしたリインフォースが現れた。

「>さあ、これであんたはもうおしまいや!!うちとリインフォースの力を………。」<

「お前に見せてやる!!」

はやての言葉にリインフォースが指を指しながら続けて言った。

「力を見せてやる………だと?…どうやらお前は私に勝つつもりでいるようだな。」

「ああ、私はお前に勝ってみせる!!」

シュッ

リインフォースはそう言つと、高速移動で消え

ドゴオンッ

「かはっ!?!」

「我が主と共に!?!」

闇の書の意志の腹に拳をめり込ませた。

は、速い!?!……いや、スピードだけではないパワーも異常に上がっている!?!

ドガアッ

「がっ!?!」

闇の書の意志が心の中で驚いていると、頭にリインフォースの肘打ちを受け思考を停止させた。

「はあぁ!?!」

ドガアンッ

「ぐあっ!?!」

さらに、リインフォースは前屈みになった闇の書の意志を蹴り上げ

「ふっ!?!」

バキインッ

「がぁっ!?!」

高速移動で先回りし、空中から殴り落とした。

しかし

「はぁっ!?!」

闇の書の意志は、魔力を放出してブレーキをかけ止まった。

「ふっ、どうやら少しはマシになったようだな。」

「当たり前だ!!これが私と我が主の力だ!!」

リインフォースはそう言うと、闇の書の意志に突っ込み拳をつきだしたが

バシインッ

「くっ!?!」

リインフォースの拳は軽く掴まれてしまった。

「だが、私も負けはしない!!」

闇の書の意志はリインフォースの拳を掴んだまま引き寄せ

ドゴオンッ

「がっ!?!」

腹に膝蹴りを入れ

「たぁぁ!?!...」

バキインッ

「ぐはっ!?!」

怯んだリインフォースに身体を捻り横腹に回し蹴りを叩き込み横に吹っ飛ばした。

「くっ!?!」

吹っ飛ばされたリインフォースも魔力を放出させ止まった。

「だ、大丈夫ですか!?!我が主!?!」

「>げほっ!?!...ごほっ!?!<」

「くっ!?!(これ以上戦いが長引くと我が主の身体が耐えられない!?!)」

そう、ユニゾンをして融合しているためリインフォースとはやては肉体だけでなく感覚も共有しているためはやての身体にもダメージがあるのである。

しかも、はやての身体はリインフォースのように頑丈ではないためダメージがかなり大きいようである。

「>だ、大丈夫や...うちの事は気にせんと思い切りやってええで!?!<」

「しかし!?!?.....分りました!?!」
リインフォースは一瞬戸惑ったがはやての応えようと思り返事をした。

そして、リインフォースは両拳に力を入れ

「>はあああああつ!!!<」

リインフォースとはやては同時に雄叫びを上げた。
すると、身体から大量の魔力が放出された。

そのままリインフォースは、魔力を纏ったまま闇の書の意志に向かって飛んだ。

Side: 闇の書の意志

「しぶといな。」

こちらに向かって飛んでくるリインフォースを見て呟いた。

そして、リインフォースは闇の書の意志の前で止まった。

「これから私も本気で行くぞ、覚悟しろ。」

「望むところだ、決着をつけよう。」

そう言うと、二人はそれぞれ拳を構え

「はあああっ!!!!」
同時に踏み込み拳と拳をぶつけ合わせた。

「だああっ!!!!」

「はああっ!!!!」

そして、そこからラッシュの激突に突入した。

両者一步も譲らない攻防が続いたが

「くっ!?!」

闇の書の意志の方が顔をしかめ、徐々に押され始めていた。

そして

バキィーンッ

「かはっ!?!」

リインフォースの拳が闇の書の意志の腹にめり込み、一瞬怯んだ。
リインフォースはそのチャンスを見逃さず

ドガガガガガッ

一気にラッシュを叩き込んだ。

「>そや!!!そこや!!!やったれリインフォース!!!<」

「はい!!我が主!!」
はやてのエアールにリインフォースは応え、止めどなくラッシュを叩き込み続けた。

ある程度叩き込み続け

「とどめだ!!」

そう言うと、リインフォースは闇の書の意志の首に手刀を放ち

バキイインツ

「がつ!?!」

キリモミ状に横へぶつ飛ばし

シュツ

「はあっ!?!」

ドゴオオンツ

「かはっ!?!」

高速移動でぶつ飛んでいく闇の書の意志の上に移動し、肘を背中に叩き込み下へ落とした。

そして、闇の書の意志はビルの屋上に激突し、そのままビルを貫き地面に落ちた。

さらに、倒壊したビルの破片がその上に覆い被さり埋めた。

Side：リインフォース

「>やったで、リインフォース！！うちの勝ちや！！<」

「そう……でしょうか？」

心の中ではやては喜んでいたが、リインフォースは何故か浮かない顔をしていた。

「……どうしたんや？リインフォース……。」

「いえ、何か嫌な予感が……。」「
リインフォースがそこまで言ったその時

ドガアアアアッ

「っ！？」

突然、ビルの残骸が吹き飛ばされた。

そして、そこにいたのは紫色のバリアを張っている闇の書の意志であつた。

「なにっ！？」

「>んなアホな!?!<」
リンフォースは目を見開き、はやても声を上げ驚いた。

Side: 闇の書の意味

「はあ…はあ…さすがに強いな。これがユニゾンの力か。」
バリアでビルの瓦礫を防いだためダメージはないようだが息が上がっていた。
どうやらバリアにかなりの魔力を注ぎ込んだようだ。

「ぐっ!?! (かなり魔力を消費したな。)」
そして、闇の書の意味は片膝をつき息を整えた。
少して、息を整え終えたのか闇の書の意味は立ち上がった。

「魔力が尽きかけてきている……。」
そう言って、自分の腕に目を向けるとジジジッとテレビのようたぶ
れていた。

その時

「はあああああっ!?!?!?!」

「っ!？」

突然、上空から雄叫びが聞こえ不意に上を見るとリインフォースが両手を腰の辺りに構え魔力を収束させていた。

「……………ふっ……………」

それを見た闇の書の意味は不気味に口元を吊り上げた。

Side:リインフォース

「> 案外、しぶといやつやな。<」

「はい。しかし、そうでもないようですね。」
片膝をついた闇の書の意味を見ながらリインフォースは言った。

「我が主、ここはアレでトドメを刺しましょう。」

「> アレをやるんか？ オツケー、ええで!!<」

リインフォースがアレと言うと、はやてはすぐに答えた。

そして

ガッ

リインフォースは両手を前に出し両手首をぶつけ揃えると、そのまま腰の辺りまで持っていた。

すると、

ギューイイイイッ

リインフォースの魔力と周りの残留魔力が収束され、青色のエネルギー球を作り出した。

その姿は、悟空のかめはめ波の構えにそっくりであった。

「喰らえ!!これが……。」

「>悟空さん直伝の大技!!<」

「>>かめはめ波だ(や)!!<<」

そう叫ぶと、リインフォースは思いきり腰の辺りに構えていた両手を前につきだしエネルギー波を放った。

リインフォースとはやてが勝利を確信した。

その時

バツ

「>>つ!?!<<」

闇の書の意味は突然両手を左右に広げ自ら無防備な状態になった。

そして、そのまま闇の書の意味に直撃したが……なんとかめはめ波は直撃と同時に四散しさらにその散らばった魔力の粒子が闇の書の意思の身体に吸収されてしまった。

「な、なにっ!?!」

「><、悟空さん直伝のかめはめ波が……き、吸収されてしまった………。」

リインフォースとはやては、悟空直伝の必殺技『かめはめ波』が吸収されてしまった事にショックを受けていた。

その時

ドゴオンッ

「があっ!?!」

突如、腹に衝撃を受け苦痛の声を上げた。

リインフォースがその衝撃の元を辿ってみると、先程まで地上にいた筈の闇の書の意味が目の前にいてリインフォースの腹に拳をめり込ませていた。

「なっ!?!…い、いつの…間…に…!?!」

「ふふっ、感謝するぞ。お前のおかげで私の失っていた魔力を補給する事ができた。」

「ま、魔力…を補給だ…と…!? ……な、何故…そんなこ…とがで
きる……………」
「リインフォースが苦痛に耐えながら訊いた。」

「理由は簡単だ。私とお前は元々一つの存在だからだ。」

「なにっ!?!」

衝撃的な答えにリインフォースは驚愕の表情を浮かべた。

「だが、転生能力の際二つの存在に分かれてしまった。」

「……………」

「……………話はこのままで!?!」

ドゴオンッ

「ぐっ!?!」

そう言いつと、闇の書の意味はその場で身体を捻り回し蹴りを頭に放ち

ドオオオンッ

地面に叩き落とした。

パアアアンツ

地面に叩きつけられたリインフォースはその場でユニゾンが解けてしまった。

「ぐっ！？…ユニゾンが…！！…わ、我が主！？大丈夫ですか！
！」

「くっ！？…ち、ちよつと大丈夫……じゃあらへんな。」
そう言いながら、はやてはシュベルトクロイツを杖代わりにしてロボロの身体を無理矢理立たせ、苦笑いを浮かべた。

「うちらじゃ、倒せへんのかな……。」
はやてはそう言うのと、暗い表情になり顔を俯かせた。
リインフォースも顔を俯かせ拳を強く握った。

しかし

はやては、俯かせていた顔を勢い良く上げた。

「だめやだめや！！諦めたらあかん！！悟空さんだって言うてたやん“諦めるな”って、だから諦めたらあかん！！」
顔を上げたはやてはそう言うって、自らを奮い立たせた。

「……そうですね、諦めたらいけませんね！！」
そして、リインフォースも自らを奮い立たせた。

「……でも、どうしやったら倒せるんやろ……。」
奮い立たせたのも束の間、再び落ち込みながらはやては呟いた。

「……砲撃系の攻撃がすべて吸収されるとなると、やはり打撃系の攻撃で倒すしかありませんね。」

「そつやな!!」

そして、二人は再び空へ飛んでいった。

「はあああつ!!」

空へ飛びリインフォースはすぐに闇の書の意志に攻撃を仕掛けた。

しかし

闇の書の意志は完全に見切ったのかリインフォースの攻撃をすべて紙一重で避けている。

「たあああ!!」

そして、リインフォースは蹴りを放ち闇の書の意志がそれを後ろに下がり避けた直後

ヒュヒュヒュヒュンッ

リインフォースの背後から剣型の魔力弾が飛んできたが

ババババリィンッ

闇の書の意志はそれを拳で叩き落としてしまった。

そして

「ブラッディダガー。」

魔力弾を破壊した直後、闇の書の意志は自分の周りに無数の赤いダガーを出現させ前方に投射した。

「くっ!?!」

リインフォースはシールドを張り、後方にいたはやてもシールドを張って防いだ。

しかし

パライインツ

「ふんっ!?!」

ドゴオオンツ

「がはっ!?!」

闇の書の意志がリインフォースに急接近し、シールドを殴り割り腹に拳を叩き込んだ。

「リインフォース!?!」

はやてはリインフォースがやられているのを見て助けようと飛び出した。

だが

「はあっ!?!」

バキイインッ

「きゃあああっ!?!」

闇の書の意志の蹴りをまともに喰らい吹っ飛ばされ

バコオオンッ

「あぐっ!?!」

地面に叩きつけられた。

「我が主!?!……くっ、このっ!?!」

はやてが攻撃され、リインフォースは怒り任せに拳を振るい闇の書の意志に向かっていったが

ガシッ

「なっ!?!」

リインフォースの拳を軽々と受け止めた。

「今のお前では相手にならん!?!」

ドゴオオンッ

「がっ!?!」

闇の書の意志はそう言うと、リインフォースの腹に膝蹴りを放ち

「ぶっ!?!」

バキイインッ

「かはっ!?!」

さらに前屈みになった顎に拳を叩き込んだ。

そして、空中で仰向け状態になったリインフォースの真上に移動し

「これで終わりだ。」

ドオオオオオンッ

「うあああっ!?!」

至近距離からの砲撃をまともに喰らい地上へ落ちていった。

S i d e : はやて

「あっ……ぐ……り、リインフォース……。」

はやては砲撃をまともに喰らい地上に落ちていくリインフォースを見ている。

うちが、しっかりせな!!みんなを守らなあかんのや!!

心の中でそう言うと、はやては軋む身体に鞭を打ち無理矢理立ち上がらせた。

その動作の途中、傷口が開いたのか頭から血がポタポタと垂れた。

「はあ……はあ……ぐうっ!?!」

守らな、守らなあかんのや!!もう目の前で誰も死なさへん!!

そして、はやてはスレイプニールを発動させ空へ上がった。

S i d e : 闇の書の意志

「…終わったか……。」

「まだや!!」

闇の書の意志がそう呟いたその時、後ろから声が聞こえ振り返ると

「はあ…はあ…はあ…。」

息を荒くさせ、頭から血を流し、こちらに杖を構えたはやてがいた。

「まだ……やるのか？」

「当たり前やろ!!あんたはここで倒さなあかんのや!!」

そう言っつて、はやては魔力弾を生成し

「いつけー!!」

闇の書の意志に向けて撃った。

そして、次々と魔力弾を生成して撃ち続けた。

だが

「無駄だ。」

闇の書の意志は、両腕を左右に広げ次々と飛んでくる魔力弾を吸収していった。

「まだまだや!!」

それでもはやては魔力弾を撃ち続けた。

Side：リインフォース

「まだまだや!!」

「……うっ……!!?」

自分の主の声が聞こえ、リインフォースは少しずつ意識が戻ってきた。

そして、空を見上げはやてが闇の書の意志に魔力弾を撃ち続け、その魔力弾が吸収されていく光景が目に入った。

それを見てリインフォースはやてに向かって駄目だと言おうとしたが

「…んっ!?!」

闇の書の意志の体勢を見て記憶を振り返してみた。

「（私の砲撃を吸収した時、かめはめ波を吸収した時も奴はあの体勢を取っていた……………！？）」

そして、あることに気付いた。

「（そうか！！奴は魔力を吸収する際、必ずあの体勢を取らなければいけない！！その上、吸収している間奴はその場から身動きが取れなくなる！！…ならば……………。」

リインフォースは立ち上がり、渾身の力を込めて魔力を集中させた。

「（…ならば、その時が奴に攻撃できるチャンスだ！！）」

そして、リインフォースははやての魔力弾を吸収し続けている闇の書の意志に向かって飛び出した。

「くうっ！？（も、もう…そろそろ…魔力が底を尽きそっや……………。」

「無駄だと言っているだろう。そして、魔力が尽きたその時お前は終わりだ。」

「終わるのは貴様だ！！」

「なにっ！？」

「リインフォース!?」リインフォースの声を聞き、二人驚いた。

その間にもリインフォースは闇の書の意志との距離を縮めていった。そして、リインフォースは拳を強く握りしめ魔力を込めた。

「私のすべてをこの拳に……賭ける!!」

「っ!?!?…しまっ……。」

闇の書の意志はやられる悟り、振り向き防ごうとするが時すでに遅し

「つらぬけええっ!!」

ドシューウウウツ

「がぁっ!?!?」

リインフォースは闇の書の意志の身体を言葉通りつらぬいた。その証拠に、闇の書の意志の身体には鳩尾を中心に大穴が開いていた。

そこにさらに、追い討ちをかけるように

「今度は、うちの番や!!」

はやてが特大砲撃の準備に入っていた。

「そんな……もの……き、吸収して……。」

「ちょっと遅いで!!…喰らいや!!…ラグナロク!!」

ドバアアアアッ

「あああああっ!!???」

吸収しようとして両腕を広げようとした闇の書の意志にはやての砲撃がもろに直撃し闇の書の意志は断末魔を響かせながら大穴を中心に身体が崩壊していきついには塵一つ残さずに完全消滅してしまった。

それと同時に、結界がガラスのように粉々に割れた。

それは、闇の書の意志との激闘の終わりを知らせる合図でもあった。

S i d e : はやて

「はあ…はあ…や、やっと終わった……。」
はやては乱れる呼吸を整えさせながら呟いた。

そして、呼吸を整えさせるとはやてはリインフォースに向かって飛んでいった。

「リインフォース!!大丈夫やったか?」

はやてがそう言いながら、リインフォースに近付いていった瞬間

パリーンッ

と、何か割れるような音が後ろから聞こえ、突然はやては浮遊感を感じた。

そして、音の発生源である自分の背中に目を向けると黒い羽根が跡形もなく消えていた。

それはつまり、飛行魔法であるスレイプニールが解除されてしまった証拠である。

当然、はやては焦った。それもそのはず、はやてがいるのは地上から100m以上はある上空落ちたら命はない。

「ひゃあああっ!?!」

はやては落ちると思い悲鳴を上げ目を瞑ったその時

ポフッ

突然、誰かに抱き止められた。

一瞬リインフォースかと思ったがまだこちらに向かってきている途中であった。

すると

「大丈夫?はやてちゃん。」

「へっ!?!?な、なのは…ちゃん。」

いきなり目の前に親友のなのはの顔が写った。

そして

「わりいな、はやて。遅くなっちゃった。」

「あつ……。」

聞き覚えの声が聞こえ、はやてはそちらに視線を向けた。

「悟……空……さん……。」

「おう!!」

そこには、自分の好きな男性の笑顔があった。それを最後に、魔力を極限にまで使用した反動かはやては意識が遠くなくなっていった。

Side: 悟空

「ありつ? おゝい、はやて、はやて?」

「あつ!?! 悟空さん、はやてちゃん気を失ってますよ!?! それに傷だらけ!?!」

「いいっ！？ホントだ！！…はやてのヤツそうとう頑張ったんだな。」
「そう言っつて、悟空ははやての顔を見ながら笑った。」

「悟空。」

「おう！！リインフォース…っつて、おめえ大丈夫か？」

「ああ、我が主ほどではない。…かなり苦戦したがな。」

「そっか、おめえそう言っつんだすんげえ強かったんだろっな。」

「ああ。」

「…っつて、それより悟空さん！？早くはやてをシャマルさんの所に連れていかないと！！」
悟空とリインフォースが話をしていると、横からなのが叫んだ。

「んっ？ああ、そうだった！！よし、んじゃシャマルの所まで瞬間移動すっからよ二人ともオラに掴まってくれ！！」

「はい…！」

「わかった。」

そう言って、リインフォースは悟空の肩に手を置き、なのはは腰辺りの胴着を掴んだ。

「よし、いくぞー!」

ピシュンッ

そして、悟空達はその場から姿を消した。

第二十四話自分を越える！！リインフォースVSリインフォース！？（後書き）

オッス、オラ悟空。

はやてとリインフォースの激闘も終わって一安心したのも束の間、
今度はザフィーラの所に新たな敵が現れたんだ。
それも、フェイトにそっくりなヤツみてえだ。

次回・魔法少女リリカルなのは S

フェイトにそっくり！？マテリアル雷刃の襲撃者出現

「僕は、雷刃の襲撃者だ。どうだ凄いだろ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2846k/>

魔法少女リリカルなのはA's Z

2011年4月4日13時06分発行